岩波文庫

991—992

芭蕉書翰集

勝峯晋風編

岩波書店

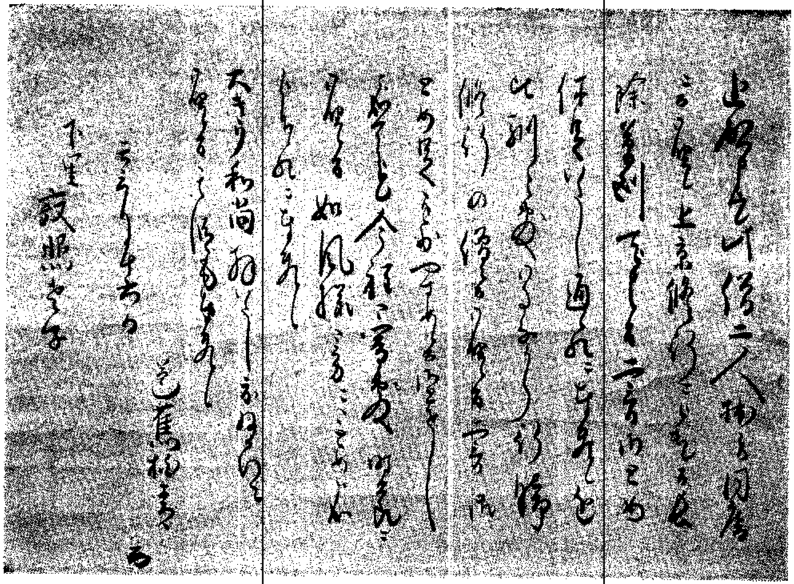
岩波文庫

991-992

芭蕉書翰集

勝峯晋風編

岩波書店


和尚
桃青
下里

貞享三年閏三月十六日附で、尾張鳴海の知足齋事下里寂照宛に、同庵の僧宗波、鐵道を紹介せる書狀である。寂照筆錄の『知足齋日々記』に同じく閏三月廿三日雨僧が「江戶桃靑狀にて」來つて二泊した記事があるのと一致する　下里氏は家號を千代倉と呼び、寶永の頃下鄕の字に改稱したので、書狀は現代下鄕次郎八氏の許に傳來所藏されてゐる。（本文四十一頁參照）

汎　例

一、編者所見の眞蹟を主として芭蕉の書翰合計三百三十一通を整理し、確實性あるものは年代別に掲げ、是に存疑、假作を添へて、岩波文庫の一編に充て得たのは編者の喜びである。

一、書翰の年次の明瞭でないものは、筆蹟の鑑査、挿入句の年考、及び發信の場所、宛名の人物との關係、内容上から推定したのである。猶お氣附の事どもあらば識者の示教を仰ぎたい。

一、傳來及び所在は書翰の確實性を證する一になるので、古俳書、古寫本所載のものの書名を擧げると共に、各通毎に所藏者名を附記して置いた。

一、確實性のあるもの二百六十四通假作三通の外に、疑ひを存ぜる六十四通中には今後の考證又は新資料に接すれば、或は確性實の再認せらるゝものが出るであらう。その機會の來らんことを望んでゐる。

一、芭蕉の書翰集として知らるゝ『蕉翁消息集』及び高安月郊氏所藏の『芭蕉翁眞蹟拾遺』その他は參照、採錄したが、僞書『翁反古』所載のものは全部除外して一通も採用しなかつた。その理由は別に述べる。

一、編者の實際に鑑賞した眞蹟は各所藏者の好意によるので、特に東京の大橋新太郎、菊本直次郎兩氏、大阪の北田彥三郎、土居剛吉郞兩氏、芭蕉時代より連綿たる名家尾張鳴海の下鄉次郎

八、名古屋の澤市郎右衞門兩氏の快諾を得た事をこゝに感謝する。

一、然も猶全國、朝鮮に渉つて所在するので、先輩、知己の配慮により、その本文を寫眞に或は筆寫して報ぜられたものは、一應これを吟味して私見を附した僭越を許されたい。

一、書翰の蒐集に就いて東京の河東碧梧桐、大阪の野田別天樓、名古屋の石田元季、近藤三川、金澤の殿田良作、桂井未翁、伊勢の故鈴木芦竹諸氏の援助に據るところ多大であつた。

昭和九年二月廿七日　　　　勝峯晋風

芭蕉書翰集年代別目次

延寶年代（四通）……（九）
天和年代（七通）……（一三）
貞享年代
貞享元年（十五通）……（一九）
貞享二年（十二通）……（三〇）
貞享三年（七通）……（三七）
貞享四年（八通）……（四三）
貞享年中（十二通）……（四九）
元祿年代
元祿元年（三十通）……（五五）
元祿二年（二十一通）……（七七）
元祿三年（三十六通）……（九二）
元祿四年（三十六通）……（一一九）
元祿五年（十五通）……（一四四）

元禄七年（三十六通）……（一六六）
元禄年中（十通）……（一九四）
遺言状（四通）……（二〇〇）
存疑（六十四通）……（二〇四）
假作（三通）……（二四四）
解説
芭蕉書翰考（勝峯晋風）……（二四七）

芭蕉書翰集

木因宛　　延寶九年

鳶評論、一日芭蕉翁より文通あり其書面

當地或人附句あり此句江戸中聞人無㆓御座㆒候。予に聽評望來候へ共、予も此付味難㆑辨依㆑之御内意賴進候。貴丈御閑定の旨趣ひそかに御知せ可㆑被㆑下候。東武にひろめて愚の手柄に仕度候。

其附句

蒜の籬に鳶を詠てといへる前句に

鳶のゐる花の賤屋とよみにけり

二月上絃　　はせを

木因樣

其返書

花牒拜見、或人の附句貴丈御閑定無㆑之依㆑之愚評之儀被㆓仰越㆒候。予猶考に落不㆑申、乍㆓殘念㆒及㆓返進㆒候。隨而下官去比在京の節古筆一枚相求、此切京中に定ル人無㆓御坐㆒候。依㆑之貴丈御内意賴進申候。何レの御字御撰集筆者等貴丈御見定之旨趣ひそかに御知せ可㆑被㆑下候。花洛にひろめて愚之手柄仕度候。

其故筆

菜園集 巻七 春 誹諧哥

蒜のまかきに鳶の居るを詠侍りて

鳶の居る花の賤屋の朝もよひ

木をわる斧の音そ聞ふる

イニ(まきたつ山の煙見ゆらん)

二月下絃　　木因

芭蕉翁

右之旨御心に叶候哉返翰之奥章如左

株河の翁こそ予か思ふ所にたかはす鳶の句の評感會奇に候。江戸衆闘人なきと申は聊僞、彼翁か心を試ん爲に候。爰元にも珍しとのみいふ人三分、同物に同物付たる古今類なきと云捨たる人二分、道をないかしろにして云たき事いはるゝなど嘲る野輩もたまへ在レ之、予が志を了察の士も一兩人は在之候を、千里を隔て自慢云散したるも還而愚盲の至に御座候へ共、日來彼翁此道知りたる人と定置候へ者、聊了簡引見む爲書付遣候所、愚案一毫の違無二御坐一候。寔に不レ淺候。

自讃之詞

古往達人花に櫻を附るに同意去を本意といへり。増て鳶に鳶を付て一物別意を附分、當時未來の作者に此句を似せさせず、古往今來未來一句の格、何の時か秋風來て芭蕉の露もろく破れむ迄の一句一生、是のみに存斗に候と書內、鼻高くおこめき肩のあたり羽たゝきするやうに候。

はせを

註、本文は大阪の北田彦三郎氏所藏の木因自筆で、美濃の東氏に與へた奧書あるものに據る。柴田宵曲氏發表の谷七太夫氏所藏及び『芙蓉文集』『蕉翁消息集』に掲ぐるものと文字に相當異同がある。

夆月宛　延寶年中

追而申入まゐらせ候。其許に逗留中に淸草御歸りに御約束申候短册、此度遣し申度存候へつれども二三度ばかり認め申候處、さん〲不出來見苦しく候故、其許へ御出節御尋候はゞ、此段御申達可レ被レ下候。何方へもたんざく御免し被レ下候樣申事に候。我等手跡にては及びがたく候。發句は書入進申候。

わすれ草菜飯に摘ん年のくれ

如レ此に御坐候。能々御申可レ被レ下候。又重而宜しく出來候はゞ其節進じ可レ申候。以上

廿二日　はせを

夆月丈

註、句は『江戸蛇の鮓』に見えるが、文通の年次は「わすれ草」の句を手掛りとすれば延寶頃のものと云へる。本文は湖中の『俳諧一葉集』に據る。

三千宛　延寶年中

嬉しからぬ月日身につもりて、といふ事を題にしてヒナヤ立甫ノ句

はななりし身をば何とて捨坊主

いづれにもおもしろき句に候。我も此心とりて

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

いかゞあるべく候哉、此句風情おもく立圃句かるくおもしろく候。とかく上手と下手の違、はづかしき物に候。以上

十五日　　　はせを

三千丈

註、立圃の句は西行の像賛に「武藝人にすぐれ和歌管絃の道をえて家の内をかざり朝恩他にこそなりし人の」の詞書があるもので、芭蕉の句は『江戸蛇の鮓』(延寶七年刊)に出てゐる。東京石井清秀氏の所藏である。

木因宛　　　天和三年

遠路貴墨干白魚一籠被レ懸二御意一御心指御懇情忝奉レ存候。愈御無異之旨珍重不レ過レ之候。野翁無レ恙閑居に罷在候。其御元御暇なき折々も人に御すゝめ被レ成候由、感心不レ淺奉レ存候。愈御情被レ入御連中御引立可レ被レ成候。荆口丈御作などは如何とも可レ成御器量に相見へ候。嗒山丈御作如何成行申候哉。是又承り度候。且貴翁御發句感心仕候。猫を釣夜其氣色眼前に覺候。七ツ半近し□是猶妙、御作意次第改る樣に覺珍重、兎角日々月々に改る心無レ之候て

は、聞人もあぐみ作者も□付事に御座候へば、隨分製心御兩人に御いさめ可レ被レ成候。
一當春付句懸二御目一候處、御評具に致二拜見一大慶不レ淺義に御坐候。其返事濁子丈へも先達申通候間追而相違可レ申候。

梅　柳　嘸　若　衆　哉　姿　哉

上巳

袖よこすらん田螺の蜑の隙をなみ
あさつきに祓やすらん桃の酒　其角
梅咲り松は時雨に茶を立る比　杉風
櫻かり遠山こぶしうかれたる　嵐蘭
主悪し桃の木に竿もたせたる　同
艶（ヱンナル）奴今やう花にらうさいス

御使またせ置貴報相認候故、早筆に及申候。唯今桑名に御滯留のよし會可レ被レ成候はゞ、懐帋御見せ可レ被レ下候。來る卯月末日比には必上り可レ得二御意一候。　頓首

三月廿日　芭蕉翁拜

木因雅丈ゑ

尙々濁子丈御隙無二御座一候哉。出合も斷切作意も上り不レ申氣の毒に存候。嗒山丈御油斷なく御情差入樣に貴翁御指引御尤に奉レ存候。是又白魚之書付風流猶感心過

當之至に存候。

註、柴田笥浦氏が木因の後裔なる大垣の谷七太夫氏の許で一覽したよしを氏から直接聞いたが、氏の著『谷木因』に收めてある。本文の「來る卯月末日比には必上り」で見ると『野ざらし紀行』前年の文通であらう。

驟塒宛　　天和三年

五月十五日　　松尾桃靑　書判

高山傳右衞門樣

貴墨忝致ニ拜見一、先以御無爲被レ成ニ御坐一候珍重奉レ存候。私無ニ異義一罷有候。仍而御卷致ニ拜吟一候。尤感心不レ少候共、古風之いきやう多御坐候而、一句之風流おくれ候樣に覺申候段、近比御尤先は久〻爰元俳諧をも御聞不レ申哉。其上、京、大坂、江戶共に俳諧殊之外古く成候而、皆同じ事のみに成候折ふし、所々思入替候を宗匠と申者もいまだ三四年已前の俳諧になつみ、大かたは古めきたるやうに御坐候間、學者猶俳諧にまよひ、爰元に而も多くは風情あしき作者共みえ申候。然る處に遠方御へたてに而、此段御のみこみ無ニ御坐一御尤至極に奉レ存候。玉句之內三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如レ此に御坐候。

一一句前句に全躰はまる事古風中興共可レ申哉

一俗語の遣ひやう風流なくて又古風にまぎれ候事

一一句細工に仕立候事不用之事

一古人の名を取出て何〻の白雲など〻言捨たる事第一古風に而候事

一文字あまり三四字五七字餘りに而も句のひゞき能候へば、一字に而も口にたまり候を御吟味可レ有候事

子供等も自然の哀催すに

つはなと暮て覆盆子刈原　才丸

賤女とか〻る蓬生の戀　同

よこし摘あかさか薗に垣間みて

今や都は饅を喰らん　其角

夕端月蕪ハはごしに成にけり

といはれし所杉郭公　同

心野を心に分る幾ちまた

山里いやよのかる〻とても　町庵

餇賣聲に酒の詩を賦ス　愚句

葛西の院の住捨し跡

ずいきの戸蕗壺の間は霜をのみ　同

註、宛名の高山傳右衛門は上野高崎の人で、麋塒と號し、天和三年芭蕉と三吟歌仙を行つてゐる。本文は白亥の『眞澄の鏡』に發表したものである。

任口宛　　　天和三年

追而申入候。内々之事は如何被レ成候哉。是もすてはおかれまじくやうに存候。貴丈にも萬事氣の付人に候得ば定而ぬかりはあるまじくと存候。ひよと我らも口を添候故、心もとなく存候。ひきやく便に樣子等こま〳〵御申越可レ被レ下候。夫に付此ほくいかゞ、

花にうき世我酒白く食黒し

此は句のこゝろに身持可レ被レ成と存候。言水など共御出合之節はよく〳〵御頼可レ然候。頓而之内に上京候而可二申承一候。

廿二日　　　　　　　はせを

任口丈

註、任口は伏見西岸寺の寳譽上人で、句は『虚栗』に出てゐる。本文は藻魚庵太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』に收めてある。

其角宛　　　天和三年

もろこし我朝にもろ〳〵の上戸たちの沙汰し申さるゝさかもりにもあらず、又かちんをくひ茶をのみてのめる酒にもあらず。只わうじやう極樂のためには南無阿彌陀佛と申て、うたがひなく往生するぞとおもひとりて一杯のむより外別の子細は候はず。但三獻四種の肴など申ことの候は、酒宴も決定してめづらしき酒肴もとめたるとおもふうちにこもり候也。此外におくふか

き大盃は、二尊の御あはれみにはづれ本性を失ひ候。くこんを愛せん人はたとへ一代の法を學ずとも、一文不智愚鈍の身になして下戸にも常にふるまはせて唯一向に酒をのむべし。

右、飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承候。尤さる人の許に御直筆にてかけ物にして床にかゝり有レ之候。あまり〳〵面白御作故ちよと寫し來候。貴丈つね〳〵大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒は御無用存候。仍一句

朝顔に我は飯くふ男かな　はせを

いかゞ、くはしき事は頓て御めにかゝり万々可二申述一候。以上

十七日　はせを

其角丈

註、句は『虚栗』に「和二角蓼螢一句」とあつて、其角の句「草の戸に我は蓼くふほたる哉」に對して作つたのである。
本文は耳得の『芙蓉文集』に出てゐる。『蕉翁消息集』にあるのは其の轉載である。

季吟宛　天和以前

今日秋風歸申候に付申入候。彌御堅固可レ被レ成二御座一と奉レ存候。然は清水千句之書付先方ゟ返し申候はゝ暫く借用申度候。其節御しらせ被レ下候はゝ上京可レ仕候。

世中はさらに宗祇のやどり哉

季いかゝおほし被レ成候哉。御聞かせ被レ下度候。キ翁御返簡頂度候。他所へも申遣たく存候。

御世話なからちよと御願申候。草々以上

十八日　　はせを

季吟様　　貴様

註、金澤市里見町の桂井未翁氏舊藏で句は『虛栗』に上五「世にふるも」と出てゐる。文字を圍つた個所は不明とされた點を編者の推讀補入したのである。

雲竹宛　　天和年中

去來方へ申遣候付乍レ序申入候。爾御堅固珍重不レ過レ之候。御手本の風義に随分認見候得共、下地不器用もの故に移り兼申候。御直し可レ被レ下候。然は時鳥の發句の事被二仰下一候。依レ之

ほとゝきす正月は梅の花さけり

あまり宜無二御座一候得共御尋に任せ申入候。又〻宜句も出候はゝ追〻可二申入一候。取込麁書御免可レ被レ下候。

九日　　はせを

北向雲竹様

註、句は『虛栗』にも下五「花咲けり」とあるので、暫らく天和年中の文通と見て置くが貞享四年説もある。本文は積翠の『芭蕉句選年考』に引用してある。

去來宛　　天和年中

月をわび身を侘つたなきをわびて、わぶとこたへんとすれど問ふ人もなし。猶わび〳〵て

わびてすめ月侘齋がなら茶哥　　はせを

九月十九日

去來樣

註、本文は闌更の『蕉翁消息集』に「加賀左菊所持」として揭げてある。句は『武藏曲』に出てゐる。

千那宛　　貞享元年

坂本にて一宿、早苗に鹿を追ふ聲なつかしく覺え申候。坂本の鹿いづれの秋にかと存る斗に御坐候。罷歸候得ば又いつ上り可レ申樣にも無二御坐一一しほ〳〵御ゆかしさのみに候。

下向の頃、桑名本當寺御會に

芒をきつて笘に茨けり

琵琶負て鹿聞にいる篠の隈

坂本を心の底に置候か

熱田會に

ひとり書を見る艸菴の内

二町ほど西に砧の聞ゆなり

重て委細に書付可ㇾ進候。

七月十八日　　　　芭蕉

註、文中の附合は『野ざらし紀行』の芭蕉自筆（菊本直次郎氏藏）に附記されてゐる。本文は士朗の『枇杷園隨筆』に「右千那、尚白、靑鴉におくり給ふ文」と掲げてある。

東藤、桐葉宛　　　　貞享元年

一、御俳諧よくぞやおもひ切て長〻敷物を點被ㇾ仰越ㇾ候。乍ㇾ去餘感心見るも面白く判詞不ㇾ覺手の舞足の踏事をしらず候。ケ程上達存もよらず、凡天下の俳諧にて御坐候間、隨分御敬候て御はげみ可ㇾ被ㇾ成候。秋登り候はゞ一板行とすゝみ申候。處〻根深き句とも見へ申候而天晴御作、愚鑿僻耳投ㇾ筆計に御座候。句評之事點は相違有物にて御坐候。其段常の事ながら其元ニ而俤ある事爰元ニては新敷、其地にて珍らしき句此地ニ而は類作有樣の事も御坐候物に御座候へば、句評ハ心にたがふ事も可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候。和哥の三神前後の點數かぞへ見不ㇾ申いづれの勝負しらず候。此處におゐて指南一言も無ㇾ御座ㇾ候。只自ㇾ是行先大切に御座候間、能〻御心をめぐらし御工案御尤存候。句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好候ハヽ頓而古く成べし。めづらし過候ハヽ飽心出可ㇾ申、こしやくに成候ハヽ後句石で手をつめたるやうになるべし。俳諧地をよく御つゞけ被ㇾ成、處〻風景句作ほのか成やうにあれかしと、此後の事を被ㇾ存るゝのみに御座候。此外申事無ㇾ

御坐ニ候へば不具頓首

三月十四日　芭蕉庵桃青

東藤子雅丈

桐葉子雅丈

註、宛名の兩名は尾張熱田の人で、尾張五歌仙の作者とは交渉なく、鳴海の知足との關係で蕉門へ歸依したのである。本文は關更の『蕉翁消息集』に「江州辻村梅仙所持」と見える。

哥笑宛　貞享元年

西行谷のふもとに

ながれあり女子ども

芋あらふを見て

芋あらふ女西行ならは哥よまん

此句致申候。キ樣には日來ケ樣成句を御好故態々一句書拔候而申入候。其外四五句斗も御座候得ども殘りはキ樣の氣に入申さず、又々近日に上京候まゝ諸事ハ面顏之刻可ニ申承ニ候。未くたびれもやみ不レ申候。筆跡ながら御母義樣へよろしくたのみ入候。かしこ

廿二日　芭蕉

哥笑丈

註、句は『野ざらし紀行』にあるので、近江堅田の哥笑へ、その頃文通したのであらう。哥笑四代の孫歌推が『堅田集』で發表し、蓼昌の『丸一年』にも載つてゐる。

貞享元年

哥笑宛

以二手紙一申入候。其後は御遠々敷候。彌御無爲御暮候哉承たく候。此表そく才に居り申候。さては次第〳〵に秋ふかく成申候。夜も長く一入俳心しみ可レ申候。仍而一句口すさひ申候に付

霧しくれ不二を見ぬ日そおもしろき

右之一句裏はらの一句いかゝ候哉。扨々むり万々に候。色々申つくし、仕かたも無二御座一候付如レ是に候。松風へよろしく御心得たのみ入候。取込早々申殘候。以上

十七日　はせを

哥笑丈

註、今は東京に轉住された大阪土居剛吉郎氏の藏藏である。句の年次は曉臺の『峽中之記』に見える。

貞享元年

半左衛門宛

われらが事まて八物忌などとんちやくいたすはづニ而も無二御坐一候へ共、一八あねの御恩難レ有、二、大慈大悲の御心わすれがたく色〳〵心を碎候へ共身不相應之事難レ調候。其身四十年餘寢てくらしたる段各〻樣能御存知ニ而御座候へバ、兎も角も片付樣之相談ならでは調不レ申、さて〳〵

遲外計申上候。御免可レ被レ成候。以上

八日　　　　　　　　　　　　　　桃青

半左衞門樣

註、伊賀上野町の田中善助氏所藏である。宛名の半左衞門は上野赤坂町に寓居した家兄松尾半左衞門である。

喜右衞門宛　　　　貞享元年

乍二御報一以二手紙一申入候。彌御別條無二御座一候哉承度存候。此元不レ替居申候。然は先日は思召寄候て珍敷一袋送被レ下、折節濃州ゟ客來候間すぐにもてなし別て賞味不レ淺忝存候。御物語にも御禮申入可レ給候。且又度ゝの御無心に候得共檜木笠一がい、いつも之通成を御調御下し可レ給候。殊之外やぶれ候而あまり〳〵見苦候間、はやく御越（遲）可レ被レ下候。近ゝに宮の方へ參候に付急にほしく存候。近頃御世話に候へ共賴入候。此一包其角へ御屆可レ被レ下候。用事申遣候間片時も早く賴入候。何も貴面ゝ。已上

九月十二日　　　　　　はせを

本屋喜右衞門樣

註、文中の「近々宮の方へ參候」は熱田の事なので『野ざらし紀行』の旅中の文通と思はれる。本文は月の本素水の『蕉註芭蕉一代集』に出てゐる。

落水宛　貞享元年

實やくれなゐは園生にうへてもかくれなし、名のらぬ先により政とも見ゆるほどの德あり。句を味ふ時はいづれの句にても、それ相應にとりなして其德をあらはし、政公にもおとるましやと、ひとり自慢たら〳〵申もいとはづかしく候。

雪の朝ひとり干鮭をかみ得たり
海くれて鴨の聲ほのかに白し

此二句申入候。追〻せいぼの句も貴樣方に出來可ㇾ申爲ニ御聞ニ可ㇾ被ㇾ成候。何事も跡〻〻。以上

十二日　桃青

落水丈

註、太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「右長州赤馬關桂一敬藏」として本文通り筆寫してある。

意水宛　貞享元年

五文字の長き句世にはやりけれは我も人のまねをするとて
冬の日凩の身は竹齊に似たる哉

右之句にてあるべく哉。外ニハさして覺へも無ㇾ之候。相違も候ハヽ又〻申こし可ㇾ被ㇾ成候。五

文字長き句外ニハいたし不レ申候。いづれても風流故かおもしろく候。キ樣にも此句之類を御意得候而一句可レ被レ成候。其節今も何角取紛候故亀筆申入候。冬中には罷こし候而面談可二申承一候哉。其ほどは駿ニしれがたく候。猶追ゝ可二申入一候。以上

十三日　はせを

意水丈

註、文學博士藤井紫影氏の所藏である。『冬の日』には「狂句」とあるが、本文と同一の句入り書翰が以下宛名を異にして都合四通ある。

左柳宛　貞享元年

御手紙致二拜見一候。爾無二御別條一御入候よしよろこび存候。此許不レ替暮申候。可レ易二御心一ひさしく便も無レ之、いかゝ哉と存候處へ、こまぐ＼との御ふみ卷返し拜見申候。さてうき世は時ぐ＼のはやり哥のごとく、此間は世間に五文字長に句はやり申候に付、愚老も一句せはやと句如レ此

冬の日凩の身は竹齋に似たる哉

ケ樣ニ口すさび申候。さてぐ＼言ィにくき物に御ざ候。五もじ多き故か、おもしろくも御座候。キ丈にも二三句可レ被レ成候。又ゝ心替りておもしろくおかしく候。猶、近々御めにかゝり可二申入一候。以上

十三日　はせを

左柳丈

註、前高崎市長關根作三郎氏の所藏である。全く同文のものが東京福岡周齋氏の許にもあるが、筆蹟はこの方がよいので本文は關根氏所藏に據つた。

秋風宛　　貞享元年

御手紙忝致二拜見一候。彌御無事珍重に存候。御子息にも追日御盛人可レ被レ成與察存候。定而御隱居にも御滿足たるべく候。然バ此ほどハ世間にはいろ〳〵狂句共出申候。專ニはやり申候俳諧ニは、五文字長之句世に專はやり申候を聞て、我も

　冬の日凩の身は竹齋に似たる哉

前後初納メに一句いたし見申候。何樣にも風情かはりて面白存候。キ丈にも此類被レ成まじく候哉。又頓而〳〵以上

十六日　　はせを

秋風丈

註、法學博士井上辰九郎氏の所藏である。宛名の秋風は鳴瀧の別莊に寓した三井氏であらう。

露通宛　　貞享元年

追而申候。五文字長き句世にはやり申候へば、

多の日風の身は竹齋に似たる哉

右之句にて御ざ候。さのみおもしろくも無レ之候へ共、此三四年は五文字之長き句をおもしろがり申候に付如レ此。さて〳〵時〳〵のはやり言とて是非もなき事に候。愚老などは夢〳〵以おもしろからず候。其許壽樂御坊へ御心得可レ被レ下候。此方御手紙進申候。キ丈方ほ句も爲二御知一可レ給候。心事重而可二申述一候。以上

十九日　　はせを

露通丈

註、宛名の露通は路通である。本文は加賀金石町の月舞林藏倘太郞氏の所藏である。

嵐水宛　　貞享元年

追てよろしくいづれもへ御心得可レ被レ下候

いかゝ御入らせ候哉と存候處、こま〳〵御狀被レ下て忝く拜見申候。さては此方におもひ當りし事もはや首尾成候哉。嘸々いづれも御祝してあるべく候。あまり〳〵よき中はあしく成と申世のたとへに一寸も違不レ申候。乍レ去此末を能〳〵御たしなみあるべく候。夫に付發句をせよとて外に書付おかし乍ら一句

海くれて鴨の聲ほのかに白し

いかゝあるべくや。是はたとへことばなり。そこ許樣にも內〳〵御心かけ可レ被レ成候。頓首

廿八

嵐水丈　はせを

註、本文は伊勢高松村の内田忠明氏の所藏である。故鈴木芦竹氏が筆寫して編者に報じられたが、一二讀違ひがあるらしく思へる。

桃隣宛　貞享元年

一筆申入候。其許御家内別儀無レ之哉。其後不通に便無レ之候。但しは貴樣心腹替候哉と獨言斗申侍り候。愚身無爲ニ暮申候。併次第〳〵に冷氣に成候而こまり申候。あまり口淋しさのまゝ長夜のねられぬまゝ一句

草まくら犬もしぐるゝか夜のこゑ

いかゞ御慰可レ被レ下候。又〻貴樣によろしき句出候はゞ御申聞可レ被レ下候。取込早〻申殘候。以上

廿一日　はせを

桃隣丈

註、本文は伊勢四日市の堀木忠良氏所藏である。故鈴木芦竹氏の所報に據る。句は「野ざらし紀行」に出てゐる。

不流宛　貞享元年

口上

庄右衛門どのゝ御手紙御加筆之趣委細承り候。此ほどハ雪ふり候而さむさ込入申候。併、句あんじ申ニハずいぶんよろしく候。愚庵におゐてかたびら雪のひた〱とふりつむを見て

馬をさへながむる雪のあしたかな

出候まゝの一句申入候。又〻すへニ成候て發句らしき句も出可ㇾ申候哉。其節ひきやくに可㆓申入㆒候。先〻此中之愚作ながら如ㇾ此候。以上

霜十三　　はせを

不流丈

註、本文は金澤の俳人雪袋の『句空庵隨筆』(殿田良作氏藏)に收めてある。句は「野ざらし紀行」に出てゐる。

和柳苑　　貞享元年

御文被ㇾ下殊に何寄の一種送り被ㇾ下御厚志之所察入候。拙庵も近頃は他行も不ㇾ致御無音に罷過候。其角子も四五日以前に被ㇾ歸申候。美濃路杯の咄も御座候。我等は守武の侍りしを又くりかへし、

義朝の心に似たる秋の風

是等申殘し候。何事も近〻面上可㆓申上㆒右御禮斗り早々。以上

十一月廿一日　　はせを

和栁御坊え

註、前大阪市長植村俊平氏の所藏である。句は『野ざらし紀行』には中七「心に似たり」となつてゐる。

去來宛　貞享二年

一近日芳野行脚存立候間金子二歩御かし可レ給候。おしつけ貰ひ溜返濟可レ申候。されど我等事ニ候へば得なす間鋪も候。以上

はせを

去來樣

註、本文は『蕉翁消息集』にあるもので、芭蕉の逸話として諸書に引用されてゐる。

千那宛　貞享二年

貴墨辱拜見、御無事之由珍重奉レ存候。其元滯留之内得二閑語一候而珍希申候。

一愚句其元に而之句

辛崎の松は花より朧にて

と御覺可レ被レ下候。

山路來て何やらゆかしすみれ草

其外五三句も候へども重而書付可レ申候。

一此秋、此萩のあらそひ、尤此道是非をあらそふも道のひとつにて御座候へども、あながち口論を好事愚意好しからず候間、兼而能程に御あらそひ御尤候。
一其角へ御状重而返状可レ仕候。嵐雪他國へ罷候間不レ及二貴報一候。何やらかやらいまだ取込、舊友久々咄共指つもり手透無二御座一候。貴報たのみ存候。
一澁谷與茂作殿御堅固に相見候。御手跡見覺候。以上

五月十二日　　芭蕉桃青

千那貴僧

註、近江堅田本福寺の千那への文通で、有名な辛崎の句は文中の「愚句其元にての句」でその作つた場所が判明する。本文は耳得の『芙蓉文集』に出てゐる。『蕉翁消息集』のは其の釋疏である。

狐子宛　　貞享二年

寶壽院御歸寺候故申入候。爾御替も無レ之候哉。此許無事に居申候。然ば先日は御手紙被レ下候而、とにめづらしき物數〱おくり被レ下、其上加州ゟ客來候間すぐにもてなし別而々忝候。右之客も五七日も此方に逗留候故此邊花など見に參候。我も一句

唐崎の松は花よりおほろにて

ケ様にも致候。キ様の事存出候。ちかき所ならばよびにも遣し度存候。さて此間の御禮又〻此句申進じ度と如レ此候。

三日　　　　　　　　　　　　桃青

狐子丈

註、宛名の狐子は此の文通以外に見掛けないが、本文は名古屋市鍛冶町の菅井孫右衛門氏所藏である。

野水宛　　　　貞享二年

此許愚老無爲ニ暮申候。折から毎日〳〵之客來にはこまり迷惑ニ存候。然バ近比御世話之儀ニ候得共、利休方之扇十本御頼致候。直阿之方にて折せ右ひきやくニ御出し可レ被レ下候。たのみ存候。是も俳人衆ゟ被レ頼候故如レ此ニ候。料は貳百疋と覺申候。御遣し可レ被レ下候。さて其許御ほ句よろしき句出候哉うけ給たく候。此方よろしきも出不レ申候。四五日前ニ舊友ニ廻り逢て一句

樫の木の花にかまはぬ姿かな

右之句相挨に致候。すぐニ同道候而此方ニ十日斗も逗留候而夜ともニはなし申候。上京候ハゞ貴様へも立寄可レ申候由被レ申候。何事も重便ニ與ミ可ニ申承一候。以上

三月十一日　　　　　　　　　桃青

野水丈

註、貞享二年在京中の野水への文通である。讃岐觀音寺町の森安華石氏から寫眞に取つて鑑定を求められたものである。

曲水宛　　　　貞享二年

追而申ろし。二三日前任口に逢而一句

我衣に伏見の桃の雫せよ

此句申出候。其邊二兩輩へ御參會の刻御心得可ㇾ被ㇾ下候。旲〻本書賴入候。數々御調被ㇾ下可ㇾ給候。取込早〻以上

十一日　　はせを

曲水丈

註、伊勢山田の山下櫻洲氏所持の寫本『芭蕉消息集』に掲ぐる一通である。

其角宛　　貞享二年

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に趣き、尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告て圓覺寺大巓和尚ことし睦月のはしめ月またほのくらきほど、梅のにほひに和して遷化したまふよしこまやかにきこえ侍る。旅といひ無常といひかなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ先一翰投ニ机右ニ而已

梅戀て卯花拜むなみたかな　　はせを

四月五日

其角雅生

註、其角の『新山家』（貞享二年刊）に鎌倉圓覺寺の大巓和尚を悼んだ記事中にこの文通を掲げてある。

空水宛　貞享二年

追而申入候。此中はふじに長〻逗留其上何角御世話に成候へ八、別而御内方樣御世話に候。いそがしき中にうかゝいたし居候而きのどくに候。長雨にふりこめられ候事、とかうに及がたく候。

行駒の麥に慰むやどり哉

いづれへもよろしく御もふし可レ被レ給候。くはしきは重而〻。以上

十三日　桃青

空水樣

註、太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』の本文朱註に京都の梅通が「此消息を珍藏し、みづから麥慰舍と號せしものなり」と記してある。

柏水宛　貞享二年

追而申入候。昨日之御報に失念故又〻申入候。木曾路にてほ句の事此度は日數の間も無レ之故、ほ句も二三句ならでは不レ致候。其くせ不出來に候。漸く淺間邊にて

馬ほくほく我を繪に見る夏野哉

此句斗かと存候。其外は不埒千萬なる句にて御ざ候故不二申入一候。追而富士山へ詣り候人にさそ

はれ候により愚老も参可レ申と存候。又々其刻可二申入一候。取込早々以上

十二日　　はせを

柏水丈

註、東京本郷の茅野雅太郎氏の舊藏である。今は所在を逸したので本文は碧梧桐氏の筆寫に據つた。

游水宛　　貞享二年

左の句は馬ほく〳〵送り字也

昨日は御手紙被レ下候へ共他所へ出候而御返事も不二申進一候。彌御無事に御入候由目出度存候。此表無事に居候。さては神事別してキ様方も御取込候よし尤に存候。ほ句はいかゞあるべく哉。是にて濟し可レ給候。

馬ほく〳〵我れを繪に見る夏野哉

いかゞあるべく候や。キ様の御心次第に候。我等は結句面白く候。委はあとな〳〵。以上

三日　　はせを

游水丈

註、本文は能登鳳至郡黒崎村の森岡彌佐久氏所藏である。句は初案「夏馬の遲行」を「馬ほく〳〵」と再考したので、本文に「送り字也」と注意したのであらう。

和休宛　　貞享二年

笹岡五郎右との御上京候に付ちよと申入候。爾御家内御かわりもあるまじくと推斗申候。だん〳〵暑ニ罷成候而愚老などしのぎ兼申候。キ様ニハ情分つよくさほどにも有るまじくとうら山敷存候。何ぞ宜句出候哉うけ給たく候。然ば盤齋背向像に一句

團もてあふがん人のうしろつき

此句致遣候。寺町ノ秋田や方へ表具をたのみニ上せ申筈ニ候。キ様にも秋田や事は近付に候間近日之内ニ御出候而御尋可レ被レ下候。とく〳〵様子はやく見申たく候。さて又キ様方いつぞやノ十二枚之まくりの繪、干レ今其まゝにて御指置候哉。もしキ様御勝手に入不レ申候はゞ所望之人有レ之候間御下し可レ被レ成候。せたノ人ほしがり申候。兩用共に様子御申越可レ被レ下候。取込早々以上

十三日　桃青

和休丈

註、伊勢四日市の鈴木芦竹氏の蒐集された眞蹟である。これで『一葉集』所載の本文を訂誤し得た。今は調子深氏の許に襲藏されてゐる。

意水宛　貞享二年

西行のなか〳〵に
とき〳〵雲のかゝると

雲折〳〵人を休むる月見かな

いふ心を持て

右之句にて今年の名月はすまし申候。とかくはつといふ程の句は出かね候。貴丈は句いかゞ被レ成候哉。ちよと御きかせ可レ給候。うけ給たく候。猶又追〻可ニ申承一候。以上

十七　はせを

意水丈

註、句は尙白の『孤松』（貞享四年刊）が初出である。本文は伊勢四日市の故鈴木芦竹氏が所見を報ぜられたのである。

琴風宛　貞享二年

權之丞御出にて承候へば、此比は鰒多くとれ、はいかいふぐの會にまぎれさん〳〵の仕合、さう〳〵御やめ可レ被レ成候。とかく、とうふなどがよく候。一句いたし進申候。

ふく汁や鯛もあるのに無分別

廿三日　はせを

琴風丈

註、大阪の野田別天樓氏から小林一三氏所藏のよしで、本文を寫眞にして編者に寄せられたのである。

知足宛　貞享三年

古池
山吹や蛙とびこむ水の音　　芭蕉
蘆の若葉にかゝる蛛の巣　　其角
貞享二年春

先達而の山吹の句上五文字此度句案かへ候間別に認遺し候。初のは反古に被レ成可レ被レ下候。此度其角上方行脚致し候。是又宜御世話賴入候。

芭蕉

知足樣

註、本文は樗翠の『芭蕉句選年考』に尾州鳴海の驛千代倉次郎八所持とあるが、今は同家に存じない。句の添書の二年は三年の誤寫であらう。併し貞享三年其角の上京した形跡はない。或は出立のつもりで見合せたのかも知れない。

貞享三年

左門宛

さゝ浪や志賀のみやこはあれにしをむかしながらの山櫻哉、と忠のり卿の詠じ給ひし哥の心をふまへて

花咲て七日鶴見るふもとかな

さてゝ哥の心とは格別いやしき物に候。哥之雜口成とは尤ニ候。併我ゝが口には誹諧より外ニハ出不レ申候。とかく明し暮したのしむ物此雜口斗にて命を果し可レ申候。キ樣などは哥道之方もよほどけいこ被レ成候故、折々は御詠草なども出可レ申候。とかく此方共は曾て〳〵其座へ參候而、はじをかく事のみ口惜く候へ共今更是非もなき仕合、此方出會之中に一兩輩哥好有レ之候。又誹に成

候而、うつくしく過候而誹言曾無レ之おもしろからず候。猶其内〻。以上

廿二日　　　はせを

左門様

註、句は清風の『一橋』（貞享三年刊）に出づる歌仙の發句で、本文は越中井波町の宇野次四郎氏の所藏である。

野休宛　　貞享三年

みしまや迄使ちよと申入候。其後ハひさしく不ニ申承一候。いかゝ御くらし候哉。定而替事あるましくと押斗まいらせ候。愚身も無事居申候。さて又今世上にはやり申候小哥の本五册斗御調被レ下可レ給候。ちかきころに信州へ罷越候故、子共みやげニいたし候。とかく信州はやさしき所故女子も少々手ならいいたし、物の本のぞき申事に候。たのみ入候。代物ひきやくニ成とも御申こし可レ被レ下候。遣可レ申候。さては句は

花咲て七日鶴見るふもとかな

右之句にて御ざ候。とかくくわしきハ追々可ニ申入一候。以上

三日　　　はせを

野休様

註、本文は越中石動町櫻井善郎氏の所藏で、桂井未翁氏から寫眞に取つて報ぜられたのである。

去來宛　　貞享三年

芳賀一晶老母見舞被レ登候間啓上仕候。愈御無事ニ被レ成ニ御坐一候哉承度奉レ存候。爰元和田氏、其角、野蕉、無レ恙罷有候。誠度〻御傳書先日又預ニ貴墨一御厚志御深切之段誠不レ淺感心仕事ニ御坐候。折節は御書状もと存心懸も御坐候へ共、蚊足が委細に御通候上ハと存候てハ、重而〳〵と便り延引に罷過心外之至、此方存分儀ニ似たるなるべし。御秀作度〻相聞千里隔といへども心一ニ叶時は符節と合候而、毫髮可レ入處無レ之、近世只俳諧之悟心明に相きこへ候而、爰元連衆別而は文鱗、李下よろこぶ事大に御坐候。此度蛙之御作意爰元に而云盡したる樣に存候處、又〻珍敷御さがし是又人〻驚入申候。當秋多晩夏之内上京、さが野の御草庵ニ而親話盡し可レ申とたのもしく存罷有候。さがへキ丈御方へ參候事ハ、其元ニ而もさたなぎがよく候。

壬三月十日　　芭蕉桃青　書判

去來雅伯

几下

註、文中の「蛙の御作意」は『蛙合』の句であらう。閏三月は貞享三年に相當する。本文は三井銀行專務菊本直次郎氏の所藏である。

知足宛　　貞享三年

尙〳〵髮剃壹丁對一本被レ懸ニ御意一誠忝奉レ存候

先日貴墨幷短尺廿枚相屆請取申候。愈御無事ニ御勤被レ成候哉珍重奉レ存候。爰元別條無ニ御坐一候。內〻頃日者上京可レ致覺悟ニ御座候へ共、何角障事共心にまかせず候而いまだ在庵罷有候。夏之中ニハ登り可レ申候間其節立寄可レ得ニ御意一候。

一短尺大かた出來いたし候へ共、爰元ハかりそめにも出合遠方、其上人〻ケ樣之事共ニ取込罷有候故延引ニ成候。拙者門弟共は皆〻かゝせ申候。他筆宗匠共のをまじへ可レ申と是故少調兼候。追付相調候而登せ可レ申候

壬三月十六日　芭蕉桃靑 書判

寂照老子

註、寂照事下里知足の後裔である尾張鳴海町の下郷次郎八氏の藏する眞蹟である。貞享三年の文通なる事は閏三月の日附で證明される。日附の壬は閏の略字である。

知足宛　貞享三年

追啓申上候。此僧二人拙者同庵ニ而御坐候。上京修行ニ被レ出候而長除（途）草臥可レ被レ申候間、二三日御とめ休足いたし通候樣に奉レ賴候。近比馴〻敷御事ながら行脚修行の僧ニ而御坐候間、二三日御とめ足を少やすめ候而御とをし被レ成可レ被レ下候。今程御閑敷時節ニ御坐候間、如風樣御方ニ御とめ被レ成被レ下候樣に奉レ賴候。

大キウ和尚拜いたし度ねがいニ御坐候間其段も奉レ賴候。

　　壬三月十六日　　　　　　　　芭蕉桃青　書判

　　下里寂照老子

註、文中に紹介された僧二人は『知足齋日々記』の貞享三年の項に「閏三月廿三日、江戸桃青狀にて宗波、鐵道兩僧被參泊り」とあるので判明する。本文は下鄕次郎八氏の所藏である。下里は寶永年間今の下鄕の字に改める前の姓である。

知足宛　　貞享三年

　倘〳〵俳諧等折〻御坐候哉承度候

貴墨殊更御國名物宮重大根貳本被レ懸二芳慮一忝尤賞翫可レ仕候。每〻御懇情不レ淺忝奉レ存候。愈御

　誠〳〵遠路不レ絕

　御案内のみならず

堅固珍重、此方露命いまだ無レ恙候。當夏秋之比上り可レ申覺悟ニ御坐候へ共、何角心中障る事共

　御音信御心ざし厚

　き事筆頭難レ盡候

出來延引、浮生餘り自由さに心變様〻難レ定候

一短尺十三枚其後戶田左門殿表ゟ之便りニ七左衛門殿迄賴又〻進し候。猶追〻力次第ニ賴候而上せ可レ申候間、老養御樂ミ可レ被レ成候。此比ハ發句も不レ仕人のも不レ承候。猶思ひ付候而重而之

便りニ可レ懸ニ御目ニ候。七左衛門殿へも御無さた、心計ハ何としてかとしてとのみ存候而御書状さへ不レ得レ進候。御懐敷候。其元御連衆如風様へも可レ然奉レ頼候。御使もたせ置返事したゝめ候故、何を書候故も不レ覺候。無常迅速〻〻

極月一日　芭蕉桃青　書判

寂照様

貴様

註、文中の「七左衛門殿」は熱田の桐葉の通稱である。尚々書は本文中に書込んである。眞蹟は鳴海の下郷次郎八氏の許に襲藏されてゐる。

知足宛　貞享四年

この御寺の緣記人のかたるを聞侍て

かさ寺やもらぬ岩屋もはるのあめ

武城江東散人　芭蕉桃青

笠寺の發句度〱被レ仰候故此度進覽候。よきやうニ淸書被レ成奉納可レ被レ成候、委曲夏中可レ得ニ御意ニ候。以上

寂照叟

註、文中のこの寺は尾張鳴海在の笠寺である。『知足齋日々記』の貞享四年の項に十一月四日「松尾桃青老江戸ヨリ御越御

泪り」とあるので見ると、夏中鳴海へ行くのが冬に延びたのであらう。下郷次郎八氏の所藏である

玉風宛　　貞享四年

追而申候。其角かせし句ニ

さみだれや顔もまくらも物の本

とせし句あり。さのみ能句共おもはず居申候所、此間之ふりつゞく雨ニ打ふし〳〵寐て居て、物の本を取出して見る顔もまくらも本だらけニ成をおもふては、句殊之外におもしろく成候。其角が句の類をせんと思ふて句作りいたし見申候へ共さて〳〵句おもく成候而出來兼申候。漸〻此句

髭生て容顔蒼し皐月雨

とかく一句おもく成候而いかゞ。近日の中に此方へも御出まち入存候。何分湖風ゆへ京ゟは涼しく御座候。上京ノ木むらどの御出候節はよろしく御傳可ㇾ給候。其後は久しく不ㇾ懸二御目一候。定而御替りもあるましくとは存候。參會之刻はかならず〳〵たのみ入候。以上

十一日　　はせを

玉風丈

註、土居剛吉郎氏の大阪で蒐集された一通である。句は『續虚栗』に「髯生て」と見えるが、文中の「湖風ゆへ京よりは」が句作の年次にやゝ不安を感ぜしめる。

洞水宛　　貞享四年

此中ハ御尋被レ下候處、近在へ參候而、御めニかゝらず殘念不レ少候。さてハ貴樣ニも近〻田舍へ御下向之由、段〻寒氣に赴候而御苦身千万に存候。隨分御達者ニ頓而〻御上京まち入候。然ば發句之事御申置候。彼方へ御見やげニ成候樣之よろしき句も無レ之候へ共、御申置故此句申進候。

馬方はしらじ時雨の大井川

如レ此に御座候。いかゞ哉。猶あとゟ追〻可ニ申承一候。かしく

廿二日　　はせを

洞水丈

註、本文は桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に「駿府比良氏都雁」所藏として自筆を模刻してある。「馬かたは」の句は『泊船集』に出てゐる。

哥木宛　　貞享四年

あまり〳〵御床しさのまゝ一筆申入候。其許御無爲候哉。此方替事なく居申候。彼地ゟも此十日斗以前ニ歸申候。道〻口すさび申候句ちよと申入候。

馬方はしらじ時雨の大井川

旅人に我名よばれん初しぐれ

右兩句申入候。外〻御誘候て近日庵へ御來待入候。諸事御キ面〻。以上

十八日　　はせを

哥木丈

註、野田別天樓氏と共に土居淵吉郎氏が、攝津芦屋の別邸に寓さるゝ時一覽した中の一通である。

松風宛　　貞享四年

追而申入候。冬ノ吟ほ句は如レ此ニ候。御仰故ちよつと申入候。

旅人に我が名よばれん初しぐれ

馬方はしらじ時雨の大井がは

右之兩句申入候。さて又いつぞやキ樣方に御入候西國の客僧は于レ今更ニ御入候哉承たく候。道之記之書一册分御たのみに候へども長文出來かね申候。急〻ニは出來不レ申候間其段御心え可レ被レ下御啱可レ給候。心やすく思召候ても人の見る物に候へば麁相にも認がたく仍而申上候。以上

廿二　　はせを

松風丈

註、二句の一の「旅人に」は貞享四年十月十一日の吟なので同年の文通であらう。東京井上辰九郎氏の所藏である。

忘水宛　　貞享四年

如行方之返書御とゞけ被レ下毎事御世話忝候。さて八貴丈ニも近々長州へ御下向之旨、寒氣之節

御太義千万に存候。定而多中ニハ御上京有るましくと被レ存候。又發句ノ事共御意得申候。則書付進申候。

されはこそあれたきまゝの霜の庵

右之句にて御ざ候。餘不二面白一候へども御所望故如レ此ニ候。猶重て可二申承一候。以上

十三日　　はせを

忘水丈

註、岩代須賀川町の竹内喜平氏所藏である。本文は矢部榾郎氏が寫眞にして編者に報ぜられたのである。

知足宛　　貞享四年

尙〻今日御入來可レ被レ成と相待候處、近比〻〻御残多奉レ存候。かへす〻〻

爲御見舞三郎左衞門殿被レ遣、誠辱奉レ存候。今日は若御出可レ被レ成かと御亭主共ニ相待居申候處

此度萬事御懇意忝難レ盡候。

御残多義ニ御坐候。先以此度者緩〻滯留、さま〻〻御懇情御馳走御禮難二申盡一候。はいかい急に風俗改り候樣ニと心せかれ、御耳にさはるべき事のみ御免被レ成可レ被レ下候。され共風俗そろ〻〻改り候ハヽ、猶露命しばらくの形見共思召可レ被レ下候。なごや方も日〻に便被レ致候間、明日荷兮迄參可レ申候ハんと被レ存候。持病心氣さし候處又咳氣いたし藥給申候。なごやニても養生可レ成事ニ御坐候間、明日比なごやへと存候。

一先日笠寺まで御連中御送被レ成、御厚志候と可レ然御禮御意得奉レ頼候。如意寺樣猶又よろしくたのみ奉レ存候。追付發足山中ゟ以二書狀一具可二申上一候。二三日此かた兩吟致大かた出かし候。出來候ハゞ被レ懸二御目一候樣に早々以上

霜月廿四日　芭蕉翁

寂照居士

以上

註、寂照の『知足齋日々記』の貞享四年の項に「十一月廿四日三郎左衞門、宮、桃青翁還」とあるので、熱田からの文通である事が解る。本文は鐵叟の『伊羅古の雪』（寶暦三年刊）に發表され、現に下郷次郎八氏の所藏である。

去來宛　貞享四年

口上

以二手紙一申入候。彌御替も無レ之候哉。愚身も此四五日以前ニ名ごやゟ歸申候。然ば此大こん切ぼし一袋進上申候。世間にておはり大こんとは申せども、とかく宮しげと申在所斗にて御ざ候。京にて東寺眞桑と申と同じ事ニ候。いづれも近々ニ參候而可二申述一候。よき便故文手進申候。以上

廿一日　はせを

去來丈

註、能登門前町の酒井幹氏の所藏である。文通の年次は「名ごやより歸申候」から推察される。

無宛名　　貞享年中

今朝自二旦那様一御肴頂戴仕難レ有奉レ存候。私宅ニ而ハ女兄弟共打寄頂戴仕、又權右衛門方に而念比之もの共寄合戴申候。さて今日は權右衛門方に寄合罷有候。後程御禮に參上可レ仕候。以上

註、文中の「旦那様」は舊主家の藤堂新七郎家の當主をさしたので、本文は伊賀上野町田中善助氏の所藏である。

和休宛　　貞享年中

御手紙忝致二拜見一候。先ゝ無二御別儀一御入之由よろこび申候。此方何事なくくらし居申候。さては内ゝ御たのみ置候塵土佐五十枚御こし被レ下慥受取申候。御世話之儀忝存候。先様にも婚禮もちかく成候故、せがまれやかましくきのどくに候處、早ゝ遣し可レ申候。一枚見申候が又名物之紙故見事に存候。はり立出來候はゞ猶見事に可レ有レ之、もはや安堵可レ被レ致候。我も紙に付風與一句

　塵土佐の腰はりへげて秋の暮

右句口すさび申候。其許には此句にワキ御付可レ被レ遣候。是に題して哥仙一卷につゞり申たく、折ふし取紛筆留候。以上

　廿一日　　桃青

和休丈

註、大礎の『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「右も桃水（松村）手帳より寫す」とあるが、「腮士佐の」の句は初見である。

無宛名　　貞享年中

先日已後、先からさきになかれわたり候而、夜前罷歸先日之御卷點仕候。御けいこの爲點ひかへ申候。句の味貴面御物かたり可ㇾ申上候。明廿五日晝より大かた宿ニ居可ㇾ申と奉ㇾ存候。又前句二句進覽仕候。以上

廿四日　　桃青

梅咲窓に額みえすく
菊折に岩根〳〵を飛こえて

註、伊賀上野町の田中善助氏の所藏である。確に門外への書翰であるが宛名は知れない。

重右衛門宛　　貞享年中

先ほどは御手紙の處、となりへ時ニ參候而御次不ㇾ申候。然ば今日在所中寄合候てふぐ汁被ㇾ成候よし、夫に付參り候樣被ㇾ仰下候。忝は存候得共愚老は其相伴には成がたく候。併何心なくよび被ㇾ下候故、ふぐ汁何もしたゝかに喰候を見物に可ㇾ參候。我等は雜煮が可ㇾ然候間其御心得可ㇾ給候。あまり〳〵おかしくて文もしたゝめかね申候。ちよと一句

ふぐ汁やあほうに成りとならばなれ

右之心にて能時分に可レ參候。必〻御氣づかひに不レ及候。以上

五日　　はせを

きし田　重右衛門様

註、伊勢桑名の故天春靜堂氏の所藏で、桑名で催した俳諧展覽會の時に一覽したが今は所在が知れない。

太郎兵衛宛　　貞享年中

庄屋殿へ出候而承候。今席は貴様方にふぐ汁之會有レ之よし、めづらしき風雅にて御座候。我等見物に可レ參候。依レ之

鰒汁やあほうになりとならばなれ

おかしや〳〵とかく出ほうだい火中。

十一日　　はせを

太郎兵衛殿

註、井眉の『華島文庫』に載するもので、句は全く坐興と見えて集に掲げたものを見ない。

素堂宛　　貞享年中

口上

此間御咄申置候通勸學院古瓦硯之銘、足下、其角、愚老三人との一軸に認ほしき由、一兩日中に

御書可レ被レ下候。且又京都上御靈神主小栗栖大炊頭七十之賀、是は御詩作賴來候。兼而御存のごとく醍醐内大臣樣御門弟ニ而和歌も出來申候。委は期二拜顏一候

廿四日　　芭蕉庵

素堂先生

註、重厚の『もとに水』にある一通で、文意から信じていゝが、原翰の所在は記してない。

無宛名　　貞享年中

愈御無事に御座候哉。御なつかしく存候。此方外ニ別條無二御座一候。我等も堅固罷有候。頃日途中にて甚五郎殿懸二御目一候。定而當月中には御下り可レ被レ成と御噂にて候。正五郎殿へも懸二御目一候。さのみ御しかり候事も無レ之珍重の由に候。

註、朝鮮密陽三門里居住の福永登志夫氏から鑑定を求められたもので寥太の極書が附いてゐる。

無宛名　　貞享年中

晉子も可レ被レ參之由、御出席可レ被レ成候はゞ山田氏へも可二申遣一候。已上

八月十五日　　桃青

註、本文は稿本『芋の森』に掲げてあるが、前文がまだあつたものであらう。

一井庵宛　　貞享年中

此間は御たづね被ㇾ下忝存候。殊外日数もかゝり申候が草津にては幸にも人々逢申候。又高崎に弟子被ㇾ居候まゝ彼是延引成申候。御申こし之品も明後日には認め上可ㇾ申候。深谷間村にてはかく斗申候。

麦刈て桑の木ばかり残りけり

書外は拝顔可㆓申上㆒候草々。以上

十七日　　桃青

一井庵主　御もとへ

註、金澤市上新町石谷伊右衛門氏の所蔵である。句は『曠野』に「作者不知」として出てゐる。

甚左衛門宛　　貞享年中

御宿たづね候而御留守不ㇾ得㆓御意㆒御残多存候。さりながら市兵衛殿御状、則慥ニ請取申過分ニ存候。江戸へ便りニ可ㇾ被㆓申成㆒と御留主ながらとまり候へと御とめ候へ共、道づれも御ざ候故とまり不ㇾ申候。以上

から〳〵と折ふしすこし竹の

油こほりともし火細き寐覺哉

霜月十七日　　桃青

甚左衛門様

註、讃岐丸亀の吉岡梅遊氏の所蔵である。文通は貞享頃と推察される。挿入の両句共に初見であるが眞蹟に疑ひない。

如行宛　　貞享年中

申されたり。我も哥は及ましきが、せめてほ句成共と思ひて一句

たれやらか姿に似たり今朝の春

いかゝあるべく候哉。少斗は歌の心に似寄り候哉。さて〳〵あさましき俳諧也。思ふこゝろもこもり候也。あら〳〵かしこ

十五日　　はせを

如行様

註、富山市荒町の正谷発太郎氏の所蔵である。嘉永五年江戸の抱儀から如竹へ譲つた添状がある。句は『續虚栗』に出てゐる。本文は斷簡であらう。

與幽・虚水宛　　貞享年中

上達之様ニ相見え別而大悦ニ存候。随分御相談被レ成候而下繕被レ成御待可レ被成候。高氏南花齋物牛之由是又幸之儀御座候間、御勤被レ成御修行可レ被レ成候。世道俳道是又二つなき處にて御座

候此度返翰數多不レ及二細筆一候　頓首

三月廿二日　芭蕉桃青

吉田與幽居士
和田虛水居士
貴様

註、越中福光町の高畑好竹氏の所藏である。筆蹟から判じて文通の年次は貞享以後のものでない。

友水宛　元祿元年

昨日は爲二御慶一御出不存候。先は御無事にて御越年珍重の御事に候。定而ぜゞへ御禮の序なる可く候。近所の衆へ承り候へばおびたゞしく醉つぶれたる氣色の由、前後を知らず御寄と察存候。はやく／＼と一句

二日にも拔かりはせぬぞ花の春

上戸の爲には日本一の挨拶なるべし。猶永日と申殘候。以上

二日　はせを

友水丈

註、句は『笈の小文』に「ぬかりはせじな」となつてゐる。本文は積翠の『芭蕉句選年考』に引用してある。

杉風宛　元祿元年

先刻は爲二御慶一御出被レ下候處、近所へ參候而早〻御出之儀忝候。此方儀者隱士故五ケ日も過候而可レ參候。仍而一句口すさび申候故如レ此候。

こんにやぐにけふはうり勝若菜哉

いかゞあるべく哉。唯風情斗之內ニ而候。何事も春永ニ可二申承一候。かしこ

正二日　はせを

杉風丈

註、梅人の『若菜籠』に自筆を摹刻してある。嵐雪はこの句を立句に兩吟を卷いてゐる。

嘉右衛門宛　元祿元年

二日にもぬかりはせぬぞ花の春

はまぐりにけふは賣かつ若菜哉

右之兩句申進候。其外に二三句斗も有レ之候へ共、あまりおもしろからず候故御めにかけ申さず候。ちかき內に素堂可レ參候間御聞可レ被レ下候。此間は何角用事しげく候故早々申入候。以上

十九日　桃青

本や嘉右衛門樣

註、三重縣廳發行の『先賢遺芳』に寫眞版で掲げてある。此文通で「はまぐり」の句は「二日にも」と同年の作と見られる。

半左衛門宛　　元祿元年

其元舊年御仕舞日、御不自由ニ可レ有二御座一候。此方も永〻旅がへり何やかや取重、毎日〻客もてあつかひなどニ而、冬のしまひもはつ〻ニ御座候間、金子少も得進じ不レ申候。何とぞ北國下向之節立寄候而、闕あたりヶ成とも通路いたし、しみ〴〵可二申上一候。別條無レ之候内細〻書狀にも及不レ申候間、左樣に御意得可レ成候。

一、山　御無事ニ御座候哉。御老人無二心元一存候。

一、七郎右衛門方あねごせん御無事ニ御座候哉。以上

正月十七日　　松尾桃青

半左衛門樣

註、元祿元年江戸へ戻つた時の伊賀の家兄への文通であらう。七郎右衛門は雪芝の通稱である。その妻は芭蕉の姉である。本文は伊賀阿保町の龜井曉氏の所藏である。

吟水宛　　元祿元年

返〻此一報山人へ御とゞけ可レ給候。

此中有馬ヶ御歸京被レ成候よし、御入湯御相應被レ成別而〻珍重此事ニ存候。嘸々御逗留中に御仙

會共可レ有レ之と察入存候。さて八上野にて致候發句御申越被レ成候。愚老も二三日以前ニ大垣ゟ歸申候。長々居り候而くたびれ申候へ共、今日之便ニ取あへず文ニ書入進申候。

花曇り鐘は上野か淺草か

右之趣御さ候。委ハあとゟ〳〵以上

廿二日　はせを

吟水丈

註、句は「花の雲」として『續虚栗』に出てゐる。文中「大垣より歸申候」は江戸へ歸庵の意であらう。東京菊本直次郎氏の所藏である。

無宛名　元祿元年

早春佛頂和尚へ御狀被レ遣候を則愚庵爲レ持被レ越、微細熟覽仕候處、木兎の角あるけしき先感心仕候上、病床に病と組て勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲之勢ひ驚入奉レ存候。和尚之肝膈いまだしかと探られず候間、重而評判可二申遣一候。和尚にも舊臘は寒ぬるく候故御持病も心能、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し山〳〵俳諧に而至二半夜一候。

梅櫻みしも悔しや雪の花

と御申候。感心致事に候。且又正秀三つ物扨〳〵驚入、定而御力加り候物と感心仕候。褒美之旨正秀へ申遣候間除筆候。

註、名古屋市西區鳴田町の正覺寺は士朗門の松兄が住持したので、芭蕉の眞蹟を今に多く傳來してゐる。本文は其の中の一通である。『枇杷園隨筆』所載のものは文字に小異がある。

平庵宛　元祿元年

痛入たる御音信忝奉レ存候。一兩日御物遠罷過候。昨日より嵐朝へ參一宿仕候。先以先夜民部殿へ被二召寄一候而御厚志之御馳走、貴様御內通よろしき故と御亭主振感心忝奉レ存候。明日ニ見へ の心ざし御坐候へ共、天氣如レ此御坐候得ば、先延引可レ仕候旨、今晩罷歸明日可レ得二御意一候。其內民部殿へ御逢候はゞ可レ然奉レ賴候。猶貴面。以上

二月十一日　芭蕉

平庵様

尙〻御音信忝賞翫仕候。（貴様）乍レ去御牢人之御心遣却而痛入申候。亭主且野人へ御傳申通候。以上

註、文中の「野人」は杜國である。『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「參州吉田蘿字藏」として載せてある。

宗七宛　元祿元年

から口壹升乞食申度候。可レ被レ懸二芳慮一候。江戸參川が急ニ二人來候而明日奈良へ通候間、今夕宗無同道ニ而御出御語可レ被レ下候。壹人ハ宗無もちかづきにて御坐候。以上

二月十九日

宗七様　桃青

註、金澤の第四高等學校教授岡本勇氏の實家（伊勢）に祖父君の時代から傳來するもので、宗七は伊賀上野の親友であるか猿雖の惣七ではない。

左柳宛　元祿元年

今日長次郎どの京へ被レ參候ニ付ちよと斗申入候。其後は御遠々敷存候。彌無二故障一御入候哉と押斗存候。愚身も無事ニ暮申候。さて八内々御頼置候物共、もはや此節出來可レ申哉と存候。急々に御下したのみ入存候。先方ニも見たがり被レ申候。何分はやく被レ遣可レ被レ下候。祭もだん〱近〱候故せくも尤に候。在邊之事故度々言傳ニ申參候。さて又此間網代民部の子息に逢て

梅の木に猶やどり木のむめの花

此句相授に致候故キ樣迄申入候。さて客來多取込早〻。以上

廿一日　桃青

左柳文

註、水上亭桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に「東都村田氏枝貢」の所持する消息として自筆を摹寫してある。

雲竹宛　元祿元年

額出來候はゞ此僧に御渡し被レ下レ度候。委細ハ御咄可レ被レ申候。偖〻御世話に奉レ存候。千字文來

月中に被レ下候樣御心がけ奉レ頼候。先ゟ便之度ニせつかれ候。此間網代民部君の蠶子はじめて逢候故

梅の木に猶やどり木やむめの花

二十一日　はせを

北向雲竹樣

註、句は『曠野』に出てゐる。雲竹は筆道の師である。本文は丹波出石町中谷氏の所藏寫しを河東碧梧桐氏から編者に報ぜられたのである

野風宛　元祿元年

尙〳〵左之趣ニ候。くわしき事重而々。以上

使候まゝ一筆申入候。此間は不ニ申承一候。彌御無事御入と察入候。此方替事無レ之候。然ば十二三日之時分ゟ十八日頃迄ニ其許へ參可レ申候。八幡、山崎へ用事も有レ之、夫ゟ大坂へ出候而、今月中彼方に居申候。重而ハ大坂へ出候て申可レ被レ遣候。ほ句はケ樣に成申候。

丈六のかげろふ高し石のうへ

はじめゟは此手爾葉よろしかるべくと存候。猶追〻可ニ申入一候。以上

十一日　はせを

野風樣

註、句は『笈の小文』に「丈六に」とあるが、初案は『三冊子』に中七「佛つくれ」を改めたと見えるから、文中の「はじめよりは」は初案の意である。名古屋市武平町の近藤三川氏所藏である。

杉風宛　元祿元年

其元御無事と見え候而歳旦伊勢にて一覽珍重に存候。拙者無事ニ越年いたし今程山田に居申候。二月四日參宮いたし當月十八日親年忌御座候付、伊賀へかへり候て暖氣ニ成次第、吉野へ花を見に出立んと心がけ支度いたし候。尾張の杜國もよし野へ行脚せんと伊勢迄來候而只今一所に居候。卯月末五月初に歸庵可ㇾ致候。木曾路と心がけ候。深川大屋吉御逢候ハヾ可ㇾ然奉ㇾ願候。よく御傳被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候。いまだ爰元にても發句も不ㇾ致候。

參宮

何の木の花とはしらず匂ひ哉

追啓二見朝熊へ參候。爰元方〻へ馳走殘り所もなく候間、萬の氣遣ひ被ㇾ成まじく候。

一、濁子丈御子達御奥方御堅固ニ被ㇾ成二御座一候哉。拙者無事之旨御告可ㇾ被ㇾ下候。其元別條無二御座一候ハヾ御狀不ㇾ及候。若急ニ御しらせ事の御座候ハヾ、闕の地藏ニ而笠屋彌兵衛と申者迄飛脚便御狀可ㇾ被ㇾ遣候。二月十八日ゟ三月十四五日まではハ伊賀に居申候。以上

はせを

杉風様

註、文中の「當月十八日親年忌に御座候付」は、明曆二年二月十八日歿した芭蕉の嚴父松白淨惠信士の三十三回忌に相當する。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に出てゐる。

忘水宛　元祿元年

返々御母上樣にも御意得可レ給候。以上

雲竹老へ人遣候ニ付一筆申入候。然バ御内方樣、此頃安々と御平産殊ニ御男子出生重々目出度存候。兩所共ニ遠者ニ御入之由大慶ニ存候。夫ニ付一句祝義して申入候

先ッいはへ梅を心の冬ごもり

取あへず申入候。御名字も梅田に候へバ義理斗か。猶重而ゝ以上

廿三日　はせを

忘水丈

註、伊勢四日市の故鈴木芦竹氏の蒐集された一通で、句は『曠野』に出てゐる。

其角宛　元祿元年

明星やさくらさだめぬ山かつらと云し句、山中の美景にけをされ古き哥どもの信を感ぜし歟、明星の山かつらに明殘るけしき、此句のうらやましく覺候也。

はせを

其角樣

註、闇更の『蕉翁消息集』に「能登七尾寸行」の所持として本文の如く掲げてある。

松風宛　元祿元年

過し比ハ大和へ參候而所〻歩行申候。さてはいづくも同じ秋の夕ぐれとよみし哥の心なるべし。道〻のほ句ちよと一句申入候。

猶見たし花に明ゆく神の顏

あまり〱出かね申候ニ付ケ樣のあまき一句を口すさび申候。少栗津へ御來待入申候。くはしきは面上と申殘候

廿八　はせを

松風丈

註、本文は碧梧桐氏から東京の大倉規矩氏の所藏であると其の臨寫を編者の許へ報ぜられたものである。

三之丞宛　元祿元年

口上

其後はひさしく御めニかゝらず、御遠〻しく罷過候。爾御替も無ㇾ之哉うけ給たく存候。此方蔽無事に居申候。彌生の頃は誘引有候而よし野へ花見ニ參候。ほ句はいたし不ㇾ申候。いろ〱あんじ候而も貞室ノ句ニは及不ㇾ申故、句はいはぬ方がましと存候。其かはりニさくら川にて一句

いたし候。
　人の氣や花に乘行さくら川
漸〻此句にて芳野をすまし申候。少御下り可レ被レ成候。寄合一會申度候。爲レ指事も無レ之候得共あまり〳〵無音故如レ此候。以上
　　廿一日　　　　　　　　はせを
　　石せ三之丞樣

註、『芭蕉翁眞蹟拾遺』に所藏者を記さず掲出せるもので、「人の氣や」の句は初見である。

　　友水宛　　　　元祿元年

口上
御約束の繪賛漸く認進申候。つばめの顏つきにはおもしろく候。さのみ句はよろしくも無レ之候へ共、急ニ御なぐさみあるべくと如レ此ニ候。萬〻貴面と申殘候。則一軸遣し候。以上
　　　　　　　　　　　　はせを
　　友水丈

註、本文は京都の醫學博士西胡桃太氏所藏である。燕の句は「盃に泥なおとしそむら燕」であらう。

　　山子宛　　　　元祿元年

今日加茂迄人遣し候故乍レ序申入候。其後は御ぶ音いかゞ御暮候や。此許不二相替一居申候。扨は内〻御噂被レ成候北國の客來も今に見え不レ申候。是は覺文の方に留被レ居候哉と存候。猶又貴様方へ入來候はゞ可レ然賴入候。且又御約束の一句書進申候。

山吹のほろ〳〵ちるか瀧の音

是はよし野にて致候句にて御ざ候。さして面白も無レ之候得ども申進候。委は重而可二申承一候。以上

三月五日　はせを

山子丈

註、句は『曠野』に「ほろ〳〵と山吹ちるか」と出てゐる。孰れが先案か決しられない。本文は家本『芭蕉消息集』に據る。

其子宛　元祿元年

芳野にてさくら見せうぞ檜木笠

右之句ハ深川庵を出るとて致候。さて

よし野にて

山吹のほろ〳〵散か瀧の音

如レ此ニ候。兩句共ニ偖〻不出來千万口惜候。何分貞室句ニハ叶ひ不レ申候。併達而御所望故相認候而掛二御目一申候。諸事ハ重而〻。

廿一日　はせを

其子丈

註、本文は東京故波多野古溪氏の舊藏である。句は『笈の小文』にも出てゐる。

柳里宛　元祿元年

御文面忝存候。彌御安清ニ被レ成候由大慶之事ニ存候。當月集會御催之由、いかゝ御思召も可レ有ニ御ざニ候半と御察申居候。此間も和休老被レ申候は兎角流行之事きらひ候まゝ、是ニ而こまり古風可レ然候。又御掛物被レ遣讃之事もいかゞ可レ致、まつ〳〵畫圖にまかせ書入上可レ申句、乍レ序御内見ニ入申候

草臥て宿かるころや藤の花

右可レ然哉御伺申上候。又何も其内拜面可ニ申上一候。御報迄早〻

四月十一日　はせを

柳里様

註、本文は『俳諧文庫』の口繪にある鈴木百丈舊藏で、今は井上辰九郎博士の所有に歸してゐる。句は『猿蓑』に見えるが、これは畫讃用に舊作を擧げたのであらう。

惣七宛　元祿元年

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道のほど百三十里、此内船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、雨にあふ事十四日

瀧の數七ツ　龍門　西河　蜻蛉（セイメイ）　蟬　布留　布引　箕面

古塚十三　兼好塚　哥塚　乙女塚　忠度塚　清盛石塔　敦盛塚　人丸塚　松風村雨塚　通盛塚　越中前司盛俊塚　河原太郎兄弟塚　良將楠が塚　能因法師塚

峠六ツ　琴引　臍峠　野路小佛峠　くらかり峠　當麻岩や峠　樫尾峠

坂七ツ　粧坂　西河上ちいか坂　うばか坂　宇野坂　かふち坂　不動坂　生田小野坂

山峯六ツ　國見山　安禪嶽　高野山　てつかいか峯　勝尾寺ノ山　金龍寺ノ山

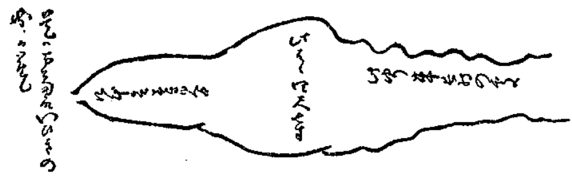
此外の橋の數、川の數、名もしらぬ山々は書付にもらし候。

卯月廿五日　　万菊

　　　　　　　桃青

惣七樣

註、伊賀上野町の福田彥七氏の所藏である。『枇杷園隨筆』所載のものとは小異がある。本文は万菊の杜國筆で桃青の二字が芭蕉筆である。有名な万菊丸鼾の圖はもとこの文通の片面に書いてあつたのである。



此の鼾の圖は万菊、桃青兩筆伊賀上野の惣七宛の文通裏に、同行の万菊事杜國の鼾を戯れに圖解して惣七に報じたものである。起筆は左から横書の

口本壹　壹寸貳分

これが鼾の震源になるのである。次に中央の

此はゞ　四尺七寸

震動の高さを標示し、右へ横書に

此ゆり車長持の處

震幅の連續を説明してゐる譯である。最後に「是は万菊殿いびきの圖に而御座候」とあるのが文通の一部に當るので、今原圖は逸して飛驒高山の加藤專一氏の許にあるのは臨寫である。圖は竹二坊の『はせを翁正傳集』所載のものよりは、土朗の『桃杷園隨筆』に「伊賀上野内神屋三四郎所藏」として掲げるものが、筆蹟から見ても正しいので、本圖はそれから轉載したのである。

猿雖宛　元祿元年

大坂迄御狀忝拜見、此度南都の再會大望生〻の樂ことばにあまり、離別之恨〻筆不レ被レ盡候。我たのもし人にしたる奴僕六にだに別れて、彌おもき物打かけ候而、我等一里來る時は人〻一里可レ行や、三里過る時は各今や三里可レ行や、いまだしや、梅軒何がしの足の重きも道連の愁たるべきと、墨賣がおかしがりし事ども云〳〵、石の上、有原寺、井筒の井の深草生たるなど尋て、布留の社に詣、神杉など拜ミて、こゑばかりこそむかしなりけれと詠し郭公の比にさへなりけれど、おもしろくて瀧山に昇る。帝の御覽に入たる事、古今集に侍れば猶なつかしきまゝに貳拾五丁わけのぼる。瀧の氣色言葉なし。丹波市、やぎと云所、耳なし山の東に泊る。

ほとゝぎす宿かる比の藤の花

と云て、なほおぼつかなきたそがれに哀なるむまやに至る。今は人〻舊里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て足のこむらをもませなどして、大佛の法事のはなしとり〴〵なるべき。市兵衞は草臥ながら梅額子へ巻ひけらかしに可レ被レ行、梅軒子は孫どのにみやげねだられておはしけむなど、草のまくらのつれ〴〵にふたりかたり慰て、十二日竹の內いまが茅舍に人。うなぎ汲入たる水瓶もいまだ殘りて、わらのむしろの上にて茶酒もてなし、かの布子うりたしと云けん万菊のきる物のあたひは彼におくりて通る。おもしろきおかしきもかりのたはぶれにこそあれ。實のかくれぬものを見ては、身の罪かぞへられて万菊も暫落涙おさへかねられ候。當

麻に詣でゝ萬のたつときも、いまをみるまでの事にこそあなれと、雨降出たるを幸にそこ〳〵に過て、駕籠にて太子ニ着。譽田八幡にとまりて道明寺、藤井寺をめぐりて、つの國大江の岸にやどる。いまの八間屋久左あたり也

杜若語るも旅のひとつかな　愚句

山路の花の殘る笹の香　一笑

朝月夜紙干板に明初て　万菊

二十四句にてやむ。

十九日あまが崎出船。兵庫ニ夜泊、相國入道の心をつくされたる經の嶋、わだのみ崎、わだの笠松、內裏やしき、本間が遠箭を射て名をほこりたる跡などきゝて、行平の松風村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡かなしげに過て、西須磨に入て、幾夜ね覺ぬとかや關屋の跡も心にとまり、一ノ谷逆落し、鐘懸松、義經の武功おどろかれて、てつかひが峯に昇れば、須磨、あかし、左右にわかれ、あはぢ嶋、丹波山、かの海士が古里、田井の畑村など、めの下に見おろして、皇の皇居はすまの上のと云る其代のありさま心に移りて、女院おひかゝへて舟にうつして、皇を二位どのゝ御袖によこ抱ニいだき奉りて、寶劍、內侍所、あはたゞしくはこび入、或は下々の女官はくし箱、油つぼをかゝへて、指ぐし、根卷を落しながら緋の袴にけつまづき、臥轉びたるらん面影、さすがに見るこゝちあはれなる中に、敦盛の石塔にて泪をとゞめ兼候。磯近き道のはた、松風のさびしき陰に物古たるありさま、生年拾六歲にして戰場にのぞみ、熊谷に組

ていかめしき名を殘し侍る。其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速、君わするゝ事なかれ。此一言梅軒子へも傳へ度候。須磨寺のさびしさ口を閉たるばかりニ候。蟬折、こま笛、料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしよりすまに歸りて泊る。

廿一日布引の瀧に登る。山崎道にかゝりて能因のつか、金龍寺の入相の鐘を見る。花に散けるといひし櫻も、わか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舖、近衞どのゝ、宗かんがすがたを見れば餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て

有難きすがた拜まんかきつばた

と心のうちに云て、卯月廿三日京へ入。

註、川口竹人の『芭蕉翁全傳』に「翁在京、猿雖への返書」として掲ぐるもので、「飛驒高山の雲橋社傳來の同行杜國から惣七宛のものと併せ見ると旅中の消息が殊によく解る。

嘉右衛門宛　　　元祿元年

御使被レ下殊ニ何よりの品御心ニかけ忝存候。歸り候後ハ他出も不レ仕、御暇し候明石には緩々逗留幸に能人に逢殘る所もなく、其内三人ニ成候而こゝかしこ集會、濱道致候而ハかく侍り候。

蛸壺やはかなき夢を夏の月

又〻御目ニかゝり候。右御禮のみ申上候。以上

十二日　はせを

嘉右衛門様

註、松葉軒の『誹諧眞蹟集覽』（天保十二年刊）に「臨江舍所藏」として、自筆の通り摹刻せる一通である。

千那宛　元祿元年

名月前態〻御隙に被レ成御待可レ被レ成義、御用候はゞ御勝手に可レ被レ成候。拙者下り候事いつとも難レ定候間、名月過にも成事可レ有二御座一候。越人も如レ此發句いたし候。

稗の穗の馬にがしたる氣色哉

愚句又

猪もともに吹るゝ野分かな

いかゞ候半や。能と申ニては無二御座一候。先懸二御目一候。さて加生、越人へ挨拶、

男ふり水呑顔や秋の月

八月四日　はせを

註、加生が越人と逢つた時とすれば文通の年次が解る。本文は闌更の『有の儘』及び『落葉考』に出てゐる。

來角宛　元祿元年

口上

此書狀三通幷しぶ紙包、へそ村にて、やくわんなおし長右衛門と申方へ御屆可レ被レ下候。不レ叶用事被レ遣候。是も我等事にては無レ之、桑名家中衆ゟ被レ賴候。右長右衛門と申人、やくわんなおしには似ぬ小しやくものにて、少醫者心もあり、俳諧別して好候て下手成りによく候。かならずゞゝ無二御失念一賴入候

木曾路のもどりにより候へば被レ賴參候。さて木曾にて

木曾の痩（マヽ）また直らぬに後の月

右之句にて、十三夜はすまし被レ申候。以上

十九日　　　　はせを

來角丈

註、句は『さらしな紀行』に出てゐる。本文は富山市遠藤霜井氏の所藏である。へそ村は何處であるか知れない。

無宛名　　　　元祿元年

新麥一斗、筝三本、油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり。蕎麥粉一重、小遣錢二百文、忝そんじ候。

註、『小文庫』の「御命講や油のやうな酒五升」の句と同年の文通であらう。本文は重厚の『もとの水』に出てゐる。

哥笑宛　　　　元祿元年

いかゞ御暮候哉と存候處、こま〳〵との御狀くり返し拜見申候。彌御無事ニ御入候由目出度存候。此方ニても同じ樣に居申候。段々寒氣ニ成候而こまり存候。あまりさむくならぬうちに御出待入候。御咄申度事共御座候。さては次郎三郎どの婚禮も近々ニ相調候段、是又よろこび申候。とかく善はいそげと申事に候へは尤ニ候。

雪と雪今宵師走の明月か(一)

右ほ句の心成べし。どちらも不足なき婦夫ニて可レ有レ之候。猶よろこびながらニ上京可レ申候。

以上

極二日　はせを

哥笑丈

註、支考の『笈日記』には「杜國亭にて中あしき人の事取つくろひ」と詞書のある句を本文婚禮の場合に轉用したであらう。伊賀阿保町龜井曉氏の所藏である。

市之丞宛　元祿元年

昨日は素堂、杉風へ御出會之由、庵にても其角と御噂申候。ほ句仰にまかせ懸二御目一候。くれ〳〵御息女樣御書寫感心不レ少候。早々

菊鷄頭きりつくしけり御影講

はせを

市之丞様

註、句は尚白の『忘れ梅』に出てゐる。本文は『纂註芭蕉一代集』に據る。

尚白宛　　元祿元年

襟巻に首引入て冬の月　　杉風

火桶抱てをとかひ臍をかくしけり

此作者は松もとにてつれ〴〵よみたる狂隱者、今我隣庵に有。俳作妙を得たり。

雪ことにうつはりゆかむ住ゐ哉　　苔翠

冬籠又依そはん此はしら　　愚句

菊鷄頭切盡しけりおめいこう　　同

句はあしく候へ共、五十年來人の見出ぬ季節、愚老か拙き口にかゝり、若上人眞靈あらは我名ヲしとそわらひ候。此冬ハ物むつかしく句も不レ出候。以上

極月五日　　芭蕉子

尚白様

註、蕉逸の『類題名家發句集』（嘉永元年刊）に眞蹟のまゝ摹寫してある。「火桶抱て」の作者は路通である。「今我隣庵に有」で年次が推測される。

無宛名　　元祿二年

尙〻再會のいのちも哉とねがひ申事に候

去年の秋より心にかゝりておもふ事のみ多ゆへ、却而御無さたに成行候。折〲同姓方へ御音信被ㇾ下候よしにて申傳へこし候。さて〲御なつかしく候。去秋は越人といふしれもの木曾路を伴ひ、棧のあやうきいのち、姨捨のなぐさみがたき折、きぬた、引板の音、しゝを追すたか、あはれも見つくして御事のみ心におもひ出候。としは明ても猶旅の心ちやまず。

元日は田每の日こそ戀しけれ　　はせを

彌生に至り待侘候鹽竈の櫻、松島の朧月、あさかのぬまのかつみふくころより北の國にめぐり、秋の初、冬までにはみのおはりへ出候。露命つゝがなく候はゞ又みえ候て立ながらにも立寄可ㇾ申かなど、たのもしくおもひこめ候。南都の別一むかしのこゝちして、一夜の無常一庵のなみだもわすれがたう覺、猶觀念やまず水上の淡きえん日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に拂捨、一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに佗し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつし〲てこもかぶるべき心がけにて御座候。其上能道づれ、堅固の修業、道の風雅の乞食尋出し隣庵に朝夕かたり候而、此僧にさそはれことしもわらぢにてとしをくらし可ㇾ申と、うれしくたのもしく、あたゝかになるを待佗て居申候。

一宗無老御無事に御座候哉。何角に付ておもひ被ㇾ出候。尙〻江戸御下被ㇾ成候はゞ、節句過には

拙者は發足仕候間、それまでに候はゞ懸二御目一度候。以上

註、文學博士藤井紫影氏が曾て編者の發行せる雜誌『にひはり』に所見を報ぜられたもので、本文に「宗無老御無事に御座候哉」とある伊賀への文通であるが宛名は知れない。

秋風宛　元祿二年

追而申入候。此度三度飛脚に申遣候事は、京の勝手能存候故指圖せられ候。からす丸通りにていづれにても御誂御下可レ給候。文庫幷革にて覆ともに賴入候。料は書付御下し可レ被レ成候。又ゝ飛脚に上可レ申候。さて俳諧もはやり申候。何を申てもけはしき處故しみ〴〵とは出來不レ申候。此ほど愛宕の下へ參申候。二三會も興行有レ之、江戸衆も參り上手になられ悅び申候。

蛤にけふは賣かつわか菜哉

右の句を元にして百韻いたし。其節其角なども參りおもしろく慰み申候。貴丈事噂申出候。猶追々可二申入一候。

廿三日　はせを

秋風丈

鄙哥自得

おもふことふたつのけたる其あとは
花のみやこもゐなかなりけり

以上　はせを

註、成美と道彦両校の『俳諧奇跡録』にあるもので句は前年のものと思はれる。別の一通には「荒鵜に」となつてゐる。

怒誰宛　元祿二年

一御修行相進候と珍重、唯小道小技に分別動候て、世上の是非やむ時なく自智物をくらます處、日〻月〻年〻の修行ならでは物我一智之場所へ至間敷存候。誠御修行御芳志頼母敷貴意事に令レ感候。佛頂和尚も世上愚人に同じ聲をからされ候。御噂なども適〻出申候。猶追而可二申上一候。此節書狀取重候。頓首

正月廿九日　はせを

怒誰雅丈

貴様

註、對竹庵少哉の『筑紫舩句集』の卷頭に自筆を摸してある。文中の「佛頂和尙」は江戸臨川寺の住持である。

風流宛　元祿二年

追而申進候。日外御尋被レ成候松しま行脚の春發句之事失念、風斗存出し候故乍二延引一申進候。

草の家も住替る世はひなの家

ゆく春や鳥啼魚の目ハ泪

此両句にて御さ候。偖〻延引之段如在之儀に存候。御免可ㇾ被ㇾ下候。猶委ハ頓而〻參候而萬〻可ㇾ申入ㇾ候。以上

卯月廿二日　はせを

風流丈

註、宛名の風流は出羽新庄の人なので、「頓て〳〵參り候て」と文中にある如く對面前の文通であらう。本文は『一葉集』に出てゐる。

老周宛　元祿二年

名取川、松嶋、鹽かま見に侍るに絵師嘉右衛門と云ふ者、やさしきおかしき男にて、こんの染付の緒付たる草鞋二足はなむけにす

あやめ草足にむすバん草鞋の緒

此句をいたし歸り申事ニ候。さて遠國のものニハめづらしきやさしきおのこ、愚老も心おかれ申事に候。世間を歩行見ればいろ〳〵人の心はちがい申事ニ候。これをおもへバ面〻ニたしなみ申事ニ候。つか〳〵とあなどりだてなどをすると、はぢをかき可ㇾ申候。若キ衆中はたしなみたま へ〳〵。以上

十八　はせを

老周丈

註、本文は伊豫八幡濱の高橋長平氏所藏である。仙臺で畫工嘉右衞門の風流に感じた『奥の細道』の記事と一致する。

次兵衞宛　元祿二年

尙〻御家内へよろしく御傳可レ給候。以上

先月者御立寄いろ〳〵御馳走、草鞋までもらひ忝悦入申候。翌日倶利伽羅をこえ金澤へ着申候。又因緣も候ハゞ重而懸二御目一可レ申候。先爲二御禮一如レ斯御座候。以上

七月二十一日　芭蕉　花押

宮永次兵衞樣

註、本書は越中礪波郡川崎村宮永十左衞門所藏として『芭蕉翁眞蹟拾遺』に紹介してゐる。本文はその原稿で今は同國福光町の石崎木雨氏の所藏である。

塵生宛　元祿二年

尙〻遠方御志之段不レ淺忝と存候。貴面御禮可二申上一候。以上

御飛札殊ニ珍敷乾うどん貳箱被二贈下一不レ淺御志之義と忝存候事ニ候。如レ仰此度は得二御意一珍重ニ存候。此地へ急ギ申候故御俳談も不レ申殘念ニ存候。然ば天神奉納發句之義得二其意一候。無二別義一御座候。入湯仕舞候はゞ其元へ立寄申筈ニ御座候間、其節之義ニ可レ被レ成候。猶其節御禮可二申伸一候條不レ能レ祥〔詳カ〕候。不宣

八月二日　　　　芭蕉

塵生雅丈

廻酬

註、越中の〳〵庵麻父の舊藏で甫尺の添狀があり今は金澤の殿田良作氏所藏である。宛名の塵生は加賀小松の人である。

木因宛　　　元祿二年

此度さま〴〵御馳走、誠以痛入忝ㇾ存候。爰元へ御參詣被ㇾ成候ニやと心待ニ存候處いかゞ被ㇾ成候哉、御沙汰も無二御座一御殘多、拙者も寛〻遷宮奉拜大悅に存候。

此狀御屆被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候。方〻かけまはり申候ハゞ又〳〵美濃筋へ出可ㇾ申候間、其節万〻可ㇾ得二御意一候。

此地江戸才丸、京信德、拙者門人共十人斗參詣、おびたゞしき連衆出合ながら、さハがしき折節ニ而會もしまり不ㇾ申、神樂拜に一日寄合さのみ笑ひて散々ニ成申候。以上

九月十五日　　　はせを

註、名古屋市の澤市郎右衛門氏の所藏である。支考の『國の花』に載するものの原輸で、文字もこの方が正しい。

杉風宛　　　元祿二年

本因舟ニ而送り如行其外連衆、舟に乗りて三里はかりしたひ候。

秋の暮行先〻は笘屋哉　　木因
萩にねようか荻にねようか　　はせを
霧晴ぬ暫く岸に立給へ　　如行
蛤のふたみへ別行秋ぞ　　愚句

二見

硯かと拾ふやくぼき石の露

先如レ此ニ候。以上

九月廿二日　　はせを

註、伊勢から江戸の杉風に送つた文通で、宛名はないが杉風六世鯉屋杉露の添書で杉風宛と解る。伊勢四日市の故鈴木芦竹氏の蒐集品である。

北枝宛　　元祿二年

前略

一松岡茶店にての句、物書て扇引さく別哉と直し申候。脇てには留メにて候。てには留メは脇にては草にて、神祇、追善、祝義、本式はいかい、貴人の挨拶、すべて我より上たる人のほ句にはせぬ事ニ候。我も只今にてハ其元の師に候間、挨拶の脇ニてには留はよろしからず候。外より彼是申もの御座候てハ両人ともにふつゝかに見へ申候。山中問答にも三ツ物の事御尋なく我も心付

不レ申候。此度委三ツ物傳別帋にて申入候。是にて第三文字留メ草の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可レ被レ成候。去來、丈草、凡兆、正秀なども問答見たがり申候。脇付替り候へども第三、四句め付て可レ進候。御望の兩吟初可レ申候。春は西國望ミ御座候間多中調へ申度候。されども伊賀へ用事も御座候間、伊賀を先に可レ致も難レ斗候。ちと親類内用にて捨がたき事ニ御座候。伊賀便り次第に心得可レ申候。西國へは何とぞ同行に致度候間、其御心得頼入候。左樣ニ候へば兩吟急ぎ申事もなく候。二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候。外遠貳人我と三人にて歩行候へども、知音もなく候て見物所斗尋歸候。宗房時分の事に候得ば所々發句留候へどもおかしからず、とゝのはぬ事而已にて一句も咄事なく候間、此度は吟じ直し度存念ニ候。其元同行においては十人にもまさり、ちからを得候事ニ候間、決定の御返事待入候。又々問答可レ致候。万子、牧童、秋の坊、句空、小春などの英雄へもよく〳〵御達したのみ存候。不具

十月十三日　　はせを

北枝樣

註、文中の「物書て」の句は『卯辰集』と相違して再案の方である。猶前文があるのを闌更が『蕉翁消息集』に「加賀滿吹所持」の本文を採錄に際して省略したのである。文通の年次には元祿七年說もあるが日附が合はない。

意水苑　　元祿二年

いかゞ御暮候哉と存候。[二字汚損]折ふしこま〳〵との御文忝存候。此表ニも自二彼地一五六日以前か

へり申候。正水丈承候へハいづれも御無事之よし悦申候。長旅のつかれ故今日迄庵をはなれ不レ申候。さてハ奥にてノ句共數多候へど、さのみ是と存候程ノ句も出來不レ申候。仍而

佐藤庄司か舊跡に古寺有、一家石碑を殘す。

義經の太刀辨慶笈を仔物とす

笈も太刀も五月にかざれ帋幟

右之句致申候。定而此句之事にて可レ有レ之候。其外ハ追々可二申入一候。以上

廿三日　はせを

意水丈

註、奥の細道の旅を了つて伊賀の故庵で疲れを休めた頃の文通であらう。井上辰九郎博士の所藏である。

其角宛　元祿二年

名取川を越て松島鹽竈見に罷り侍るに、繪師加右衛門と云ふ者優しくおかしき男にて、紺の染付の緒付たる草鞋二足餞す

菖蒲草足に結ばん草鞋の緒

其後は久しく便りなく候。如何御暮被レ成候哉。愚老此間奥より歸り申候。所々にて逗留一句づゝ致候。併大暑の時分長途困り入候。貴様など道中致候はゞ面白き事にて可レ有レ之と存候。京へ用事も有レ之候に付登申度存候得共、爾レ今草臥やみ不レ申一日々々と延引に成候。今日は雲竹

老より人參り候故次手ながら申入候。何事も近〻懸ニ御目ニ可ニ承申ニ候。以上

十一日　　はせを

其角丈

註、積翠の『芭蕉句選年考』に引く一通で、伊賀の故庵から奥の細道の齡中を想ひ起して江戸の其角へ文通したものであらう。

意水宛　　元祿二年

返〳〵御兩親へも御内方ニも御心得可レ被レ下候。以上

三十郞殿御上京候故一筆申入候。其後は御沙汰も不レ承いかゞ哉。何之御替も有レ之間じくと存候。我等も此四五日以前北國ゟ歸申候。すぐに美の路へこし候而、如行之許に十二三日もあそび居申候。貴丈之噂いたし候事にて候。さて八越前三國にていたし候ほ句

小萩ちれますほの小貝小さかづき

同國禪閣に泊りて

庭はきて歸らん寺の柳かな

此兩句致候。いかゞ御ざ候哉。御なぐさみ可レ給候。爲レ指事も無レ之候へ共愚身も無事にて歸申候。爲ニ御知ニながら如レ此ニ候。山木丈には別紙に不ニ申入ニ候。貴丈ゟ御意得可レ被レ下候。猶近日可レ得ニ御意ニ候。以上

廿三日　桃青

意水丈

註、「庭はきて」の句は『奥の細道』と相違する。土居剛吉郎氏が大阪で蒐集された中の一通である。

哥友宛　元祿二年

御ふみ被レ下忝候。あまりさびしく獨り言を引出し候。雲のうへはありしむかしにかはらねど見し玉たれのうちぞゆかしきノ心を引而

むざんやな甲の下のきり〳〵す

此句は實盛の館にていたし置候句にて候。いづれニも全部の屈きたるやうに存候。此間も山々の紅葉をながめひとりたのしみ申候。少〻御手透ニも候はゞ御立出まち入候。一兩輩寄合、口ずさび申たく候。先々御尋御報旁以如レ此ニ候。以上

五日　はせを

哥友丈

註、『奥の細道』の旅行を終つた頃の文通のやうで、金澤市下堤町呉座太一氏の所藏である。淡々の添状がある。獸池の『袖珍抄』にも出てゐる。

元禄二年

清右衛門宛

以二手紙一申入候。久々御物遠に打過候へ共いよ／＼御さゝはりもなくめでたく存候。さて又なが／＼の旅路色々さま／＼御咄申度事とも山々御ざ候。爰元え着いたし候ては何の別條もなく、不二相替一そく才に居申候。一見の句御めにかけ申候。

蛤のふたみに別れ行秋ぞ

尚々委細は先達曾良に御聞と存候。近々得二御意一可二申承一候。以上

十三日　はせを

清右衛門様

註、文中の「爰元え着いたし候て」は伊賀の舊里であらう。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に収めてある。

元禄二年

松月庵宛

一兩日は別而寒冷ニ御坐候。御障も無二御ざ一候哉。此間は御入來之所、勢州之人被レ參候まゝ御構も不レ申候。當年は少しも旅行之存寄無レ之候。昨秋より之他行今比は信濃路を過ぎ候頃にて、あまた侍へりけ。

雪ちるや穂屋のすゝきの刈残し

うき事も有又樂しみもあり候。此書狀キ角子より貴庵迄被レ屆度、内々申被レ參候御屆の品にて候。

面上可二申上一候。以上

霜月廿二　　　　はせを

松月庵

御坊え

註、「雪ちるや」の句入り文通は以下五通ある。句は『猿蓑』にある。穂屋祭は七月である。芭蕉がその頃信濃路を旅行したのは元祿元年である。併し句も文も冬期と見られ、文通の年次の推定に苦むので假に二年説に從て置く。本文は宇都宮市の入野俊一郎氏所藏である。

無宛名　　　　元祿二年

尚々頓而〳〵御來待入候。　以上

雲竹老迄人遣候ニ付一書申入候。其元御替も無レ之よし數々目出度存候。此方無事ニ居申候。さてハ無　集之事江戸表ゟ愚老へ度々申遣候間、片時もはやく御調被レ遣まじく候哉。さて〳〵氣長キ御事込入存候。遠路故指下候ニもこほり候間も有レ之事御ざ候へバ、はやく〳〵遣度存候。迚之義ニ此方にて除入不レ申樣とく〳〵御認御越可レ被レ成候。又信濃路過ルとて發句之事、則相認進申候。

雪ちるや穂屋の薄の刈殘し

右之句にて御ざ候。たんさくニハ何方へも相認不レ申候まゝさニ御意得可レ被レ下候。尚重而〳〵

以上

廿八日　　　　はせを

註、これは木曾塚の無名庵から出した文通と思はれる。本文は紀伊二郷村の長井甚三郎氏の所蔵である。

智　月　宛　　　　元祿二年

御紙面拜見、殊に又何寄の品々御厚志に被レ懸忝受納仕候。其後ハ誠に御無沙汰申上候。當年はいづれへも他行不レ致只閑居仕候。去冬今頃は信州通過まことに雪澤山にこまり入候。信濃路出遊

雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し

何も又拜顏可レ申候。右御れいのみ申添候。以上

智月尼さま　　　　風羅坊

註、本文の「去冬今頃は」から「雪澤山にて」が年次の推定を妨げる。本文は沼津市醫師槇豐作氏の所蔵である。

無　宛　名　　　　元祿二年

信濃路は雪深き所にて、野山も白たへとうつりかわり候へども、着物にはいまだつもり不レ申候。

雪ちるや穗屋の薄のかりのこし

註、本文は闌更の『落葉考』にあるが、誰人かへ文通の斷簡であらう。

信分宛　元祿二年

自二尾州一廿二日に御歸之由被二仰越一候。先ゝそくすニてめて度候。道の記御認御遣し一覽候。いづれも出來申候。信濃路ニて二三句ハ別而よろしく候。

雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し

此句類なく候べし。愚老句より貴樣の句上ニなり候。委は面談とあなかしこ

廿日　はせを

信分丈

註、文意によると「雪ちるや」の句は宛名の信分の作のやうに見えるのが不審である。本文は『一蕉集』に載つてゐる。

無宛名　元祿二年

炭取被レ懸二芳情一幷挽炭雪の名殘三枝、風情見物ありて一入厚感入仕候。爨の爐邊無念たるべく候。前宵緩ゝと御語被レ成大悅不レ淺奉レ存候。風麥子へ被レ遣被レ下候よし是又忝、案のごとく客僧今日被レ歸茅屋ニ滯留ニ候。猶客僧送り立候而可レ得二御意一候。ほこりの中も珍敷思召候ハヾ隨分御出御かたり可レ被レ成候。以上

十九日

註、伊賀上野町の田中善助氏所藏である。本文は家兄半左衞門方に歳晩を過した頃のものであらう。

無宛名　元祿三年

一北海集之事序之事申被レ越候。尤とりあへずしたゝめ可レ申事ながら遠境心にもまかせず候へバ、延引ニ成候而氣の毒ニ存候間、其元ニ而いかやう共御書なぐり可レ被レ成候。愚句兩吟にて御申度候。愚作交り過候而もよろしからず候。急便故早〻　以上

正月十六日　はせを

註、文中の「北海集の事」は『卯辰集』であらう。金澤の殿田良作氏所藏である。

杜國宛　元祿三年

いかにしてか便も無二御座一候。若くは渡海の船や打われけむ病變やふりわきけんなど方寸を砕のみに候。されども名古屋のふみに御無事の旨推量に見え申候。拙者も霜月末南都祭禮見物して膳所に出越年、歳旦、京ちかき心

こもをきて誰人ゐます花の春

冬

初しくれ猿もこみのをほしけ也

山中に子供と遊ぶ

初雪に兎の皮の髭作れ

南都

雪悲しいつ大佛の瓦ふき

京にて鉢扣聞て

長嘯の墓もめぐるか鉢扣

歳暮

何に此師走の市に行烏

急便早々に候。正二月の間いがへ御こし待居候。宗七も御噂申計に候。

正月十七日　はせを

万菊丸樣

註、本文は三河幡江町の故渡邊耕一郎氏の所藏で『芭蕉翁眞蹟拾遺』には「參州畑村醫師原氏に傳へ藏す」と出てゐる

北枝宛　元祿三年

此君舍より白米五斗發句一句

一に俵ふまへて越せよとしの坂

かくめぐみたまふに、只四壁なるかりのすまゐにハ過たるとしだ

まながら、寐ざめこゝろよくて

元日や疊の上の米表　北枝

翁文の中

さて〳〵感心不ㇾ斜、神代のこともおもはるゝ、といひける句の下にたゞんことかたく候。神代の句ハ守武神主身分相應に情の奇なるところ御座候。米俵ハ其元相應に姿の妙なるところ有ㇾ之候。別而歳旦、歳暮、不相應なるハ名句にても感慨なきものニ候。今年天下第一の歳旦可ㇾ成と、京、大津の作者も致二稱美一候。不備

正月廿四日　芭蕉

北枝様

誰人か菰着てゐます花の春

何人かとも、いかゞ御評待入申候。菰を着てたれ人いますとも。

註、閑更の『蕉翁消息集』に「加賀金澤布流」の所持とあつて、北枝の歳旦を賞美した文通である。

句空宛　元祿三年

卷尤俳諧くるしからず候へ共、一體今の存念にたがふ事殘念之事ニ御座候へども、和歌三神其一分はかゝはり不ㇾ申候間其儘指置候。かりそめの集等皆名利僑慢の心指にとおもひ立候故皆見所を失ひ申候。何とぞ風雅のたすけにも成り、且は道建立之心にて言葉つまりたる時をくつろげる味ニ而、折〻集を出し候處に、三年昔の風雅只今出し候半は跡矢を射ごとくなる無念而已ニ候。

何とぞ御さそひ候而廿日ならず候はゞ、十五日之滯留にて三月十日頃上津あれかし。實に風雅ニ心をつくされ候樣にと被レ存候。乍レ去世上之人ニ而御座候へバ心にまかせぬ事も可レ有二御座一候間、上京成間敷候ハゞ何事も沙汰なしにて急ゝ板行御すゝめ可レ成候。集之題號卯辰集と可レ有哉。山の字重き樣ニ被レ存候。是も拙者好ニ而も無二御座一其元評件(マヽ)ニ御まかせ可レ被レ成候。以上

句空樣　　はせを

一次郎助其元仕舞候而上り可レ申旨、智月も次第ニ老衰尤大孝候。則さも可レ有事被レ存候。早ゝ登り候と御心可レ被レ付候。

註、文中の『卯辰集』は元祿四年の板行なので、その前年の文通であらう。雪袋の稿本『續句空庵ノ記』に「右芭蕉翁眞蹟越中滑川蚊和所持す」として載つてゐる。

珍夕宛　　元祿三年

越人よりも狀こし候よし一段の御事ニ御坐候。此方へもとゞき候發句有レ之候。

思ひきる時うらやまし猫の戀

と申越しよろしく候。

愚句

不性さや抱起さるゝ春の雨

又こゝもと門人の句に

　庭興

梅か香や砂利敷流す谷の奥

今おもふ所に聊叶候へば書付候進。

　　二月廿二日　　　　　　　　　芭蕉

　　珍夕様

註、本文は土朗の『枇杷園隨筆』に「右眞蹟、三河都築和樂にあり」と見える。句は『猿蓑』に出てゐる。

　　奴誰宛　　　元祿三年

　尙〻御老母様可ㇾ爲ニ御堅固ㇾ奉ㇾ存候。とやかく巾内曲水丈、春を打越無御悦可ㇾ被ㇾ成候。

幻住庵再興之時節も過候間、誠まぼろしの日數頓而入庵之節に成可ㇾ申候。

貴翰忝拜見并半紙一束被ㇾ懸ニ賢慮ㇾ、毎〻御厚情不ㇾ淺、難ニ筆端盡ㇾ奉ㇾ存候。御目まひ度〻に及申候由氣之毒奉ㇾ存候。陽性上る時候故と存候間養生主要用ニ存候。御公用被ニ仰付ㇾ候由珍重ながら御持病の御爲如何と無ニ心元ㇾ存候。包丁が牛御手に可ㇾ被ㇾ入候。南經齋物過半ニ至候由、連衆が中來大儀之處はがを御やり被ㇾ成候而御手柄奉ㇾ存候。隨分淸眼微細ニ御開可ㇾ被ㇾ成候。且拙者持病も折〻氣指候へ共、大痛も不ㇾ仕、舊友風情之輩せつき申候而よほどやかましく御座候間、來月出京可ㇾ致と心掛申候へども、いろ〳〵のがれぬ事ども仕出かし、夏秋までも可ㇾ留たくみい

たし候。隨分拔出京邊貴境にて卯月末頃までは足を可レ留存候。後之事を思案致すまじきよし、洒落が棒を送候へば吹風に可レ任候。返翰數多及二早筆一候。頓首

二月廿二日　芭蕉

怒誰雅伯

註、近江石山の幻住庵に入る下準備をしてゐた頃の文通で、寫本『芭蕉消息集』に「完來宅ニテ寫」と出てゐる。

嵐雪宛　元祿三年

前略

ふるさとこのかみが園中に三草の種をもりて

春雨やふた葉にもゆる茄子種

此たねとおもひこなさじとうからし

芋種や花の盛りを賣ありく

口にいへるまゝに申つゞけ候。御秀作御ゆかしく存候。以上

三月廿三日　はせを

嵐雪丈

註、文中の「ふるさとのこのかみ」は伊賀上野の家兄半左衛門方で、句は梅員の『蛙の古道』に三句とも載つてゐる。本文は『蕉翁消息集』に見える。

平井宛　　元祿三年

一書申入候。此四五日以前鳴瀧秋風に誘引せられ花見に參候、道つもりは四五里斗りもあるべく朝はよき元氣にて是は〳〵嬉しやとおもひ、互に面白く出候處に、八ツ時より俄に天かきくもり大雨ふり出し、さて〳〵迷惑なのめならず、併あたゝかにはあり、たとへ野宿をするとても、此はなを見殘しては一生のうらみと存じ、しやぢくの雨も不レ構、隨分見殘不レ申候。あまつさへぬれながら一句

紙きぬのぬれても折らん雨の花

此句路草許にていたし歸り候。御なぐさみ可レ給候。又々可二申承一候。以上

八日　　桃靑

平井丈

註、句は乙孝の『一幅半』に出てゐる、路草は乙孝の事で伊勢の人だが當時在京したと見える。本文は金澤の野村蘭花城氏の所藏である。

此筋・千川宛　　元祿三年

一愚句御覽被レ成候由、させる事も無二御座一候へ共、出申候ハ無事の有所をしらせん爲に板木に顯し候。又一ツは京の門人去來などいふものにそゝなかされ可二申出一候。五百年來のむかし西行の

撰集抄に多くの乞食をあげられ候ニ愚眼故、能人見付ざる悲しさに、二度西上人と思ひかへしたる迄に御座候。京の者ともこもかぶりを引付の巻頭に何事にやと申由、あさましく候。

卯月十日　　はせを

此筋丈

千川丈

註、闌更の『蕉翁消息集』に「大津宰陀ニアリ」と原翰の所在を記し「前後の文長し」とその他の部を省略してゐる。「愚句御覧」は「誰人か菰着てゐます花の春」の句であらう。

怒誰宛　　元禄三年

芳情精神不レ滞不レ恥不レ恐、大道自然之對談誠不レ安事共御座候。

君やてふ我や荘子か夢心

筆の心殊之外よろしく筆人大道之筆意同工作之物と感心仕候。

孟夏十日　　はせを

怒誰様

註、東京の井上辰九郎博士の所藏である。「君やてふ」の句は初見である。

北枝宛　　元禄三年

池魚の災承、我も甲斐の山さとにひきうつり、さま〲苦勞いたし候へば御難義の程察申候。されどもやけにけりの御秀作、かゝるときに望大丈夫感心、去來、丈草も御作驚申斗ニ御ざ候。名哥を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御替被ㇾ成候へバさのみおしかるまじく存候。知音たれ〲此度の難にまぬかれずや。連中たしかなる事不ㇾ承候間短帋も不ㇾ遣候。よく御傳達可ㇾ被ㇾ下候。以上

四月廿四日　　はせを

北枝丈

註、元祿三年の火事見舞に書送つたので、『蕉翁消息集』には芭蕉の嘆賞した「やけたりされども花はちりすまし」の句を添へ、「金澤如本所持」として掲ぐ。

小春宛　　元祿三年

何處持參之芳翰落手御無事之旨珍重ニ存候。類火難御のがれ候よし、是又御仕合難ㇾ申盡ㇾ候。殘生いまだ漂泊やまず湖水のほとりに夏をいとひ候。猶とち風に身をまかすべき哉と秋立比を待かけ候。且兩御句珍重、中にもせりうりの十錢小界かろき程我が世間に似たれば感慨不ㇾ少候。口質他に越候間いよ〲風情可ㇾ被ㇾ懸ㇾ御心ㇾ候。愚句

京にても京なつかしやほとゝきす

暑氣に痛候而及ㇾ早筆ㇾ候

季夏廿日　はせを

小春雅丈

註、關更の『蕉翁消息集』に「加賀城下宮竹屋伊右衞門所持」とあり宛名の小春の家は金澤の宮竹屋で明治初年まで家運が續いたが、その沒落竄立の時、同じく金澤下今町の村松七丸氏の有に歸したのである。本文は村松氏所藏に據つた。

去來宛　元祿三年

今日宇治へ參候。貴丈にも御出被レ成ましく候哉。此元仙水にも被レ參候筈約束申候。大阪からうちへすぐに杉風抔も被レ參候樣ニ申來候。貴丈ニ御出候へば件の方勝手よく御存故一入ニ存候。愚老は此中上林三入老所ニて一句申候。

ほたる見や船頭醉ふておぼつかな

右之句ニて御座候。野坡丈へは貴丈ゟ御申越可レ被レ下候。此中は手しびれ候ゆへ筆跡も麁末ニ認候段御免候。以上

卯月廿一日　はせを

去來丈

註、越中の荒木文平氏舊藏のよしで殿田良作氏から報ぜられたもので、『蕉翁消息集』には「加賀吉良所持」と見える。

野坡宛　元祿三年

別紙申入候。さては日外ちらりと咄申候伊勢の曾良がせし松しまの句に

松しまや鶴に身をかれ時鳥

成程〳〵是などは其儘にせし句なれども、手爾葉と云ひ心の奥ゆかしき風情天晴面白く候。愚身なども此類を如才なくして見たく候へ共、中々出不レ申候。とかく曾良などは今時の上手と申す内へ入候。貴様とても同じ達者成事に候へば、何とぞ行脚の旅一生の内に思ひ立ち候て修行あるべく候。さもなくては中〳〵鼠細工ばかりして世間略くは成がたく候。しかしながら貴様には曾良など〻違候て身の重き人に候へば、兩親存生の内は成申間敷候。其内心がけ第一に御座候。是もいらざる智恵付け様あるべく候へ共云ふて見るまで、ちと〳〵粟津へ御出待入候。かしこ。

十八日　はせを

野坡丈

註、故峯青嵐氏の舊藏である。編者が照會した時は九州の人に割愛した後であつたので、宛名は果して野坡かどうかと云ふ不審を晴されなかつた。野坡とすると「ちと〳〵粟津へ御出」が不審になる。

吟水宛　元祿三年

追而申より。内〻御約束のほ句さて〻毎事忘申候。今日はゆひをくゝり居候處、先書ニはつたり忘れ申候。追書ニ成候。最上ニてハ

行すへは誰肌ふれん紅のはな

右之句にて可レ有レ之候。外ニハ是ハと申程の句も無レ之候。仍而不ニ申入一候。おもひ出し候ハヾあとゟ重便ニ可ニ申述一候。か水丈よろしく御心得可レ給候。何角役ニもたゝぬ事ニ隙無レ之候。さて申兼候へ共早つきノ麥一袋急ニ御のぼし可レ給候。四五日中ニ客僧一兩輩來筈ニ候へば間ニ合せたく取込、以上

九日　はせを

吟水丈

註、文中の「最上ニてハ」は出羽で細道行脚の句であらう。支考の『西華集』を初出とする。本文は攝津池田町の稻束芝馬太郎氏所藏である。

哥子宛　元祿三年

以二手紙一申入候。其後者久〻不ニ申通一候所、却而御状被レ下御尋被レ成迷惑ニ候。爾御無爲目出度御事ニ候。此方御同前ニ居申候。然者發句

夕アにも朝にもつかず瓜の花

花と實と一度に瓜のさかり哉

右兩句申入候。猶追〻可ニ申入一候。以上

廿三　はせを

哥子丈

註、宛名は『芭蕉翁眞蹟拾遺』では「落」とも見えその字に「本ノマヽ」と註してある。「落」よりは「番」に近いくずしなので番子宛とする。

斿水宛　　元祿三年

日の道や葵かたふく五月雨

此句はキ樣へ申入まゐらせ候以上

別紙申入まゐらせ候。先書ニハはつたりと失念申候。兼〻やく束之ほ句、短册二枚相調候而此たび進申候。御存知之悪筆故近比〻見くるしく候へ共、相認進申候。もはや重而は御無用可レ給候。何方ニもことはり申入候而不通ニ書不レ申候。キ樣押返し〳〵御頼候故無二是非一認申候。末代へはおさらしと存候。ケ來へ一枚御遣し可レ被レ下候。猶くわしきハ頓而上京候て可二申述一候。以上

廿一日　　はせを

斿水丈

註、句は『猿蓑』にあるので板行前の文通であらう。土居剛吉郎氏が大阪で蒐集された一通である。

山口宛　　元祿三年

此中は愚庵へ御尋被レ下候處、折ふし近在へ罷出候而不レ得二御意一偖〻殘念不レ少候。貴樣彌御無事御入候由よろこびまゐらせ候。此方不レ替くらし申候。さてハ御申置之一通速ク拜見申候。御神妙之至

ニ存候。とかく風雅ハ唯すかたをよく作り、尤意味深甚成事第一と御心得あるべく候。先ハ此句之たくひ成べし。

日の道や葵かたふく五月雨

急便故麁書にて相認申候。又〻此邊御下之刻御立寄まち入候。以上

五月十一日　はせを

山口丈

註、越中の荒木文平氏から金澤の殿田良作氏が入手された一通である。

北枝宛　元祿三年

前後文通略

附合十七體別帋に記進候。初心にハ見せ申されまじく候。術のかなはぬ内に此味をつけんといたし、却而一句もとゝのハず附意もしれぬ事に成ものに候。又むづかしきもの也、かゝる味はとてもかなふまじと退く人もあるものにて、術叶ひ候後ニ扱ひ候得ば、一巻のはこび甚むづかしきところにて、人のつけなづみだるを或は響或は情などにて起して付て、變化おもしろく成申候。さもなき人ハうちこし三句を恐れて、つまる處はいつも〳〵逃句のみいたし候ハ初心に見へ、功者おこして二三句も附たる上にむりに付るも、炎天に砂道をたどるごとくなるものニ候。能〳〵御考御扱被レ成候ハヾ鬼に鐵棒にて可レ有候。門人のうちにも五七人ならでさたいたし不レ申候。名

高くても附合の術さほどになき人、却而迷ひ可レ申と存候故ニ候。かくし申にてハ無ニ御座一候。十七體を得たる上が千變万化の術を得る事ニ候。只つくとつかぬといふこと斗知て、附合は千變万化と口にていふ人御ざ候。おかしく候。十七體の法も知らずして何とて千變万化の働が出來可レ申や。百韻千句に及びても附心一二體を出不レ申候。しりたるものハ笑ひ候。小器ハはやくみつゑ體多く、のちにハ人ゝあけて通し相人にならず、只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢になり、陰にてハ俳諧氣違ひなどゝ名をつけられ候もあさましく候。御連中よろず御しめし可レ被レ成候。 前後略

六月廿七日

結ぶよりまづ歯にひゞく淸水哉　　はせを

北枝様

註、文中の「附合十七躰」が支考の七名八躰及び員外の原據か否かは問題で、闌更は『蕉翁消息集』に本文の前後を省略したので確的に知られない。

牧童宛　　元祿三年

其元にて書候物は御燒不レ被レ成候よし、米櫃はやけ可申と存候。此度一二枚書進し候。

隱士秋之坊閑居御吊珍數得二芳意一大慶仕候。先以御細翰忝御無異之旨珍重不レ過レ之候。去年、頃

日はさかりと其元罷有候。一とせの變化夢のごとくにて一入御なつかしく被レ存候。大火之跡いまだ萬〻御心も靜なるまじく候。されども頃日は乙州參候て又〱會なども少〻御座候由、愈御はげみ可レ被レ成候。世間ともにふるび候により少〻愚案工夫有レ之候而心を盡し申候。其段略乙州も心得申候間御はなし可レ被レ成候。拙者義山庵秋至り候てハ雲霧痛候而病氣ニさはり候故、追付出庵いたし名月過ニハいづ方へなりとも風にまかせ可レ申と存候。乍レ去去年遠路につかれ候間下血など度〻はしり迷惑致候而、遠境羇旅不レ叶候間、東之方ちかくへそろ〱とたどり可レ申かとも存候。無常孔速の暇も御座候ハゞ又〻重而得二御意一候事も可レ有二御坐一候。隨分御無事ニ御勤可レ被レ成候。諸善諸惡皆生涯の事のみ何事も〱御樂可レ被レ成候。少氣むつかしく候間早〻及二貴報一候。

急〱書候而

例之通見ぐるしく候。以上

七月十七日　　はせを

牧童樣

キ樣

註、金澤市の大友佐一氏所藏の眞蹟である。『一葉集』では字躰の判讀されない「無常孔速の暇」が「妙」とも見える不審はこれで晴れる。

智月宛　　元祿三年

そのほかあつく御ざ候。そこもと何事もなく候や、われらぢのいたみもやはらぎ候まゝ、御きづかいなされまじく候。そこもとのあんあまりあつく候まゝ、八朔比まてハこの方ニい申べく候。此手がみ珍夕へ御つかはし可ㇾ被ㇾ下候。しやうしゆ坊様へも能〻御申可ㇾ被ㇾ下候。以上

七月廿三日　　はせを

ち月さま

註、幻住庵から大津の智月尼の許への文通である。讃岐觀音寺町森安莽石氏から鑑定を頼まれたが疑ひもなき眞蹟である。

木因宛　　元祿三年

御手紙忝致ニ拜見ㇾ候。昨日終日御草臥可ㇾ被ㇾ成候。されども玉句殊外出來候而於ニ拙者ㇾ大慶存候。就ㇾ其其香箸の五文字いかにも御尤被ㇾ存候間、かれ枝と御直し可ㇾ被ㇾ成候。愚句も烏の句皆しそこなひ殘念ニ存候。寐に行蝙の烏つるらむ、といふ句ニ而可ㇾ有ニ御座ㇾを急なる席故、矢ごろをはやくはなち面目もなき仕合にて御座候。且又今日之義天氣此分ニ御座候ハヾ御同道申度候。天氣能過候へバ亭主も宿に居ぬ事可ㇾ有ニ御座ㇾ候。幸ニ御座候間大かたの天氣ニ御座候ハヾ御同道可ㇾ申候。天氣あしく御座候ハヾ私宅にて語可ㇾ申候間、晝前より御入來奉ㇾ待候。されども拙者夜前ハ大ニ持病指發り昨夜之氣のつかれ夜中ふせり不ㇾ申候間、晝前迄氣を安メ可ㇾ申候

間、かならず晝前ゟ御出可レ被レ成候。いづれの道にも御逗留もすくなく候へバ、しばしづゝ成共得二御意一度候。以上

七月廿五日　　はせを

木因様

註、本文は支考の『國の花』の第十二卷、木因選『かたはし』に載つてゐる。

去來宛　元祿三年

△發端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、難至極。陳而曰、蝸牛蓑虫の栖を離と云て行衞なき方、流勢無住終に一庵を得る心なれバ、前段行脚共に皆居所にかゝり候。長明方丈の記を讀に方丈の事いはむとして、新都の躁動、火事、地震の亂、皆是栖の上をいはむとなり。愚作聊のがるゝ處有といへども、幻住庵にかゝる所はきく／＼となくて御一覽の所尤と同ズ。則前後の文章まぜ合如レ此ニつゞり候。猶御遠慮なく御評判可レ被レ成候。され共少〻草臥付申候間、前後の文先是迄にとゞめられ、所〻ハ御加筆くるしからず候間、能〻御覽被レ成候而、他のそしりをまぬかれ候様ニ可レ被レ成候。

△空山屛顏心相違いかゞ可レ有二御座一候や。但シ胸中の空山たるべく候間、くるしかるまじくや。このかみの御ぬしへ御尋可レ被レ下候。誹文御存知なきと被レ仰候へ共、實文にたがひ候半ハ無念之事に候間、御むづかしながら御加筆被レ下候へと御申可レ被レ下候。

△除老王翁が事ハ山谷の口の方ニ有レ之かと覺申候。一連の詩に二人の名をとる事無念ニ候。王翁が替り入替度候へ共、手前一册之書なし。尤無才にしてさがすべき便り無二御座一候間、是等の方御力ヲ可レ被レ加候。
△我が聞しらぬ咄に日をくらす、朱文公の濃談日西と云句の心にて書申候へ共、直に濃談の二字を書改候。いかゝニや。
△頓て立出てさりぬ。難至極、仍、筆の一字を書そへ候。
△國分山に取付處いま少よろしく風流あるべく候。此處御工夫可レ忝候。此度之文章少落付たる樣ニ愚意にも被レ存候。加生へも御見せ可レ被レ下候。何とハなしニ此度惣體不出來の由被レ申候由氣の毒ニ存候。此人申狀も難レ捨候間又ゝよみきけ可レ被レ下候。曲水位署書一旦加生の指圖ニもまかせ候へ共、又ゝキ樣ニも被二仰下一此段古人の格ニ候間、不用にハあらず候へ共、文のつよみ無二御座一故又ゝ事くどく書申候。其段御傳可レ忝候。

はせを

去來雅丈

註、幻住庵の記に就き推敲に努めた苦心の窺はれる去來への文通である。近江坂本村の中邑翠濤氏所藏である。我賤の『十戴鳩』（安永七年刊）にその寫が出てゐる。

元祿三年

凡兆宛

一檜レ鳥之文御見せ感吟いたし候。乍レ去文章くたくしき所御座候而、しまりかね候樣ニ相見候

間先〻他見被レ成ましく候。そのほかよろしき趣向ニ而御座候間拙者ニ可レ被レ掛ニ御意一候。御文章ニ増補いたし拙者文ニ可レ致候。もし又是非と思召候ハヽ拙者文御覽被レ成候而其上ニて又御改可レ被レ成候。文の落付所何を底意に書たると申事無ニ御さ一候而はおどり、くどき、早物語のたぐひに御さ候。古人の文章に御心可レ被レ付候。此文ニ而ハ烏の傳記に成申候間、御工夫御尤に存候。以上

九月十三日　はせを

加生様

註、既白の『蕉門むかし語』(明和二年刊)に烏を憎む文章と共に掲げてある。加生は凡兆の前號である。

無宛名　元祿三年

御手帋被レ下拜見。愈無ニ御替一珍重存候。我等此四五日風氣罷在候。引籠居申候。宇治ゟ状御屆被レ下慥受取申候。上林之菊も殊之外出來候樣ニ承候。參候而見申度存候へ共、さて〳〵何やかやと隙なく延引申候。

山中やきくは手折し湯のにほひ

是も此節之事にて有レ之候哉。貴樣御口すひ候哉。彼發句も近〻ニ淸書致候て可レ懸ニ御目一候。此元いつもながら徒然ニ暮申事ニ候。頓而御出會可ニ申承一候。かしく

九月五日　桃青

註、文中の「山中や」の句から見て細道行脚の翌年の文通であらう。名古屋市の嘯月庵加藤磯三郎氏所藏である。

與次兵衞宛　元祿三年

正秀、珍碩、探志へ御案内たのみ存候。
昨夜堅田より致二歸帆一候。愈御無恙ニ御連中相替事無二御座一候哉。拙者散〻風引候而蜑の苫屋
今暮より御出候樣ニ奉レ待候。御内方樣
御子達風にても御引不レ被レ成候哉
に旅寢を佗て風流さま〴〵の事共ニ御座候。
病雁の夜寒に落て旅寢哉
と申候。京短尺屋へ御狀被レ遣可レ被レ下候。明日上京致候間、拙者見合能候はゝもとめ候而人〻わけ可レ申候。千那、尙白方にも大分入り申候。以上

九月廿六日　　木曾塚ゟ　芭蕉

茶や與次兵衞樣
人〻御中

註、宛名の與次兵衞は膳所の昌房の通稱である。木曾塚は近江の義仲寺にある。そこの無名庵を寓居した頃の文通で東京の菊本直次郞氏所藏である。

怒誰宛　　元祿三年

愈御無事に被レ爲レ成二御座一候由珍重奉レ存候。拙者堅田より一昨日歸帆仕候。少用の事御座候而上京仕候間、近日罷出候而得二貴意一候。先日江戸への狀後に改而進上仕候。定而とりぐに成候半と存候。餘は□□如レ斯御座候。頓首

季秋末

鴈聞に京の秋におもむかむ　　芭蕉

怒誰雅伯

註、大阪の上杉氏所藏のよしで、西村燕々氏が謄寫（二字不明）して編者に報ぜられたものである。

了水宛　　元祿三年

別紙申入候。日外の御物語被レ成候書物ハ、未流方ニ有レ之候哉。今一たび御尋可レ被レ下候。此方ニハさのみ入用にも無レ之候へども、ぜゞの家中衆ゟたのまれ候まゝ又々申入候。直段もずいぶん安させ御下し可レ被レ下頼入候。大かた十ながらもとめ可レ被レ下と存候。去ながら先日の直段ニてはいかゞあるべく候哉。愚老も六かしく候とも、分口をたゝき申候故、今更引にくゝ御座候。

白毛ぬくまくらの下やきりぐす

まことにぐ此の心成べし。いらざる口をきゝ申候而、六かしきめにあふ事哉。ともかくによろ

しきやうにたのみ入候。諸事は重而々。かしく

廿日　　はせを

了水丈

註、元祿三年の『江鮭子』にある「白髮ぬく」の句から書翰も同年のものと推察される。名古屋市近藤三川氏の所藏である。

三入宛　　元祿三年

追而御來之刻は御みやけには御茶を少たのみ入申候。以上

たより候まゝ一筆申入候。其後はひさしく不申通候。いかゝ御暮候哉うけ給たく候。此許替事無之候。可易御心候。さては先日は尾州ゟ初而、此方へ尋られ候仁御座候。越人ゟも添狀遣し候。成程れき／＼と相見へ供廻りも二三人も召連候。庵へすぐに被参候。何にても相拶をと望まれ、指あたりてほ句出かね申候ニ付此狂哥いたし候。

たつね來てわれを近江のかふらとは

こゝろを蕪につゝむ土産

ケ樣に申聞候へは殊之外おもしろがり被申而、ほ句ゟはかくはしきなどゝの相拶込入申候。キ丈へ爲御知ながら申入候。一兩日中ニくるしからず候はゞ庵ニ御來待ゟ〻。諸事ハキ面ニ申殘し候。以上

廿二日　　はせを

上林三入老

註、東京井上辰九郎博士の所藏である。宛名の三人は近江の人、發見の句入の文通に見える。

雲竹宛　元祿三年

返〲申入候。ぜひかま風呂へ御出可ㇾ然やうニ存候。以上

此中は愚菴へ御立寄被ㇾ下候處、折ふしあは津邊參居候て不ㇾ得二御意一殘念不ㇾ少存候。貴老御痛も彌御快方ニ而此節御歩行之由、珍重此事ニ存候。さて八時雨の發句書付進申候。田舍へ被ㇾ遣候てよきやうに御認被ㇾ成御遣可ㇾ被ㇾ下候。

初しくれ猿も小蓑はしき氣也

右之句にて御さ候。唯今客來候而亂相成紙面御免可ㇾ被ㇾ下候。尙近〻可ㇾ申二承一候。以上

廿八日　はせを

雲竹樣

註、伊賀の山越の句で「小蓑を」とある可き「を」を落字してゐる。東京菊本直次郎氏の所藏である。

忘水宛　元祿三年

廿一日之御手紙唯今善右衛門にてうけ取候。按し申候間違故と存候。彌御無事目出度候。立ながら御返事申入候。御尋之句は定而此句之事に候哉。

初しノれ猿もこみのをほし氣也

右にてあるべくと存候。またノ\委く重而御めにかゝり候時分ニ可二申承一候。以上

廿二　はせを

忘水丈

註、名古屋で賓立に出た一通で原魏美氏から報ぜられたが、年次は「初しぐれ」の句から推測される。

無宛名　元祿三年

尾之露川方より宮重もらひ申候。今夕御出候而御料理なされべく候。此旨丈草へも御つたへ可レ被レ下候。

六日　はせを

三十里尾張大根のはなしかな

又

落葉してぬかみそ桶もなかりけり

味噌は御持參可レ被レ成候。以上

註、木曾塚の寓居近くに住む人への文通であらう。本文は「一葉集」に載つてゐる。

羽紅尼宛　元祿三年

はせを

おとめ殿

上る

尙〻ていとの無事ニ御そだてなさるべく候。よしにもなるか申上候。

此ほとは加生老、去來御みまひ御たいきなからゆる〳〵と名殘をおしみ、よろこびかきりなくそんしらし。ふゆのうちは山ふかき方へかくれまいらせ候。春になり候てまた〳〵御めにかゝり申へく候。なか〳〵の御なさけともわすれかたきのみ申つくしかたく候。きるものともよろしく御こしらへさむくも御さあるましく候。御きつかい被レ成ましく候。御ふしに春を御まちなさるへく候。

よひ〳〵はかまたきるらんね所の
　みつの枕もこひしかりけり

註、宛名の「おとめ」は加生の妻羽紅尼である。木曾塚から伊賀へ赴く時の文通であらう。闌更の『有の儘』に出てゐる。

□水宛　元祿三年

追て申入候。いつそや御やく束のほ句さて〻忘れ申候。漸〻此度思ひ出して追書に申入候。

　少將の尼はかなしや志賀の雪

あまりおもしろくも無レ之句と存候へども御待につき申入候。猶あとよりよろしきも出候はゝ可ニ申入ニ候。以上

廿三日　　　　　　　はせを

□水丈

註、金澤の株井未翁氏から所見を報ぜられたので「宛名一字讀めず」とあるまゝを掲ぐ。

宗周宛　　　　元祿三年

此中は愚庵へ御尋被レ下候處、坂本へ參居候而不レ得二御意一殘念不レ少存候。然は御申置之御書中委細ニ拜見候。御念入之事ニ存候。ほつくの事御申置則書入進申候。

住つかぬ旅の心や置火燵

餘面白くも無二御座一候得共唯風情の句にて御ざ候。猶諸事期二貴面一候。以上

十一月三日　　　　　はせを

宗周丈

註、句は『猿蓑』にあるので木曾塚からの文通であらう。名古屋で原逸美氏から示された寫眞に據る。

宗右衛門宛　　　　元祿三年

返ゝお　とのへもよろしく御心得頼入候

自レ是可二申入一候處御報ニ成候而迷惑ニ存候。さてハ娘御ニも彌、庄二郎殿へ一兩日中ニ婚禮相調候由重ゝ目出度御事ニ存候。まことに〱生ぬ先かなしみ、はやよめ入候段光陰矢のごとし。此方

老くれたるハ尤ニ候。何そよろしき句かなと存候へ共、當分出かね申候。

半日は神もともにや年わすれ

取あへず申入候。猶近日上京候而万〻御祝詞旁可二申述一候。以上

十二五日　はせを

松田や

宗右衛門様

註、本文は千手那の住持した近江堅田の本福寺へ特志家から寄進したものゝよしで現住三上明澄師から示されたが、句は『物の親』に中七「神を友にや」と見える。

無宛名　元祿四年

尙〱風雅段々便ニ承度候

乙州上津之節御細翰忝存候。其元大雪之由一尺計ハ此方申請度候。愈御無事ニ御勤被レ成候哉。拙者持病〱とのみ顔しかめたる計ニ御座候。其元歳旦等いかなる風流にて御座候哉。此方年〻事故當春は致二非番一候。たれせつくものも無二御座一是まで年〱の骨折さへくやしき事に覺候。キ様集之事不埓成様ニおもひ候半と氣の毒ニ存候。心緒句空僧まで申達し候間御内談可レ被レ成候。何とぞ暮春之初御上京候へと被レ存候。頃日寒氣故持病散〱神以氣分重く御座候而早〻如レ此御座候。牧童へ可レ然御意得被レ成可レ被レ下候。以上

正月三日　　　　芭蕉

註、越中井波の淨蓮社什物として宇野次四郎氏が保管してゐる。但し『蕉翁消息集』所載の本文の追而書「其元にて書申候」以下は牧童宛の文通の尚々書に書込んだものを、誤って本文通に附記したものである。

野水宛　　元祿四年

返〳〵いつれも様へよろしく御心得可レ被レ下候。以上

昨日は為二御慶一御出忝候。尤せゞへ御禮之序とハ乍レ申心切之至ニ存候。其許へハ暮過ニ御歸と存候。我等も今月中ニハ參候而万〻可二申承一候。上柳へ便候まゝ昨日之句作ながら申入候。

大津繪の筆の初や何佛

右之句致候。序ニ申入候。くわしきハあとゟ重而可二申述一候。以上

正月四日　　　　桃青

野水丈

註、大阪で土居剛吉郎氏の蒐集された一通である。

曲翠宛　　元祿四年

いね〳〵と人にいはれても猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

また埋火の消やらず臘月末京都を退出、乙州か新宅に春を待て

人に家をかハせて我はとし忘れ

三日口を閉て題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛

金平か分別のとくことしハ休に致候而、歳旦おもひよらず候へば如レ此御座候。

正月五日　　はせを

曲水様

註、路通の『勧進牒』（元祿四年刊）に江戸勤番の曲水亭にて「膳所の文をもてきたり」として本文を掲げてある。

無宛名　　元祿四年

是等類字之切レ格の有り候。兎角俳諧ハ萬事作り過たるは道に叶ハず、其形之まゝ又ハ我心之こゝを作りたるを能キと存候。かく御含有て可レ然候。取極メたる事も無レ之候ハヽ、是等いかゞ

大津繪の筆のはじめは何佛

右は疑てかゝる意なり。書外又ちかき内可レ參候早々。以上

十二日　　はせを

註、大畨の『翁追善塚の跡集』（明治九年刊）に眞蹟を模してある。起筆もなく宛名もなく斷簡である。

吟水宛　　元祿四年

一昨日は爲二御見舞一御出被レ下候所、臘所迄用事に參候而不レ得二貴意一殘念不レ少存候。彌御無事にて御越年の由珍重存候。此方も春へ移り申候。扨は發句の事被二仰置一候。さのみ宜しくも無レ之句に候へ共仰に任せ申入候。

一とせに一度つまるゝ薺かな

如レ此御座候。猶春になり候はゞ詳しく可レ承候。以上

正十一日　　はせを

吟水丈

返す〳〵御隙に候はゞ又々入來待入候。以上

註、積翠の『芭蕉句選年考』に「植村家臣和州住家藏」として本文を掲げ、『芭蕉翁發句集』の年次に就いて疑ってゐる。

忘水宛　　元祿四年

先比は愚庵へ御尋候處折ふしあはつへ參候て不レ得二御意一殘念に存候。さて我ら雪見の發句御尋被レ成候。さのみなる發句とても無レ之候へ共、具々御申置候故無二是非一書付進申候。此間加州の門弟上京候て菴に尋被レ申候に付、御報及二延引一候。さて〳〵何かといそがしき事とも御察可レ被

レ下候。何樣近〻の內上京方々可二申承一候條、早々及二御報一候。

いさゝらは雪見にころふ所まで　如レ斯候。

二月十一日　はせを

忘水丈

註、本文は伊勢桑名の鈴木氏の所藏である。舊作を望まれて書送つたのであらう。

嵐蘭宛　元祿四年

幸便啓上いかゞ被レ成候哉と御懷敷而已ニ候。御老母樣御內御子達御息災ニ御入被レ成候哉承度奉レ存候。拙者舊冬甚寒殊之外痛候へ共、頃日は又々常之通ニ居申候間、定而當年中ニは懸二御目一に而可レ有二御座一候。何とぞ〳〵御堅固成樣ニ被レ成今一度再會御待可レ被レ下候。拙者も隨分保養致候而懸二御目一度存候。加右衞門殿無レ恙御勤被レ成候哉。北鯤子御兄弟無事に候哉承度存候。定世事御くるしみ可レ被レ成と是又心をいたましめ候。御心得被レ成可レ被レ下候。

一、膳所御親類中へも被二仰遣一候由。御知人ニ御成可レ被レ成よし被レ入レ念候へ共、去秋の比ゟ膳所へもしか〳〵不レ參、大津京邊ニ遊び居申候故、いまだ不レ得二御意一、尤爲レ指用事も無二御座一候故其通ニ致候。若御袋樣なとへの嘲ニも成可レ申候はゞ、重而御めにかゝり下り可レ申候。以上

二月十三日　芭蕉

嵐蘭雅丈

註、桃綴の『芭蕉翁眞跡集』に「東都大平氏奴雁」の所藏として眞蹟を模寫してある。

正秀宛　元祿四年

御芳翰辱染〻拜見致候。御老母様、御内、御むすめ子御無事のよし、めで度奉レ存候。拙者持病暖氣にしたがひ少ツヽ快氣候間可レ安二御心一候。

一、乙州江戸立候ニ付跡之事御情に可レ被レ入旨乙州方よりも申こし、鐵のたてをつきならへ候。拙者も安堵よろこび難レ盡候。

一、哥仙さて〳〵感吟申候。かほどまで獨はたらき大切の風雅驚入申候。則付墨致候。乍レ去爰元も人〻とり付候而此返事の内も同名か茅屋ほこりの中へ大勢入込候而、御報も批判もしみ〳〵ならず候。疎なる所〻御免被レ成可レ被レ下候。

一、同名方へ御手に被レ懸候清茶一袋、さかな一種被レ遣毎〻忝御厚志難レ盡候。茶拙者賞翫致候。

一、粟津草庵之事、先は御深切の至忝奉レ存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如レ此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候様に御取持奉レ頼候。必もこれにつながれ心をうつし過ざるやうの事ならば、いかやう共御指圖可レ忝候。しはらく足のとヽまる所は、蜘蛛のあみの風の間と存候へは足駄藏も藏ならず候。さすかの御人〻申もくとく候へは打まかせ候。

一、風雅此比盛に思召候よし尤さこそと被レ存候。凡俗の人さへもてあそび候ものを随分御情御出し可レ被レ成候。及肩老右之段御傳可レ被レ下候。一傳仕度候。何角取重候間先〻早筆申殘し候。

以上

二月十九日　　芭蕉

正秀雅丈

昌房、探子兩士へ御心得可レ被レ下候。去歳中御心ニ被レ懸御懇情の段々は世上かましく候へば不二申盡一候。心底には難レ忘候。

註、伊賀の上野から膳所の正秀への文通である。本文は『芙蓉文集』に掲げてある。

猿雖宛　　元祿四年

昨日は辱、頃日の晝寢、其代ニ夜前七ツまて寢られ不レ申候。伊勢ゟ客僧一人外ニ一人參候而先夜三崎新右ニ泊り候。今日わりなく愚庵に而興行致候。晝前ゟ御出座被レ成可レ被レ下候。夜前新藏參合是も出合候而申候。然らハ市兵へもよひ候へと半左衛門申候。土芳ハ新藏方ゟたつねさせ申候。連中無二心元一會ニて候へ共、是等皆〳〵はづしかたく候間無二是非一候。貴様必御出可レ被レ下候。手前連衆かけて八吟計ニ而御座候。以上

廿七日　　はせを

意專様

註、菊本直次郎氏の保存される伊賀上野の蓑虫庵什物に常備してある。意專は猿雖の法號である。

無宛名　元祿四年

乙州下候間一翰致二啓達一候。愈御無事ニ御勤仕り候哉。久〻絶レ便候而御物遠罷過候。拙者持病かちニ而暮候へ共露命は猶難面候間可レ易二御心一候。俳諧いかゞ被レ成候哉。定而去來折〻御尋候半と存候。少〻哥仙ニ而も御見せ可レ被レ成候。

註、本文は『芭蕉翁眞跡集』に「東都濤口氏秦丸」の所持として出てゐる。「乙州下候間」が年次の推定を助ける。

句空宛　元祿四年

一撰集御大望之由近國の發句取あつめ進候。殘生長途のつかれにや冬中一日として心よからず。しかし暖氣になり候へば柳陰庵のかり寐に、北枝、秋の坊、風流のあらそひなとおもひ出し、しきりに御ゆかしく一山の花も最はやひらき候はんとさつし候。

うら山し浮世の北のやま櫻　はせを
雪消殘る細根大根　句空
人足の天窓かそゆる春風に　去來
末略

註、闌更の『花の故事』に掲げてある。本文の「撰集御大望之由」は句空の書『北の山』の事であらう。

猿雖宛　元祿四年

愈御無事ニ御入御一家何事なく候や。御痛無二心元一存候。拙者も持病〳〵と申ながら年光既彌生の末ニ成行候。花もいたつらに散果、公邊之花、名利の客のみさはぎのゝしりて心得ず候故、しか〳〵花にも出不レ申候。葎の内、畠のうねのひとへ櫻にはりものゝ細引結たる萱が軒端のたふれかゝりたるに、かりきの酢味噌、つゝしのひたしもの先おもひ出られ、京屋か句ニ案じ入たる重き顏つき、土芳がかろ口なつかしきものゝ初にて候。次良兵へ殿頃日俳諧めされ候よし珍重〳〵さめぬ内無二心元一存候。發句も候ハヽ、御書付御こし可レ被レ成候。

三月廿三日　はせを

意專樣

註、伊勢四日市の故鈴木芦竹氏の蒐集された一通である。文中の「京屋」は土芳と同じく伊賀上野の一鷺と呼ばれる人である。文通の年次は元祿五年說も行はれてゐる。

無宛名　元祿四年

一石淸水瀧本坊法印の許へ、ある在家よりなた大豆壹籠おくりければ、其返事に

辨慶が七道具のなた豆は
　日本一のかうのものかな

さて／＼おもしろき狂哥、中〻及かたき事に思ひ侍る。しかし我も一句をせんとて、狂哥の心をもちて

辨慶は夏もかみこの羽織かな

これ情一ぱいにて候。むかしの人の口心には叶ひがたく候。かしこ

はせを

註、本文は『蕉翁消息集』に「辻村梅仙所持」とあるが、句はこの文通を初出とする逸句である。

猿雖宛　　元祿四年

其元拙者立候時分宗七殿度〻御見舞處〻御一覽御歸宿被ㇾ成候哉。もはや頃日ハと推察申候。かみ様方も念頃忝存候。道中之風流貳之佗趣／＼御物語承度候。宗五も折節上京留主ニ而手筈ちがひ候半と存候。先／＼大義御願珍重／＼御手柄ニ御座候。拙者相替候事無ㇾ御座ㇾ候。頃日ハ嵯峨去來下やしきニ居申候。養閑、竹の子を給申候。大井川の舟あそび俗客ニハあゆを振舞、嵐山朝暮の詠ニ而御座候。富士いかゞ／＼以上

五月十日　　桃青

意專様

註、文中の「去來下やしき」は嵯峨の落柿舎である。本文は猪來の『芙蓉庵小集』に「今井上氏に藏ス」と出てゐる。

松風宛　　　元祿四年

先月十一日之御狀廿日過に相達拜見いたし候。其許御替りも無レ之由めて度存候。愚老もぶじに不レ替くらし申候。ひさ〳〵無音心外に存候。幷幾年無音にても遥〻心にかはる事はいさゝか無レ之候。貴樣俳諧あがり申候由影にて承申候。此方めつらしき句も出不レ申候。此中去方にて

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

取あへす相拶迄に申捨候。いかゝに候哉。又〻重便之勢よろしきも出候はゝ可ニ申入一候。此中御狀之御報如レ此候。以上

廿五日　　　はせを

松風丈

註、京都の俳諧展覽會へ出品の故藤井זם屋氏の所藏である。『嵯峨日記』直後の文通であらう。

曲翠宛　　　元祿四年

昨日近在へ參めしによはれ參候。さて〳〵とろゝ汁よく出來申候。取あへず一句

飯あふく嗕か馳走や夕すゝみ

てい主大きニよろこび申さるゝ事ニ候。あほたらしき句ニ候。人中へハ出しかたく候。キ樣に〳〵　以上

六日　はせを

曲水丈

註、曲水が江戸勤番から膳所藩に歸つた頃の文通であらう。金澤の吳座太一氏の所藏である。『袖珍鈔』所載のものは脫字がある。

茂作宛　元祿四年

只今田舍ゟ僧達二三人參候。俄ニ出し可レ申貯無レ之候。さぶく候故にうめんいたし可レ申候。そうめんは澤山有レ之候。酒二升御こし頼入候。さかな八つぶ納豆茶碗ニ入、貴樣御出候而世話頼入申候。其次手ニ引合せ可レ申候。はやく〱御出まち入候。以上

二日　はせを

かふじや茂作様

註、本文は『一葉集』にあるが、宛名の茂作は「孫作」の誤寫であるまいかと思ふ。

孫作宛　元祿四年

口

唯今ちよと御出可レ給候。京ゟ客來二三輩有レ之ちよと申喰出し申たく候。麥めしニひや汁こしらへ置候。

一、さけ　二升
一、肴、何そ見合、御とゝのへ御出可レ給候。愚一人にてハ出來不レ申候。仍而如レ此候。

八日　　はせを

かうしや孫作との

註、東京麹町の加賀豐三郎氏の所藏である。孫作は前の茂作と同人であらう。

喜八宛　元祿四年

覺

一、もち米　一升
一、黒豆　一升
一、あられ 見合

右今夕會之夜食に成申候間御いらせ、傳吉ニもたせ御こし可レ被レ下候。茶は一森、三井寺より澤山もらひ申候。貴様ニも早ゝ御出まち入候。

十八日　　はせを

喜八様

註、重厚の『もとの水』にあるが、前二通と同じ頃のものであらう。

ケ來宛　　元祿四年

返〳〵御母公へ能々御心得可レ被レ下候。以上

春庵今日俄に御歸ニ付ちよと申入候。キ樣彌御無事ニ候哉。其後ハ便も無レ之いかゞニ存候。此許ニも無ニ別條一罷申候。さてハ近々祭と　候まゝ御出被レ成まじく哉。何かとねりもの作りもの拵有レ之よしニ承申候。必ゝ待らし。すぐに二三日庵に逗留候而、十三夜之湖之月一句可レ被レ成候。此中寢られぬまゝに一句

晝過て宵闇ぐらし虫の聲

いかゞあるべく候哉。秋風へ御逢候はゞ被ニ御心得一可レ被レ下候。取込早ゝ。以上

廿九日　　はせを

ケ來丈

註、名古屋市武平町近藤三川氏の所藏である。晝過ての句は史邦の『芭蕉庵小文庫』に「盆すぎて」と見える。

句空宛　　元祿四年

御手翰拜見、夜前ハ得ニ閑談一珍重不レ少候。明日御立可レ被レ成之旨、後刻貴面御相談可レ仕候。追付御入來是ニて御ねころび可レ被レ成候。像讃之義發句珍しからず難義仕候。ケ樣之事ニ而もかき付可レ申や

秋の色ぬかみそつほもなかりけり（庵の秋か）
しつかさやゑかゝる壁のきりくす

御用捨なく可レ被二仰下一候。同じくは御免、外に白紙に思ふ事書進上申度候。以上

即時　芭蕉末

句空社兄　上る

註、関吏の『蕉翁消息集』に「越中ニアリ」とある。句は句空の『柞原』及び『草庵集』に出てゐる。

右門宛　元祿四年

世事何に求んなどゝは三業の相應せざる事也。洛東の草庵飄貫のはしくも脱るゝばかりにて、雨漏きたらんころはじめ頃ならん。文月もいとゞ明らかなるにて

また捨ぬこゝろいかにか窓の月

頃日は御狀相屆申忝候。先々御無事之旨珍重不レ過レ之候。近日名月に候へば少ゝ御出待入候。湖上にてたるべく候へども又ゝ洛東も一入たるべく候。かならずくく御上京待存候。以上

八月六日　はせを

中村右門様

註、本文は雪袋の『句空庵隨筆』に載つてゐる。「また捨ぬ」の句はこれが初見である。

卯右衛門宛　元祿四年

洛東の草庵蕭條のはし〳〵も亂るゝばかりにて、雨洩きたらん事はじめ頃ならん。文月もいとゞ明らかなるにそ

　また捨ぬこゝろいかにか窓の月

頃日御報相届候。先々御無事珍重不レ過レ之候。殘暑つよく候へともちと〳〵近日名月ニ而候へば御上京まちかね候。湖上にてたるべく候へとも、又々洛東も一入たるべく候。我等心閑ニ中〳〵獨居万境すくなし、よろこび申候。

此狀庄右衛門へ御とゝけ可レ被レ下候。急用申遣候。必々近日御上京待入候。

八月六日　　風羅坊

大平馬場村
竹中卯右衛門様

註、雪袋の『句空庵隨筆』に載する別の一通で、右門宛の同日付のものと文意も殆ど同一であるが誤脫があるらしい。

正秀宛　元祿四年

夜前はどつかりと米貳斗、定家が力の程を見せんとて石を五ツに打わられ候。炭薪さま〴〵被レ懸二御意一不レ淺隨分打寄賞翫可レ致候。脇珍重、第三御廻し可レ被レ下候。

一、此柿少堅田より庭前もぎたて致來候間、御くめ殿へ進られ候べく候。

壬八月十日　　芭　蕉

正　秀　様

註、本文は耳得の『芙壽文集』に出てゐる。閏八月は元祿四年に相當するので文通の年次は明瞭である。

角　上　宛　　元祿四年

たよりにまかせ申入候。一昨日ハ御上京にて東山へ御立寄之所、折ふし鳴瀧へ參候て御目にかゝらず千レ今殘念不レ少存候。さては貴丈名月の御ほ句御申聞けて、御認置之御書中今拜見いたし候。さても近年之出來御ほ句にて御座候。此方にも隨分と精出し候へども不出來千万に御座候。併申遣候。

また明ぬこゝろにいかに窓の月

右の趣ニ御座候。貴丈御ほ句とは十段も落申候。猶近〻面上と申殘候。先ハ此中御出御報旁〻如レ此御座候。以上

廿二日　　はせを

角　上　丈

註、本文は岸並の『都の花めぐり』（文化五年刊）に掲げてある。宛名の角上は千那の養子で近江堅田の僧である。

凡兆宛　元祿四年

度ゝ預₂貴墨₁候へ共持病あまり氣むつかしく不ₗ能₂御報₁候。昨夜〻も出候名月散ゝ草臥、發句もしかぐ〱案じ不ₗ申候。湖へもえ出不ₗ申候。木曾塚にてふせりながら人ゝに對面いたし候。各發句有ₗ之候。

月見する坐に美しき顏もなし

なき同前の仕合ニて候。當河原凉の句其元にて出かゝり候を終に物にならず打捨候を又取出し候。御覽可ₗ被ₗ成候。

川風やうす柹着たる夕すゞみ

職人のでしこ感心仕候。落書もとの外御出かし被ₗ成候。少し氣むづかしく候故早ゝ申上候。

十八日　はせを

加生様

去來子より御左右無₂御座₁候。御病兒いかゞやと無₂心許₁被ₗ存候。

註、湖中、佛分共編の『俳諧一葉集』に收むる一通である。「川風や」の句から年次が推測される。

浮草丈　元祿四年

今日金右衞門どの上京候ニ付ちよと申入候。彌御無事御暮候哉うけ給度候。此方まめニくらし申

候。然バ名月之ほ句之義、兼て御約束申候。則三井寺にて

三井寺の門敲はやけふの月

右之句いたし候。今日は客来候而取込、麁書御免可レ被レ下候。

十八日　　はせを

浮草文

註、句は其角の『雜談集』には「大津義仲庵」の作とある。本文は金澤市殿田良作氏の所報である。

千那宛　　元祿四年

於二拙者一ハかほと如在ニ致候而一應

御當地永〻罷有候而、色〻預二御芳志一不レ淺難レ盡奉レ存候。美濃路へ立越候間、再會近歳と被レ存仆。

無レ斷内和哥三神別意かまへず候

平田妙昌寺へも一宿立寄可レ申候。

九月廿八日　　はせを

一尙白集御序文下書先日被レ遣候を考候處、集之序に難レ仕候故下書なる程あら方したゝめ候。

千那様

堅田衆御意得可レ被レ下候。

尙白へ御相談被レ成前後此格御用御つくろひ可レ被レ成候。貴面御相談と存候へ共、御隙無レ之候故殘念ニ存候。芭蕉門ニ入と云處、尙白心入も候はゞ御除可レ被レ成候。

註、宛名を文中に書込んでる文通は他に例を見ない。東京星野麥人氏の許で見た一通である。尙白の『忘れ梅』に就いての事らしい內容である。

意水宛　元祿四年

申進たき事は山〻に候得共、此間者風氣に候故ふせり罷在候。ほ句之事もそこ〳〵にして置候。近所の衆も寄集何角咄等も被レ致、夫にて風の神もなくさみ居申候。仍而

むかし聞秩父殿さへ角力取　はせを

是も風氣故、この風いたし候句御笑ひ草々以上。

十九

意水丈

註、句は『芭蕉庵小文庫』に見える。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「信州佐久郡宿岩阿部雪膺藏」と出てゐる。

曲翠宛　元祿四年

一林甫子兩吟さて〳〵甘心仕候。世上之俗諸皆〳〵ふるひ果候處に、かゝる新智めづらしく段〻とりわき評に不レ及一卷一體病盲愚案之情見たかふ事無ニ御座一候。態御はげみ被レ遊睹所を花の

湖水と可レ被レ成候。珍夕方まけしと情を出し候。
珍夕も親のごとく二つかへ申いづれも名殘をしみ、おとゝしの春深川を出る時に似申候。何事にも御なつかしく公一人御缺被レ成無興のみに御座候間、幻住庵の一冬とみづからもねがひ申候。人にもすゝめられ候。

百年の氣色を庭の落葉哉

霜月五日　　芭蕉

曲水様

註、江戸へ歸庵の途次近江の門人李由の住持する明照寺に立寄った時の句である。本文は『誹諧眞蹟集覽』に摹寫してある。『芭蕉翁眞蹟拾遺』には前半と句を掲げ、後半及び日付、宛名を逸してゐる。

祐子宛　　元祿四年

此中は御文被レ下なかめ入候。彌御無爲御入よしめで度候。此許にても不レ替くらし居候。併過し頃ゟ兩足いたみ遠方へは出不レ申候。唯近き在廻りはかりに暮居候。次第〳〵寒はつよく成候故、わらぶきの軒にて丸雪の音を聞て

雑水に琵琶きく軒のあられ哉

此一句申進候。其表之御連中へ其元ゟ御傳可レ給候。さて〳〵手もふるひ見ぐるしき書面御免。以上

霜月廿二日　　　　　　　　　　　　はせを

沾子丈

註、「雑水に」の句は『有磯海』に見える。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「參河新城鈍屋吉左衞門所什」と出てゐる。

流水宛　　　　元祿四年

先日は預₂御手紙₁候處折ふし坂本邊へ參り申候而御報延引罷成候。彌御別義も無ㇾ之由珍重存候。此許爲老無爲暮申候。然は西の市東の市と申事は大和山城之事之由書物にも見え申候。仍而俳諧の手爾葉にも申事に候。左樣御心得可ㇾ被ㇾ成候。扨は貴丈御發句御書置別而面白く御座候。愚老ワキと存候得共兩用ながら一句御返句致候。

水仙や白き障子のともうつり

如ㇾ此ニ候。いしくは手込存候體之句にて御座候。猶追〻可₂申承₁候。以上

十一日　　　　　　　　　はせを

流水丈

註、句は『笈日記』に熱田梅人亭の作として ある。本文は『芭蕉句選年考』に引用されてゐる。

曲翠宛　　　　元祿四年

都出て神も旅寢の日哉

行脚乞士之癖として常〻の御厚恩ハ胸に有ながら御暇乞もさたかならす短き手紙一ツニ而埒明候

何〳〵いまだ居所不レ定候

も、悟り中間の仕方のやうとうるさく覺申候へ共、且名残りの殘らんも一風流たるべきや。松茸御所柿ハ心のまゝに喰ちらし今ハ念の殘るものもなしと、暮秋廿八日より三十一日めに武江深川に至り候。盤子ニ被レ遣候御返翰は熱田ハ人〻取込候へば、封のまゝにて岡崎の驛まで持參候而、窓の破れより風吹入、戸の透間より月もりかゝれる、いをの油のなまくさきよごれ行燈の前ニ而、御文先開く泪紙面にそゝり候。珍碩文ニ三とせの厚情不レ淺と書たる、誠三とせ心をとゞめ候ハこれたれか情ぞや。何とぞ今來年江戸にあそび候ハヽ、又〳〵貴境と心構候間、偏ニ膳所は舊里のごとくニ被レ存申候。御堅固ニ御勤、竹助殿御煩無二御座一樣ニと奉存候。珍碩目保養無二油斷一樣御心そへらるへく候。いまた取紛候故、いつ方へも書狀遣し不レ申候。其角に逢申、先御噂申出し候。

霜月十三日　　はせを

曲水樣

註、岡崎の蕉門宇古から傳來の眞蹟で李蕎の『旅の日數』（寛政五年刊）に摹寫されてゐる。

槐市・式之宛　　元祿四年

御俳諧被レ遊候哉。御發句なと被レ遊候ハヽ便ニ可レ被レ遣候。春ハ其角集あみ申候間入集可レ仕候。

私八宿は橘町彦右衛門と申もの丶店ニ而、桃青と御書付可レ被レ成候。書音も閑クは六ケしく御座候故、所付をも外へハ不ニ申遣一候之間左様に御意得被レ成可レ被レ下候。御前可レ然奉レ頼存候。恐惶頓首。

霜月十八日　芭蕉桃青

中尾源左衛門様

濱　市右衛門様

註、宛名の兩人は伊賀上野藤堂新七郎家の家職で、中尾は槐市、濱は式之と號した。文中の「御前可レ然」とは舊主新七郎家を指したのである。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「加賀金澤柳荼珎藏也」と出てゐる。

芦雁宛　元祿四年

倘〱左之通御心得御こしまち入候。

御手紙被レ下候。さもなくとも此方ゟ可ニ申入一存候處、却而御報ニ成候而迷惑ニ候、彌御無事御入候よし何ゟめで度存候。愚老も無事居申候。此間は雪ふりさむく何方へも出不レ申候。庵室ニ斗うろ〱いたし居候而一句口すさひ申候。

日比にくき烏も雪のあした哉

右之句致候。少〻御隙ニなり候はゞ一夜とまりながら御出待入候。よとゝもにはなし可レ申候。同しくは友水なとも御同道候而待入候。さしむかいはあまり無興ニ候。爲レ指事なく候故早々。

以上

十二月九日　　　　はせを

芦雁子

坐下

註、句は『鵆獅子集』に見える。北田彦三郎氏の紫水文庫に藏する一通である。

無宛名　　元祿四年

さてハせいほノ句はかすくにて候へ共、二三句申遣候。

此忘れ流るゝ年の淀ならん

ふるさとや臍の緒に泣年のくれ

めでたき人の數にも入らぬ老のくれ

右之三句申進候。外ニも候へ共あまり數多故、目まぎろしく見分かたく候間如レ此ニ候。くわしきは春永ニ可二申入一候。以上

廿二日　　　　はせを

註、三句の中で「ふるさとや」及び「めでたき人の」は貞享の舊作で、「此忘れ」は『葛の松原』にあるが、『眞木柱』には素堂の句となつてゐる。本文は土居剛吉郎氏の藏藏である。

木因宛　元祿五年

御芳翰舟便慥に相達半紙一束被レ懸二御意一遠方の所忝奉レ存候。御發句共御書附被レ感申候。愈御無事の旨珍重此事に存候。愚庵無二別條一罷在候。三ツ物例年之通可レ被レ成候由珍重存候。相替事無二御座一候間早〻。以上

正月廿日

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　はせを

木因様

註、句は『薦獅子集』に見える。本文は寫本『芭蕉消息集』に出てゐる。

杉風宛　元祿五年

昨日は御見舞候而御痛之事共、直々に御物語承先安堵致候。

二月七日　はせを

杉風様

一此書狀加州金澤へ不レ叶用事申遣し候。何とぞ被レ入二御念一上包貴樣御名を御書被レ成候而、御

懇意之方へ御頼被レ遣返事參候に奉レ賴候。御家中の風俗屈狀不レ屆候よし兼而承候間、貴樣上包に被レ成候而成程慥に奉レ賴候。少〻急候間能樣に御仰遣可レ被レ下候。
發句も延引可レ致と存候へ共、與風所望に逢候而如レ此申候。

鶯 や 餅 に 糞 す る 緣 の 先

日比工夫之處に而御座候。

註、『芭蕉翁眞跡集』に「東都川村氏愼庵」の所持として自筆を摹してある。句は『葛の松原』に出てゐる。

一 笑 宛　　元 祿 五 年

然は御約束之水鷄笛送給忝珍重存候。此さとの人〻閙鬨ず女子とも〻集、我を藝者の樣に申おかしく候。行脚さき國ところにより一向音をしらぬ人御座候間、吹てきかせ可申と悅申候。鹿笛も木曾よりもらひ申候。ほと〻ぎす笛も御ざ候はゞほしきものに候。水鷄笛つくる人はつくるべくと存候。乍二御面倒一是も御きゝ可レ被レ下候。出來候はゞ御賴可レ被レ下候。賴入申候。何にても相應望之もの細工人へ謝禮いたすべく候。殺生の道具ながら水鷄笛しか笛も只ふくはおかしく候。はつかりの鷺水鷄たゝくなど哥にも發句にもつくる人のさし竿にてとり、あみにかけなどいたし候は口とこゝろと相違にて、名句叶候ともうそつきといふものに候へば、まことの風人からみればあはれなる事にて、たとへころさずとても、雲に飛、地にはしり候鳥をちいさき籠に入れたのしみとなすは、牢番も同じ事にて候を心づかず籠をならべ、これは二兩の駒鳥也これは五兩の鶯

なりといひて、摺餌に小袖の肌おしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人、武林連中には有ものに候。かの開レ籠放二白鵰一の詩意など教訓可レ被レ成候。伊賀の家中の人々にも御座候間士芳にも此事度々申遣候。後略

うぐひすや餅に糞する椽の先

二月十六日　芭蕉庵

一笑様

又武士は殺生するものなりといふ人御座候得共、魚鳥をとり候が腕かためにもなり申間敷候。只こゝろのいやしき故に候。それ〳〵の獵師御座候間これより買もとめ料理候事はつみにあるまじく候。

註、宛名の一笑を金澤の小杉一笑とすると「うぐひすや」の句は元祿五年の作なので、同元年に歿した一笑と年次において矛盾する。併し『蕉翁消息集』には一笑の後裔である「加賀金澤茶や三右衞門家資」とあるので、句は園更の書入れ違ひだと見れば金澤の一笑宛として元年説が有力になる。

曲翠宛　元祿五年

二月十八日

こなたよりも愚墨進覽之處、其元ゟも預二御音問一忝御對顏之心地に而拜見仕候。愈御堅固に被レ成二御座一候旨、千萬目出度奉レ存候。竹助殿御さたいつれの御状にも不レ被二仰下一候。御成人わる

さ日〻につのり可レ申と奉レ存候。御歳旦三つ物之事は先書に具に申上候。愚句御感心之よし珍蹟ゟ被レ告候。年〻は口にまかせ心にうかぶ計に申捨候へ共、もはや是を歳旦之名残にもなど存候而、少は精を出し候處、御耳に留り候へは甲斐ある心地せられて悦にたへず候。

一幻住庵上書被二仰付一候半由珍重奉レ存候。うき世之さた少も遠きは此山のみと折〻の寢覺難レ忘候。露命にかゝり候はゞ二たび淨雪の曙なと被レ存候。

一風雅之道筋大かた世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るもの有。彼等風雅のうろたへものに似申候へ共、點者の妻子腹をふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには擇りたるべし。

又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと日夜二卷三卷點取、勝たるものもほこらず。負たるものもしゐていからず。いざま一卷など又とりかゝり、線香五分之間に工夫をめぐらし、事終て即點など興ずる事とも、偏に少年之よみかるたにひとし。されとも料理を調へ酒を飽迄にして、貧なるものをたすけ、點者を肥しむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。

今又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これゟ實之道にも入べき器なりなと、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指ふさず。君も則此十ヲの指たるべし。能〻御つゝしみ御修行御尤奉レ存候。

一路通事は大坂に而、還俗致たるもの推量致候。其志三年已前より見え來たる事に候へば、竊

にたらず候。とても西行、能因がまねは成申まじく候へば、平生の人に而御座候。常の人常の事をなすに何の不審か可レ有二御座一や。於二拙者一は不通仕まじく候。俗になりて成共、風雅のたすけに成候半は、むかしの乞食ゟ增り可レ申候。

曲水樣　　　　　　　　　　はせを

註、蝶夢の『芭蕉翁三等文』（寬政十年刊）に眞蹟全文を摹刻して本文の注解を施してある。越中井波町の宇野次郎氏の許には「又其身富貴にして」の一項だけが、蝶夢門人重厚の添狀附で保存されてゐる。全文は重厚に傳はる前早く散佚したもの丶如くである。

蘭風宛　　　　　　　元祿五年

支考か松しま行脚の時御器を
得て一句餞別に遣しける
此心すいせよ華に御器一具

ヶ樣に申遣しければ支考ワキ句いたし遣候。偖〻支考は何角に付けて第一きりやう有人にて御さ候。知行を捨て誹門に入ほどの心さしは百人にもあるまじく候。とかく上に立人間に候。少〻あは津邊へも御たとり待入候。以上

廿日　　　　　　　　　　はせを

蘭風丈

註、支考の奧羽行脚は元祿五年なのでその頃の文通と思はれる。東京加賀豐三郎氏の所藏である。

許六宛　元祿五年

尙〳〵九日、十日も在庵しれ不レ申候

長逗留御草臥之氣(氣しきか)しもなく御厚志不レ淺辱奉レ存候。先〳〵御俳諧筋目よろしく候而深切之義と存候。繪澤山に御書被レ成被レ下珍鋪慰に覺申候。黑筆御ほめ被レ成候に力を得申候。何とぞ四色五色程覺留申度候。此方御出被レ成候はゞ十四日十五日十六十一二は御除被レ成候。他出之義知不レ申候。十八日十三日は慥に在宿可レ仕候。爲レ持被レ遣候物共相違し候所、嵐子方へ三つ物相屆可レ申候。委細期二貴面一候。以上

八日

且又四吟之俳諧もよほどおもしろく候。前夕嵐蘭、珍夕吟じ見申候。

註、近江堅田本福寺の傳來で許六宛の文通と稱される。その說は本文の「繪澤山に御書被レ成」から出たのであらう。

雲竹宛　元祿五年

寶壽院と申僧今日上京候に付申上候。彌御別條無レ之哉承度候。さては先頃御たのみ申上候額字出來候はゞ、此僧に御渡し被レ下度候。委細は御咄可レ被二申上一候。偖て御世話に奉レ存候。さて又內〻御たのみ申上候千字文、來月中に御出來被レ下候樣內〻御心がけ奉レ賴候。先樣より便之度

にせがみ遺候。此中口すさび申候一句、

　ほとゝぎす鳴音やふるき硯箱

いかゞ思召候哉おかしく被レ存候。近ゝ參候而可レ得二御意一候。以上

十一日　　　　はせを

北向雲竹樣

註、句は不卜一周忌追悼で『陸奥衛』に見える。本文は『芭蕉翁眞蹟集』と同一で金澤市の正木崎氏所藏である。

左水宛　　元祿五年

返ゝ哥笑によろしく御心得被レ下度候以上

今日京へ人遣し候に付ちよと申入候。其後は御遠々敷候。彌御無爲御入候哉。此許愚身無事居申候。然ば此本之通に急ゝ出來候樣文庫やへ御あつらへ可レ給候。烏丸、大坂や方にてたのみ入候。其許郭公の句いかゞ候哉うけ給度候。此方にて勝而出來不レ申候。漸ゝ此句いたし候。

　ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草

無二致方一句にて御さ候。必ゝ御わらひ被レ下まじく候。世間にてはつと申ほどの句と存候得共出不レ申候。又々あとより可二申進一候。先ゝ御挨拶迄に候。唯今客來候故早々申殘し候。以上

五月十日　　　　はせを

左水丈

註、本文は東京菊本直次郎氏の所蔵である。句は桃隣の『陸奥鵆』に出てゐる

曲翠宛　元祿五年

珍碩無事に昨夜下着、大かた沖津あたりゟ眼病發り、駕籠にて荷ひ込可レ申哉とかねて存候とは相違ひ、なる程風雅的當之顏付にて見事成江戸入、先〳〵御悦可レ被レ成候。昨夜五ツ前上方咄、盤子が愛敬なき顏つきも二度見るやうにうるさく、孫右衛門なつかしく、路通は大坂にて蛸をことのほかすき候よし、羽織脇指は人もかすものにて御座候へば、印籠巾着までは手ばやく拵申候共、額のなりちいさく羽織脇指合かね可レ申候。此道盤子に立はらのせんさくはせぬやうにと存る計に御座候。

一、先日は終日寛〳〵忝大悦仕候。高橋樣へも此書狀一所に御披見可レ被レ成候。珍敷交り近〻一座一笑仕度存候。以上

十七日　はせを

菅沼外記樣

註、本文は神戸市富永祐氏の所蔵のよしで野田別天樓氏から編者に報ぜられたのである。宛名の外記は曲翠の通稱である。

ケ來宛　元祿五年

追而申入候。水無月之ほ句如レ此に候。

水無月や鯛はあれども鹽鯨

右之句にて御座候。外にはおぼへ不レ申候。おもしろからず候へ共、とふも〱いたし様無二御座一候に付、去人の所へ行候へば亭主鹽くしらを料理して居候あと故、其節よくいたし互に笑ひ申事ニ候。又ゝよろしき句出候はゞ追而可二申入一候。取紛早ゝ如レ此に候。以上

六月廿一日　はせを

ケ來丈

註、句は支考の『葛の松原』に出てゐる。本文は東京大橋新太郎氏の所藏である。

許六苑　元祿五年

一首子が句合に　其角

兄

聲かれて猿の齒しろし峯の月

弟　はせを

鹽鯛の齒莖も寒し魚の店

先頃より度〱御類漸書付進申候。毎々と申ながら夜前者別而〱御馳走忝奉レ存候。歸宅例ながら殊外更申候。挑灯御落掌可レ被レ下候。又忘れ物辱候。たしかに受納仕候。晩來御來駕待候事に御さ候。

神無月十日　　はせを

許六様

註、濱松市船越町の富田埜邦氏所藏である。鹽鯛の句は露川を『流川集』に出てゐる。

猿雖宛　　元祿五年

一七月ころいつ方やらの便りに御状到來、愈御無事に御入被レ成候哉。卓袋が赤味噌のとろゝ汁もなつかしく罷成候。京屋ぬき味噌くはるゝ時節に罷成候。御客人御息災に御座候哉御噂たのみ候。

一車坂屋山の方に草庵御結被レ成候に付號可レ申よし、則存寄候間書付申候。

東の方藪際の古家　　東麓庵

新庵定而西之方に付可レ申と是　　西麓庵

でかしたる様に覺申候。土芳に物ずき御究させ可レ被レ下候。御氣に不レ入候はゞ又改可レ申候。俳諧いかゞ被レ成候哉。土芳無二油斷一被レ勤候。殊に御噂可レ承候。

聲かれて猿の歯白し峰の月　　キ角

雛や榾焚く夜の火のあかり　　珍碩（只今愚庵ニ罷有候）

鹽鯛の歯ぐきも寒し魚の棚　　愚句

取紛候間早筆、卓袋參り候はゞ御かたり可レ被レ下候。さても人にまぎらされ、こゝろ隙無二御座一候。以上

極月三日　はせを

意専様

註、太盤は「意専は猿雖の法名にして内神屋惣七なり、今此手紙を額にして惣七同家、内神屋次兵衛方に所持見事なり」と本文を『芭蕉翁眞蹟拾遺』に收めて朱註してゐる。

川和妻宛　元祿五年

追而申入候。いつぞやはまいり長〻逗留候而内室御世話共難二申謝一候。何分にもよろしく御心得可レ給候。然は其節御やく束いたし候はまぐりかい、随分大き成るたのみ遣し、此うへは無レ之よし宮ゟ申越候。少づゝの大小は有レ之候へ共、五つ一袋に入ひきやくに遣し候。いろ〱の切〻へさいく候はゞ見事に成可レ申候。くわしきは重而御めにかゝり候時可二申述一候。あら〱申入候。以上

十八日　はせを

用和丈

かもし様

はまぐりのいける甲斐あれ年のくれ

註、本文は烏明の『ふたつの文』（安永三年刊）の一通である。「かもし」は人妻のこと内儀の俗稱である。

用和宛　　元禄五年

追而申入候。日外の僧衆、未貴様方に御入候哉。さては本山へ被レ參候哉聞かまほしく候。さて〳〵心のうつくしき、いづれにも僧とは見え申候。人がら迄西國の人に候。物音もよく京に久しく被レ居候哉。ほ句も好きと見へ申候が、誹諧はならはぬ經故、下手共何ともいひ様のなき事に候。此すへに口付被レ申候はゞ數にも可レ入哉。

節季候を雀のわらふ出立哉

おかしく面白く此ほ句御僧へ貴様のはなしに被レ申可レ給候。

十八日　　はせを

用和丈

註、越中戸出町の澤田露臥の家に傳はつたもので、露臥は『百一集』の著者路工門人である。今は同町竹澤藤助氏の所藏である。

此筋・千川宛　　元禄五年

御連翰殊麥一器荊口老御手作誠御厚志賞翫可レ仕候。春に成候而御禮可ニ申進一候。昨日風故參遲ク得ニ御意一候間もすくなく御殘多、乍レ去御馳走被レ下辱奉レ存候。洒堂他出申候間斷候はゞ御手紙相わたし可レ申候。義太夫殿御發句判料被レ遣候に付御手紙可レ被レ下候。桃隣へ相渡し可レ申

候。昨日之御報にて御座候間再報に不レ及候間可レ然奉レ頼候。春可レ被二召寄一之由忝奉レ存候。通ニ御傳一大舟丈御手前夜前之一器爲レ持被レ下候。是も前宵御禮申上候。貴報右同前、左柳丈御傳言御心得可レ被レ下候。折節風故持病心に御座候故早〻及二貴報一候。以上

廿三日　はせを

此筋様
千川様

註、文中の荊口は大垣の宮崎氏で江戸勤番の此筋・千川兄弟の父である。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「參州吉田、蓮子所藏」として出てゐる。

松風宛　元祿六年

口上

昨日は御はやく〳〵と御慶に御出被レ下候。俄につれ御さ候てせた意風方へ同道にて參候故、不レ懸二御目一殘念に存候。さては歳旦之句御たつね置候御書中拜見申候。如レ此に候。

年〳〵や猿に着せたる猿の面

おかしき句にて御座候。又〻永日懸二御目一万〻可二申承一候。以上

五日　はせを

松風丈

註、名古屋市薮下町加藤霞村氏の所藏である。句は『翁草』に出てゐる。「おかしき句」と稱するのは歳旦の季語を省いたからであらう。

曲翠苑　　元祿六年

尙〳〵無理がましき事申進候少々急事に御座候

不時の御無心申事出來致候。其元御遣金御用の餘御座候はゞ壹兩貳分御取替被ㇾ成ㇾ下候はゞ可ㇾ忝候。

必返進の合點に御座候。少々難ㇾ去內證のさくひの事出來候故御心底不ㇾ看如ㇾ此御座候。委細は

當分御取替可ㇾ被ㇾ下候

貴面可二申上一候。頃日は隙人指つとひ日々心損候て御見舞不二申上一候。いまた十三日までは得御見舞申ましく候。洒堂京着可ㇾ仕候。以上

二月八日　　芭蕉

菅沼外記樣

用事

註、菅備の金子調達の文通はこれと去來へ二分の無心狀より無い。本文は寫本『祖翁消息寫』に「尾州清州笹屋賦六所持」のよし見える。

元祿六年

公羽宛

芭蕉桃靑

岸本八郎兵衞樣

貴樣

貴翰辱委細拜見仕候。當春ゟ之御待儲之御國茶雪𥝱此方へ被レ遣被レ下候。誠御厚情不レ淺辱賞翫草扉之樂に可仕、少手前靜に成候はゞ御志に而御座候間、いたづらには飮食仕間敷候。且又烏之むだ書御所持可レ被レ下候旨辱奉レ存候。兒童の筆をにぢりたるやう成も、暫時記念と思召可レ被レ下候。乍レ去結構成御挨拶被二仰下一痛入奉レ存候。

一、返〻左吉事難レ忘打寄〻申出候。昨夜京去來ゟ又申越候。是正月晦日之狀にて呂丸生前之內之事に而御座候間、切拔候而懸二御目一申候。御緣類之御方へ御語可レ被レ成候。死後之狀未去來ゟ不レ參候。定而此上別條御座有ましく候。和合院狀隨分具に候。

一、御發句五句被レ遣候。扨〻感心仕候。兼て呂丸、重行、すゝめのよし、いかにも他の手筋に而毛頭無二御座一、愚案眼的之處にて大感仕候。就中砧之玉句秀作に覺申候。重而號御書印可レ被レ下候。愚庵几右之むだがきの內へ書込置申度奉レ存候。尤御暇も御座有間敷候へ共、御國に而は重行などゝ云捨被レ成候て可然奉レ存候。かゝる事に付ても呂丸殘念に存候。重行無力落され可レ申候。

一、手前病人一兩夜少心持かろき體に見へ申候へ共、大病之義故たのもし氣薄く守り暮候。誠隱

閑雀の中まで世のありさまのがれがたく、是非なき事に胸をいたましめ罷有候。元順、重行此度之便、呂丸歸國之節細書可レ遣と兼而油斷仕置候處、病人故あらましの事乍二慮外一宜奉レ賴候。事閑に罷成候はゞ戸澤勘右衞門殿迄賴候而、委曲可レ得二貴意一候。御事多可レ被二思召一此方も事外看病草臥罷有候間、此度御音信御延引被レ遊可レ被レ下候。幸露命つゝがなく候はゞ再顏眉を開可レ申候。頓首

三月十二日

則祥所より申來候一段、切拔候而懸二御目一候。以上

呂丸義御驚可レ被レ遊と奉レ存候。京衆追善すゝめ被レ申候故

雁一羽いなて都の土の下

ヶ様に仕候。隨分不出來被レ存候。猶追ゝ可二申上一候。恐惶謹言

二月廿一日

註、出羽羽黑の呂丸が京都で客死した事を報じた文通である。宛名の岸本八郎右衞門は鶴岡の俳人公羽である。本文は同國酒田町の兒玉徳右衞門氏所藏である。

雪江庵宛　　元祿六年

深川於二草庵一何と申極り無レ之會催候間、その御含にて扨て尊下樣に萬事御取斗賴入候まゝ早席の程願候。大體は不參も無レ之由、ゆゝしき公用之人は無二是非一候。廿八日は許六木曾路に趣候故

旅人のこゝろにも似よ椎の花

かく斗申出候。何も當日可二申上一候。右御知らせ申上候。用事のみ早々以上

十七日　　　はせを

雲江庵丈

註、句は許六への送別吟で『韻塞』に出てゐる。本文は水戸市千葉市郎氏の所藏である。

荊口宛　　元祿六年

偖〳〵當年は江戸につながれ候。再會覚〻と願申候。

度々貴翰御細書辱、自ㇾ是も折〻御案内と存候へ共、閑窓とは人のいはせざるにまぎれ候而、心外に移行日數三とせ一別を隔て候。愈御堅固に被ㇾ成二御座一候由珍重奉ㇾ存候。御内室樣、文鳥子、無ㇾ恙御入被ㇾ成候半と存候。此方御兩息御無事に首尾能御勤被ㇾ成候。折〻懸二御目一御噂共申事に御座候。

御發句など適〻被二仰聞一候。殊之外感吟仕候。此筋子へ申少〻書留置可ㇾ被ㇾ下事に御座候。如行火事已後も不二相替一風雅相勤候旨、厚志之迫物殊勝之至に存候。拙者當春猶子桃印と申もの三十餘迄苦勞に致候而病死致、此病中神魂をなやませ死後斷腸之思難ㇾ止候而精情草臥、花の盛春の行衛も夢のやうにて暮、句も不二申出一候。頃日は郭公盛に啼わたりて人〻吟詠草扉に音信侍しも、獨君の何某も旅にして無常をとげたるとこそ申傳へたれば、猶、亡人が旅懷草庵にしてうせ

たる事も一入悲しみの便りとなれば、ほとゝぎすの句も工案すまじき覺悟に候處、杉風、曾良、水邊之ほとゝぎすとて更にすゝむるにまかせて與風存寄候句

ほとゝぎす聲や横ふ水の上（聲横ふや歟）

と申候に又同じ心にて

一聲の江に横ふやほとゝぎす

水光接天白露横江の字横句眼なるべしや。ふたつの作いづれにや。小生推稿難レ定處、水沼氏沾德と云もの弔來れるに、かれ物定のはかせとなれと兩句評を乞。沾曰、横江の句文に對〆考レ之時は句量尤いみじかるべければ、江の字拔て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方におもひ付べきの條申出候。兎角する內、山口素堂、原安適など詩哥のすきもの共入來りて、水上の究よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら白露横江と云、奇文を味合て御覽可レ被レ下候。是又御懷しさのあまり書付申事に候。以上

卯月廿九日　　はせを

荆口雅老人

註、この文通で芭蕉に桃印と號する甥があつて深川の庵中で病死した事情が初めて知られたのである。本文は荆口の後裔で今は朝鮮馬山府居住の宮崎浩氏所藏である。支考の『笈日記』には句評の部分のみを拔抄してある。

許六宛　元祿六年

保生左三太夫三吟に

老の名のありともしらて四十から

少將の尼の哥の餘情に候

素堂菊園に遊ひて

菊の香や庭にきれたる沓の底

野坡と云もの丶四吟に

金屛の松の古さよ冬籠り

猶廣く他見被レ成ましく候。追付俳諧など可レ懸二御目一候。乍レ去當冬は相手に可レ爲もの無二御座一候へば俳諧も成申まじく候。廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候。當方無レ恙五句付點取、脾の臓を掴饋に候。此脾の臓掴破たらん後、初而はいかいはやり可レ申候。いつ方へも久〻絕二書音一膳所へ連狀一通此狀のみに候。大がき大坂へもいまだ初夏ゟ返翰不レ致候。落字文章前後相ゆつり候而御披覽可レ被レ下候。當年めきと草臥增り候。

上方筋、繪色紙いまだ調不レ申候由、重而可二申遣一候。將又此度石摺大色紙四枚被レ懸二御意一辱、折ふし屛風入用にて別而よろこび申候。五老井のあづきも日やけにあひ可レ申候。煎茶可レ被レ下由、遲くてもくるしからず候。能便宜に少〻可レ被レ懸二御意一候。頃日あへ茶にも給あき申候。以上

十月九日　はせを

許六雅丈

註、本文は雲鈴の『入日記』（元祿十六年刊）に出てゐる。俳諧文庫本は落丁を氣附かず此の文通を脱してゐる。『芭蕉翁眞跡集』には自筆の墓寫を掲げてある。又、菊本直次郎氏の所藏には「鬼百合と云所、鬼となくても有度候。古法長篇先は奇特成事書したゝめられ候」と云ふ一章が發端に見え文字に小異がある。

吟笑宛　元祿六年

追而申入候。此中哥斿方ゑびす講大ぜい客呼候へば、參候而見物致候樣に申越候故、愚身か右之中へ指出候而はいかゞに候へども、見物に來よと申候故、下心いかゞしく風興參候而一句

ふり賣の鴈哀なりゑびす講

右之句をいたしてかへり申候。とかく鴈に成てもいろ／＼有、大ぜいに賞味せられよろこばす鴈も有、ふり賣にせらるゝ鴈もありと申事ばかり、又ゝあとゟ可二申承一候。以上

十月廿二　はせを

吟笑丈

註、本文は東京大橋新太郎氏の所藏である。句は『炭俵』に出てゐる。

許六宛　元祿六年

臘月廿八日　　芭蕉

森五介様

キ様

　伺ゝ御音物とも御心をくだかれ候と相見へ、重
　寳の物共餞被レ下候。忝乍レ去少おひたゝしく
　痛入奉レ存候

御芳墨殊さまゞゞ被レ懸ニ賢慮一草庵賑はし申候。煎茶李由手作にて可レ有ニ御座一や。すそわけ一入賞翫可レ仕候。唐紙地被レ成ニ御下一候由、識筆仕可レ懸ニ御目一候。又ゝ淡州公へ御見舞申候はゞ一宿かけに御尋と兼奉レ存候へ共、寒キ打續候故春十日過にと存候。其節參上可レ仕候。明日自然に入來と被ニ仰下一候。珍重たるべく候。何とぞ年の名殘所仰候。李由曾千那も不レ捨候由珍重の事に存候。以上

　珍碩は江戸の市へ梅かいに遣し候故
　不レ能ニ貴報一候

註、在名古屋の小峰大羽氏が岐阜に客寓中に一覽したよしで、その所見を編者に報ぜられたものである。宛名の森五介は許六である。

曲翠宛　　元祿六年

洒堂より書狀こし此度返翰共に遣し申候。いまだ御見舞にも不レ參由、沙汰のかぎりと申遣し候。

一、正秀がほとゝぎすの句驚入申候。夏中物むづかしさに何方へも文通不ㇾ仕候所、此おのこ何事さしはさみ候や書狀もくれ不ㇾ申候。此方いたはりて書狀不ㇾ越候哉。其器量に應じておもひ斗申候。

一、竹助殿御成人、お染女御無事承度候。

霜月一日　　はせを

曲水様

註、本文は『蕉翁消息集』に「金城、談夕所持」のよしで掲げてある。

十右衛門宛　　元祿六年

北向雲竹老へ内ゝ御たのみ申候屛風のおし繪、何とぞ今月中頃迄に出來候樣貴樣ゟ御たのみ可ㇾ被ㇾ下候。彼方法事も三月の末にはつとめ申さるゝやうに申來候。左候へば夫迄に屛風共に出來上り不ㇾ申候而は間合不ㇾ申、自ㇾ是も度ゝ申越〔遣カ〕候へ共、とかく紺屋の相拶にてうむに埒明不ㇾ申、さては若州客來御たのみに付たんざく之御儀申被ㇾ下候。とかく短册は御免可ㇾ被ㇾ下候。其代りに句書付遣申候。

金屛に松のふるひや冬こもり

とかく何方へも御理り申入候間、先樣へ宜樣に御傳置可ㇾ被ㇾ下候。取込早ゝ以上。

廿八日　　桃青

蔦崎屋十右衛門様

註、本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「右加賀金澤河原町森下屋甚七郎古來所藏」として收めてある。

曲翠宛　元祿六年

別帋申こし。さては兼好法師の哥をふまへて歳暮之句御尋候由、あまりよろしくも無レ之候得共、御所望故不レ及二是非一書付申候。

月代や晦日ちかき餅の音

右之句にて御さ候。其許御出會之刻はよろしくいづれへも御心得可レ給候。くわしき春永（は脱カ）に參候而數々可二申承一候。以上

十一日　はせを

曲水丈

註、句は笈日記に「有明も三十日にちかし」とある。本文は前司法次官川崎克氏の所藏である。

用和宛　元祿七年

口上

先刻は爲二御慶一御出早〻忝候。御無事にて御越年目出度存候。此方もそく才にて又此春にもうつり申候。さては歳旦之ほ句あまりよろしくも無レ之候へ共、御尋にまかせ申入候。

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

右之句にて御ざ候。さてよろしくも無レ之候。貴丈ほ句御書置候。歸り見申候。おどろき申候。
何事も永日〳〵以上

正八日　はせを

用和丈

註、鳥明の『ふたつの文』に出る一通で、句は七年の歳旦だから文通も同年と見られる。

猿雖宛　元祿七年

尙〳〵狀數取重候間、追而腹一ぱいに書つくし可二申遣一候

百とせの半に一歩を踏出して淺漬の齒にしみわたり、雜煮の餠のおもみを覺候こと、年の名殘も近付候にやとこそおもひしられ侍れ。去年の春また片なりのときこへ候梅のにほひも今としは漸〻色香しほらしく存候。御慈愛のほど推察致候。久〻便不レ仕無音、去年中は何角心うき事共多く取重候段同名方迄具に申遣し候間御聞可レ被レ成候。早〳〵東麓庵の櫻の比はと漸〻旅心もうかれ初候。されいまだしかと心もさだまらず候へ共、都の空も何となくなつかしく候間しばしのほど成共上り候而可レ懸二御日一と存候。定而歲旦承度候。愚句京板に出候而門人の引付ごとに書とられ候間、いづれにて成共御覽可レ被レ成と書不レ申候。便の一字慈鎭和尙が取傳へ候。

正月廿日　はせを

意專老人

註、伊賀上野町の今中仁兵衞氏の舊藏で「便り一字」の文意で「蓬萊に」の歳旦を詠んだ年の文通と知れる。今は菊本直次郎氏の所有となつてゐる。

去來宛　元祿七年

三吟　浪化

鶯に朝日さす也竹格子

雛の道具を取出ス春　去來

又

雛のほこりを拂出ス春

又

袷はをりを取出ス春

又

いそかし事も先仕舞春

又

めつた吹する衣更着の風

又

小いそかしさも埒明る春

隨分あんし候へども出不レ申候。あとがもし能句出候はゞ又〻申べく候。此内雛のほこりの句可レ仕やと存候。とかく御了簡可レ被レ下候。

小いそがしさも埒明る春

（原註）是より蕉翁の書なり

此御句ケ樣に仕候而ハ

ゆるりと春をかまへたる庭

此中素牛集にはるの句をのぞまれ候而即席、

鶯の雀よけ行枝うつり

いかゞくるしかるましきや。とかく手ぬるくなり候而きのとく〳〵、史邦との三吟はいかゞ成行候や。あたら三吟にて候。何ぞニいたし申度候。以上

註、蕪村は『平安二十歌仙』の序に隨古の所藏なる事を記し、同書に前半は去來筆、後半は芭蕉筆として模寫してある。

梅丸宛　元祿七年

武陵芭蕉

梅か香に昔の一字あはれ也

一歲の夢のごとくにして猶彿立さらぬ歎のほとおもやる斗に候。

二月十三日

梅丸老人

註、如行の『後の旅』に出てゐる。宛名の梅丸は美濃の人でその子の新八を悼んで書送つたのである。『笈日記』にも見える。

曲翠宛　元祿七年

御發句も珍重入集可レ申由桃隣辱かり申候。
一、乙州東下の由告申候。一封相認置候處、御細翰再々まで相達し拜誦再覽、錦繡をつらねべく候。まことに扶桑一番に候。風雅湖水に所を得たる事なるべしと感吟跳躍不レ覺候。猶熟覽の後、仔細脇書可レ仕候。何とぞ年內到着、貴亭開二青眼一願をほとき申度奉レ存候。
一、路通事、段々と被二仰下一度候。兎角理の上に申事無難不次に存候。いま爰元へは兎角の沙汰申ひろげず候。
一、正秀方より我里に書ちらしたる細書、是一封したゝめての後相屆可レ申候。
一、發句共書付越申候。兎に角作者にて御座候。是は跡より返翰可レ仕候。風雅の押懸迷惑のほど申越候。今日は草臥候間先筆を留申候。

二月廿三日　はせを

曲水雅士

註、東京天野雨山氏から岩本梓石氏所見のよしで、筆者に報ぜられた一通である。文中桃隣の集へ入句を知らせたのが年次の手掛りになる。

許六宛　　元祿七年

上略

一、神矢根、螻蓑作ニ少分一御用に立滿足申候。各感心、鬮の足輕能比合之奇作にて候。過れば手帳の部に落候。世に鳴ものゝ三つ物惣而地句等、皆〱手帳の外は三才兒童の作意ほどもうごかず候。町ものゝ拵の俳諧にも我黨五三人は見あき候へども、いまだ爰を事と句を拵候者共も歷〻相見え候。能句をうるさがる心ざし感心可レ有事にや。歳暮の大荒目をさまし候。みなと紙の頭巾は人〻空に覺えて笑候。

一、愚門三ツ物京板にて御覽可レ被レ成候。江戸他家之事は評判無益と筆をとゞめ候。其角、嵐雪が義は年〻古狸よろしく鞁打はやし候半。

一、桃隣が五ツ物は中は愚風に心をよせ所〻點取口を交え、はか〱敷も無ニ御座一候へども、渠猶口過を宗とするゆへ堪忍の部の能方に定り候。

一、保生沾圃が三ツ物は力なき相撲のもの、手合を見事にしたる斗に候。され共力すまふのねぢ合には增り候半とおさめ候。

一、野坡が三ツ物は去秋愚風に移りいまだうゐ〱敷てさぐり足にかゝり侍れども、年來の功少增り器量邪風に立越候故見所多く候。惣而の第三、手帳の場を打なぐりたる一つの手柄故、是中の品の上の定に落付候。愚句は子供のけしきあれたる體に見請候へば、一等鎭め候而目にたゝせず候。彼いせに知人音信てたより嬉しき、とよみ侍る便の一字を取つたへたる迄に候。

一、ミの如行が三ツ物はかるみを底に置たるなるべし。惣而の第三は手帳の部にありといへ共、世上に一分を出す風雅の罪ゆるし置候。

一、膳所正秀が三ツ物三組こそ跡先見ずに乗放たれ、世の評詞にかゝはらぬ志あらはれておかしく候。彦根五ツ物のいきほひにのつとり、世上の人をふみつぶすべき勇體、あつぱれ風雅の武士の手業なるべし。

世間此三通りの外は手にとる迄もなきものに候。

二月廿五日　　はせを

森川許六丈

御返事

註、孟遠門人石外、亘郭共編の『木葉漬』（享保廿年刊）に本文と共に「神矢根、蝶装」の附句が見える。『入日記』に許六が佐渡の神矢根七本を十丈から送られた記事がある。芭蕉が門人の三ツ物を評した興味のある書翰である。

山月庵宛　　元禄七年

御文被レ下忝存候。又當年も時鳥ばかり之集之事被二仰下一萬事御心添之程察入候。尚席日出名之儀被二仰越一、いかゞにても可レ然候間御取斗被レ下度、大體に罷出候まゝ其御含に而頼入存候。御留之所にてはかく斗

木かくれて茶摘も聞や時鳥

何も其内拜顏に可レ申候。右の報斗申入候。早々以上

麥秋三日　はせを

山月庵

御坊

註、句は『炭俵』に出てゐる。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「武州沼尻村壽道藏」と見える。

杉里庵宛　元祿七年

御尊書忝拜見、左候へば當年も又時鳥斗之集御催被レ成候由是も可レ然候。拙庵内にも兩三人も出席之者有レ之候間、可レ然御取斗賴入候。尙又書入之句被二仰聞一候。

木かくれて茶摘もきくや郭公

右にて可レ然候。文外又拜顏萬事可二申上一候。右御報早々申上候。以上

四月廿一日　はせを

杉里庵主

御直覽

註、本文は伊勢四日市の故鈴木芦竹氏から編者に所見を報じられたが、其後攝津芦屋の柴田筍浦氏の所藏に歸した。

三入宛　元祿七年

桃隣新宅にて自贊自讃之句

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

右之趣御坐候。先達被二仰下一候加州會之句は集に入候分は其角方に速ク留置申候。愚老初終覺不レ申候。便之節可二申遣一候。先可二申上一は大切之御茶澤山被レ掛二御意一忝、殊信州ゟ客僧來候而馳走罷成別而〱大慶仕候。猶委は近〻自レ是參上可二申承一候。已上

廿二日　はせを

上林三入様

註、桃隣の俳系である太白堂日比野桃月氏の所藏を天野雨山氏が報じられたのである。句は『別坐鋪』に出てゐる。

無宛名　元祿七年

御芳翰辱致二拜見一候。如二來命一久々に而得二芳慮一珍重奉レ存候。羽二重大根殊に珍數賞翫可レ仕候。毎〱御懇情不レ淺義存候。いまだ草臥申候而遠方不二罷出一候間、御非番之節御入來隱所にて俳諧可レ仕候。昨日も半殘子御見舞さま〲風情語合申たる事に御座候。以上

壬五月五日

註、伊賀上野町の田中善助氏所藏である。日附で見ると伊賀歸省中門人への文通である。

杉風宛　元祿七年

膳所の便致二啓上一候。其元相替無二御座一候哉承度存候。拙者道中島田あたりまではつかえなども折々晉つれ候得共、次第に達者に成り而、道々二三里日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乘旁致候而無レ恙上着致候。雨天大かた小雨にあひ候而さのみあつき程の事は無二御坐一候。

十五日島田へ着候而一夜留候處、其夜大雨風水出候而三日滯り留候而十九日立申候。いまだ高水にて馬のしりがひやう／＼かくれぬほどの事に候得共、島田の宿は懇意之者共故、馬、川越、隨分念入、一手きは高水をこさするを馳走に致候。島田より一通書狀賴遣候。相屆候哉。廿五日之狀會良、猪兵衞より參候。早々伊賀にて相達候。名古屋へかけより候而三宿二日逗留、佐屋へ廻り候處に荷兮例之連衆、道に而ぬけかけ待受候而又佐屋半日一宿逗留、伊勢長嶋にとまり候而明る日久居まで參候而、廿八日伊賀へ上着申候。同姓よろこび舊友ども日々かけ合候而、今月十六日迄伊賀に逗留致候而大和加茂猪兵衞在所一宿、十七日大津へ參、十八日より膳所に罷在候、伊賀同名方あつく蚊も多候へば夏中は膳所、折々京へ出候而去來とかたり、若は嵯峨去來屋敷に休足致事も可レ有二御座一候。いまだ草臥もしかとやまず候故持病も指出不レ申候。次第／＼暑にむかひ候得ば、いかゞと存候へ共前々より藥給候。醫師なども不レ替居申候間、此方の事御氣遣被レ成まじく候。

先月十八日深川へ子珊御同道之由申來候。定而俳諧の御心指とは存候へどもはか／＼敷事も成申まじく候。十七日沾圃會致候とて懷紙指越、桃隣發句にて御座候。成程何レ出來候間いがあたり

先江戸いきと寫し置申候。名古屋、いが、ぜゞ、俳諧猶いまだ能所に尻をかけ居申候。其元の風情存知もよからず候間、深節に御はげませ可レ被レ成候。なごやは深川集を手本にわかき者共修行之由申候。惣而俳諧評判之事など有レ之候得共、他にあたり候事も有レ之候得ばいかゞ故、書しるし不レ申候間ほのかに筆のはしを御さとり候而、最其元御はげみ可レ被レ成候

一、同名此度は殊之外力を得よろこび候而、拙者も別而大悦仕候。委細書付がたく候間不レ具候。

一、猪兵衛病氣、桃隣無二油斷一被二仰付一可レ被レ下候。折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。され共壽貞病人之事に候へば、しかぐ茶をまいるほどの事も得致まじくと存候。これらが事共などは、必御事しげき中、萬御苦勞に被レ成被レ下まじく候。猪兵衛、桃隣指圖に而ともかくも留守相守り、火の用心能仕候樣に被二仰付一可レ被レ下候。此度所々狀數有レ之候間、重而具に可二申進一候。以上

五月十一日　　　　はせを

杉風様

荷兮方にて

世を旅に代かく小田の行もどり

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛驒の工かさしつかな

すゝしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の内、越人相談候而住居の方をとり申候。飛驒のたくみまさり可レ申候。其外發句も不レ致候。伊賀にて歌仙一巻言捨申候。

註、上方の行脚への道中狀況のよく知れる文通で、太蟲は『芭蕉翁眞蹟拾遺』に日附の「十一日」に朱で疑問符を附してゐるが、閏五月の十一日ならば旅程と矛盾しない。

游水宛　元祿七年

堅横の五尺にたらぬ草の庵
むすふもくやし雨なかりせは

西行法師の古哥をふまへて

五月雨や雲引起す大井川

此句いかゞあるべく候哉。西行の哥に少は似た事も候哉。又ハ大きに相違候哉。キ様の了簡うけ給度候。尤キ様了簡に依て云捨之句可レ然候。又さもなく候はゞ内々集の中へも入可レ申候哉と存候。以上

十三日　桃青

游水丈

註、本文は編者十數年前の所見であるが、所藏者名を失念したので今所在が知れない。

浪化宛　元祿七年

山頭月挂雲門餅
屋後松煎超洲茶

佛法は障子のひきてみねの松
火打ふくろに鶯のこゑ

此心をもて俳諧の變化をしるべしと許六が去人に示候由、また惟然が、たば粉呑ぬ傾城と菓子くはぬ俳諧師はすくなきものとはし書して

ちり塚や鶯あさる聲のひま　房

あまりおかしく書とめ懸御目申候。

十六日　桃青

浪化様

註、重厚の『もとの水』に出てゐる。「ちり塚や」の句は本文にもある通り惟然房の句である

去來宛　元祿七年

盤子便御無爲之旨承り滿足候。拙者先月十三〔壹カ〕日江戸を出歩、道中水などに障、名古屋に二日斗逗留、鄕里へ二十九日に上着、昨十七日大津迄出申候。膳所の殿御參勤廿日過と承候。此内逢申仁

も有レ之且江戸への書狀など賴可レ申爲、昨日雨にぬれながら又七方迄たどり申候。此方智月宅も茶時、正秀も其通取込定而曲水も殿御立までは隙入可レ申候間、此方へ御見舞廿日過まで御延引可レ被レ成候。廿四五日の頃或は廿二三日拙者上京可レ致候。尤貴宅へ御案内可レ申候。少々貴樣へ用の事も御座候間暫時逗留致度候。御宿御遠慮がましく候。若元子方など御かり被レ成候事も成申まじく候哉。其段いづ方にてもかまい無ニ御座一候間御才覺被レ成可レ被レ下候。とかく懸ニ御目一度候。御なつかしく候。早々御報下し可レ被レ成候。武府門人いが門弟共無ニ異義一候。

亥五月十八日　はせを

註、本文は岐阜市の樋詰庭二郎氏所藏である。小峰大羽氏が筆寫して編者へ報ぜられた一通である。

猪兵衛宛　元祿七年

一、當月十六日加茂へ參、平兵へニ一宿、御袋樣、源三殿、あねごなどへ逢申、御袋御無事ニ御入候。され共四年已前ゟハよほどとしも御寄耳も遠く被レ成候。あねごとふたり貴樣事のみ、くどくかへすがへす逢申度よし被レ申難義いたし候。則平兵へ、源三殿書狀相屆候。委ク跡ゟ可ニ申進一候。

十六日好齋老とならちやニて御出合之由、御なつかしく候。好齋老へも此たび狀數多く候而延引重而可ニ申達一候。御心得被レ成可レ被レ下候。深川の樣子具ニ重而御申こし可レ被レ下候。

一、二郎兵へ道中達者ニ而、拙者苦勞ニもなり不レ申能つとめ申候。以上

壬五月廿一日　　はせを

猪兵へ樣

註、桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に松村氏（桃鏡）所持として本文を摸刻してある。宛名の猪兵衞は鯉屋の手代で後の小書諸組松村氏、芭蕉の甥と云はれる。加茂は猪兵衞の鄕里である

支考宛　　元祿七年

されハ與風此間存知出し候ニハ二種被レ懸二芳情一旅店之一德、珍重不レ淺賞翫申候。今日去來きせるの掃除、去來一世之初たる故きせるの掃除、壬五月と季を定申候折節ニ、貴僧初音信是亦壬五月の季を定候間、向後左樣ニ御覺可レ被レ成候。晩方御入來所レ仰候。

去歲武府脚半わすれ候

脚半の方ニ而季を定可レ申候也

廿三日　　はせを

註、支考の『笈日記』（元祿八年刊）に載する文通で、附註によると嵯峨の去來別墅から在京の支考へ出した返事である。

曲翠宛　　元祿七年

其元靜ニ成可レ申と奉レ存候。愈御無事ニ被レ成二御座一候や。爰元いまだ五七日も逗留可レ仕候間、貴邊へ罷出可レ得二貴慮一候。洒堂、之道など見舞ニ參、久〻にて遂二面話一候。頃日めきと暑氣至り候。竹助殿機嫌よく御あそび被レ成候や。貴樣ニも先日少〻御氣草臥之體ニ相見え候。甚暑御保養可レ被レ成候。以上

壬五晦日

芭蕉

曲翠雅公

註、伊賀上野町の松尾家菩提所愛染院の什物である。住職岡森霞村師の談によると特志家から寄附されたのださうである。

雪芝宛 元祿七年

やまたや

七郎右衞門様 はせを

御芳翰、殊醒井餅一重被レ懸二御意一忝、能慰と賞翫可レ致候。一昨夕少持病氣味御座候處、昨今ハ苦勞と成申ほどの事ニも無二御座一候。明夕之事いまだ併諸心程にも無二御座一候へども、成合ニ可レ被レ成候はゞ暮ざる內ゟ御見舞可レ得二御意一候。

一、御發句留置候而緩々熟覽、重而叢惡可レ得二御意一候。以上

壬五月十日

註、本文は伊賀阿保町の龜井曉氏の所藏である。宛名の七郎右衞門は雪芝の通稱である。

用和宛　　元祿七年

別紙を以申進候。此四五日以前ニ木節許へ參候而、風與存寄りて此一句口すさび申候。

秋ちかき心よするや四疊半

いかゞ御座あるべく哉。立ながらニハ出來候樣ニ被レ存候。キ樣ニハ茶の湯御好被レ成候故、は句ゟハ風情おもしろく候故申入候。少ゝ愚庵へも松風など御同道候而御來待入候。取込候而早ゝ申殘候。以上

十七日　　はせを

用和丈

註、本文は攝津伊丹町の岡田利兵衞氏所藏である。句は玄梅の『鳥の道』を初出とする歌仙の發句である。

野水宛　　元祿七年

先日は參上候て種々得二御意一候。殊に茶まで被レ下候て結構成御道具共拜見此上なしと奉レ存候。乍二慮外一御同性樣よろしく奉二願上一候。

秋ちかき心よするや四疊半

追て古き句申上候へ共、指當り出來不レ申候故申入候。何事もあとゟ〳〵

廿二日　　桃青

野水様

註、玄梅の『鳥の道』には「心の寄や」とある。本文は岡山市佐々木氏所蔵のよしで西村燕々氏から所見を報ぜられたのである。

猪兵衛宛　　元禄七年

一桃隣いかゞ相被レ勤候や。暑氣之節短夜と云、會も心のまゝにハ成申まじく候。杉風、子珊心にたがハざる様ニ實を御つとめ候へと御申可レ被レ成候。京都俳諧師五句付候事付閉門、俳諧さたひつしりと蛭に鹽かけたる様ニ候。然に段ゝ拙者口から申上せ候も氣の毒故不レ具候。ケ様之處唯實を不レ勤故と合點を致、むざとしたる出合會等心持可レ有旨、桃隣へ御物がたり可レ被レ成候。

一市之進殿御無事ニ候哉。可レ然御意得賴存候。

一此方京、大坂貧乏弟子共かけあつまり、日ゝ宿を喰つぶし大笑ひ致くらし申候。

一理兵へ細工無レ之時分せめて煩不レ申候様に御氣を可レ被レ付候。右之通壽貞ニも御申きかせ可レ被レ下候。おふう夏かけて無事ニ候哉。様子具ニ御申越可レ被レ成候。

一宗波老、庄兵へ殿へも御心得可レ被レ成候。定而好齋老たへず御見舞可レ被レ下と存事ニ候。追而以二書状一可レ得二御意一候。以上

六月三日　　桃青

猪兵へ様

註、江戸への文通で文中の人々は大抵深川の芭蕉庵近傍に住んでゐる。『芭蕉翁眞跡集』に編者桃鏡の所蔵として摹寫してある。

喜兵衛宛　元祿七年

一御手紙忝拜見、江戸之狀共御屆忝奉レ存候。先日木曾塚へ御手紙并干瓢一包被レ懸二芳慮一忝存候。一昨是へ罷越候而、御案內申上度と朝夕申出し心頭に不レ止候へども、少し參いなや風引候而ふせりゐ申候。仍て彼是御案內延引背二本意一奉レ存候。今少し休足仕候て後刻御尋可レ得二貴意一候。路通おしかけ珍重ともいまだ落付不レ申候。隱桂が罪ハ路通にゆづり、路通が罪は隱桂にかづける體に見へ申候。いよ〳〵おそろしく候。尙貴面。以上

八日　はせを

高橋喜兵衛様

註、路通の勘氣說を裏附ける文通である。和露文庫藏本伴蒿蹊手澤の『芭蕉翁文乃宇津志』に收めてある。

意水宛　元祿七年

口上

今日作二郎との御上京之由にて此方へ爲二御知一に付一筆申入候。彌御無事ニ被レ入候由珍重に候。

此方替儀無レ之候。然ハ内〻御頼置候からかさもはや出來可レ申と存候。御下し可レ給候。近〻に信州へ罷越候。道中にてハ入不レ申候得共、行先にて不自由成所多こまり申候。同じくハ此作二郎との便ニほしく候。さて一句

顔に似ぬほ句も出よ初さくら

此句去亭之庭前にていたし候句也。數〻云ク有レ之候共筆紙につくしかたく候。キ面〻。以上

廿三日　はせを

意水丈

註、本文は金澤市櫻木小路故石田霖汀氏の所藏である。句は『芭蕉翁全傳』に七年秋士芳亭の作とある。

去來宛　元祿七年

尙〱江戸へも書狀遣し度候。重而御無心可ニ申進一候。

名月此方にて山家を樂候。

三文字屋便御芳翰幷江戸大津之狀共御屆、是又辱奉レ存候。愈御無事之旨珍重不レ淺存候。御一家別

共元御風流

條不ニ相聞一目出度奉レ存候。拙者先無爲ニ罷有候。頃日ハ少〻冷氣、素牛、丈草相替事無ニ御座一候や。

御座可レ被レ成候。

爰元度〱會御座候へ共いまだかるみニ移り兼しぶ〱の俳諧散〻の句のみ出候而致ニ迷惑一候。

此中脇二ツ致候間懸二御目一候。

　。折〳〵や雨戸にさはる荻の聲

　放す所におらぬ松虫

　荒〳〵て末ハ海行野分哉

　鶴の頭をあぐる粟の穂

鶴ハ常體之氣しきに落可レ申哉。

一大坂ゟ終ニ一左右無レ之、扨〻不屈者共さながら打捨候もおとなしからずと存候而、頃日自レ是洒堂まで案内致候バ、軍要方ゟ早〻待申などゝ申來候。一圓難二心得一候間名月過先參宮と心懸九月の御神事おがみ可レ申と存候。素牛などいせの出合所望ニ候ハヾひそかに其旨心得られ候様ニ御傳可レ被レ成候。爰元國司歸城どこやら事やかましく候間、追付他境へ移り可レ申候。

一高橋條助殿御上り御語之由なつかしく存候。曲水子無事と存候。年内いま一度參會かたく契置候。是等の人〻すぐれたる器ニて候。猶重而可レ申候間先如レ此御座候。以上

八月九日　　はせを　書判

去來雅丈

註、七朗の『枇杷園隨筆』に附合の前後を拔抄せるもののこれが全文である。大坂行の延引した事情が窺はれる。法學博士加藤犀水氏の所藏である。

杉風宛　　　元祿七年

追而申入候。其許ゟ出來參候はん袋、あまりそこね申候。今一ツあたらしくいたしたく候。大サ下地の通りにたのみ入候。則古袋飛脚に登せ申候。いづれにもよろしく賴入候。御內樣御せはニて候へどもたのみ入候。依而一句

物ほしや袋のうちの月と花

いかゞおぼし候哉。當坐間に合候間此句雜にて御ざ候。くはしき事追ゝ可ニ申入一候。以上

廿三日　　　はせを

杉風丈

註、本文は闌更の『花の故事』に收めてある。句は路健の『旅袋』（元祿十二年刊）に出てゐる。

露川宛　　　元祿七年

倘〳〵先日御狀御相撲句共遂ニ一覽一候。尤珍重の句共拜見申候。

熱田鷗白與風預ニ御尋一候而御噂承珍重被レ存候。先いつぞや佐夜の泊り殊之外之草臥故、梁ゝ共重而ながら便りニ不レ得ニ御意一御思召殘念之至に被レ存候。愈風雅無ニ間斷一御勤被レ成候由、感心申事ニ御座候。且又

委可ニ申進一候

いつやらの便りニ御連札幷たばこ一箱、被レ懸ニ芳情一遠方御厚志不レ淺義忝被レ存候。拙者盆ゟ舊里ニ逗留罷有、伊勢ゟ支考か來ヲ待居申候。追付他歩致多押造候而、越年ニ又舊里へ可レ歸覺悟ニ御座候。正月ハ必貴様御在所へ御出可レ被レ成候。其節緩々可レ得ニ御意一候。取あへず早ゝ不具。

以上

八月廿日

註、名古屋市澤市郎右衛門氏の許に澤氏二代の露川から代々傳來した眞蹟である。本文の「いつぞや佐屋の泊り」が年次を裏書してゐる。

杉風宛　元祿七年

尙ゝ四五日中に又ゝ委可ニ申進一候。

先大坂へ出候を御しらせの爲

夏ゟ七月迄之御狀尤遲速御座候へ共段ゝ無ニ相違一相達し候。久ゝ伊賀ニ逗留故便りも不レ致候。

早ゝ申殘候

無ニ心元(ママ)一被レ存候。愈御無事ニ御勤御家内相替事無ニ御座一候哉承度存候。おしめ祝言當月中ニ而可レ有ニ御座一と推量申候。定而御取込可レ被レ成候。定而首尾能相調可レ申と御左右待入候。

一拙者先ハ無事に長の夏を暮し、漸ゝ秋立候而頃日夜寒の比ニ移候。いかにも秋冬之間無レ恙暮

し可ㇾ申様ニ覺候間少も御氣遣被ㇾ成ましく候。追付參宮心がけ候故、先大坂へむけ可二出申一去ル八日ニ伊賀を出候而、重陽の日南都を立、則其暮大坂へ至候而、酒堂方ニ旅宿假ニ足をとゞめ候。名月ハ伊賀ニ而見申候。發句ハ重而可ㇾ懸二御目一候。

菊の香やならにハ古き佛達

菊の香やならハ幾代の男ぶり

びいと啼尻聲悲し夜の鹿

いまだ句體難ㇾ定候。他見被ㇾ成ましく候。追付爰元逗留之句共可ㇾ懸二御目一候。早〻御狀御こし可ㇾ被ㇾ成候。其元兩替丁か、するが町酒店ニて稻寺十兵へと申もの、爰元伊丹屋長兵へ店ニて候間、早〻御左右承度候。子珊秋の集被ㇾ催候や。左候ハヾ爰元の俳諧一巻下し可ㇾ申上方筋別座敷、炭俵ニて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候。少ハ桃隣にも師恩貴キすべをわきまへ候へと御申成候べく候。桃隣俳諧伐に替上り候と專沙汰ニて候。急便早〻

九月十日　　はせを 書判

杉風様

註、大阪表から江戸への文通である。『芭蕉翁眞跡集』に「駿府小西氏子來」の所藏として自筆を摹してある。

助風宛　元祿七年

此中は江戸表ゟ之書狀共、并かみ包一封屆被ㇾ下毎事〳〵御世話共忝候。其許へも其角ゟ之文參候

哉。此方へハみじかき口上書斗遣候。委細不二申越一候。先月初ゟ不快之由承申候。定而よろしき故不二申越一哉又は案んじさせてもいらざる事に存候而哉。結局無二心元一成申候。キ丈方書狀遣候ハゞ御しらせ可レ給候。さて本庄村之神事ニ付春日宮へ奉納句

ひゐと鳴しり聲寒し夜の鹿

此句ハ奈良にて致候なれ共、おかしき句出かね申候に付こゝにて仕廻可レ申候。キ丈句も一兩日中に御下しまち入候。仍而如レ此候。

十一日　はせを

助風丈

註、本文は伊勢四日市の故鈴木戸竹氏の所藏である。句は中七「しり聲寒し」とあるのが相違する。

如行宛　元祿七年

升かふて分別替る月見かな

右之句申入候。處〻に參候へどもさして是と申ほどの句も出來不レ申候。またも此句かと存候故申まゐらせ候。これより直ニはりま路ニ參り而來月末に歸り申候。其許連中へもよろしき樣ニ御心得可レ給候。旅宿故あら〳〵申入候。かしく

十八日　桃青

如行丈

註、句は青流の『住吉物語』（元祿八年刊）に出てゐる。本文は『一葉集』に收めてある。

半左衛門宛　元祿七年

尙々ばゞ様およし御心得奉ㇾ賴候

彼是仕未以二書狀一不二申上一候。愈御堅固被ㇾ成二御座一候哉承度奉ㇾ存候。頃日意專ゟ便御座候而其元相替義無二御座一候旨ハ被二相傳一候。私南都ニ一宿九日ニ大坂ヘ參着、道中ニ又右衛門かげにてさのみ苦勞も不ㇾ仕、なぐさみがてらニ參つき申候。大坂ヘ參候而十日之曉よりふるひ付申、每曉七ツ時ゟ夜五ツまでさむけ熱頭痛參候而、もしハおこりニ成可ㇾ申かと藥給候ヘバ、廿日頃よりすきとやみ申候。就ㇾ其心むづかしく早々御案內も不二申上一、漸かめや、はかた屋ヘ今廿二日見舞、折節京屋被ㇾ下候間啓上仕候。いまだ逗留もしれ不ㇾ申候ヘ共、長逗留ハ無益之樣に奉ㇾ存候間二三日中ニ、はせ、名張越にて參宮可ㇾ申と奉ㇾ存候。相替事無二御座一候得共爲二御案內一如ㇾ此御座候。又右衛門方え別紙ニ不ㇾ及候間、乍二慮外一御心得被ㇾ遊可ㇾ被ㇾ下候。以上

九月廿三日　桃青 書判

松尾半左衛門樣

註、太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「京、麥慰舍羞子所持」として載するもので、大阪から再び引返して參宮の志があつた事がこれで知れる。

猿雖・土芳宛　元祿七年

一兩吟感心、拙者逗留の內は此筋見えかね無⼆心元⼀存候處さて〳〵驚入候。五十三次前句とも秀逸かといづれも感心申候。其外珍重あまた、惣體かるみあらはれ大悅不ㇾ少候。委細に御報申度候得どもいまだ氣分も不ㇾ勝、何角取紛候間伊勢ゟ便方第ニ以⼆細翰⼀可⼆申上⼀候。右之氣分故發句もしか〳〵得不ㇾ仕候。

九日南都をたちける心を

菊に出て奈良と難波ハ宵月夜

秋夜

秋の夜を打崩したる咄かな

秋暮

この道を行人なしに秋の暮

廿三日　はせを 書判

意専樣

土芳樣

註、本文は『枇杷園隨筆』に出てゐる。土芳の後裔なる伊賀上野の猪來の許へ傳來の一通であるらしく思へる。

正秀宛　元祿七年

遊刀被レ歸候間致二啓上一候。御無事ニいまほど御隙之由珍重不レ過レ之候。伊賀へ去年便之節御状并、月の御句感心飛入客則續猿蓑ニ入集申候。何とやらかとやら行先〳〵日つもりちがひ候而、當年秋も名殘ニ罷成、漸〻かみこもらふ時節ニ成候へ共、いまだかみこハもらハず時雨は催し候。當年之内何五七日之内なり共、得二御意一候樣ニ存候へ共例ノ不レ定候。霜月之内ニハ何とぞ心がけ可レ申候。若名月前後ハ伊賀へ探芝か昌房など御誘御尋ニも預り可レ申哉と同名半左衛門も相待申候。若其元へ得不レ參候ハヾ御左右可レ申候間、いがへ御出候樣ニ御覺被レ成可レ被レ下候。爰元楽俳諧もあらく承候。之道、洒堂兩門の連衆打込之會相勤候。是か外ニ拙者働とても無二御座一候。重陽之朝奈良を出て大坂ニ至候故、

菊に出て奈良と難波は宵月夜

又洒堂が予が枕もとにていびきをかき候を

床に來て鼾に入るやきりぎりす

十三日は住よしの市に詣て

舛かふて分別替る月見哉

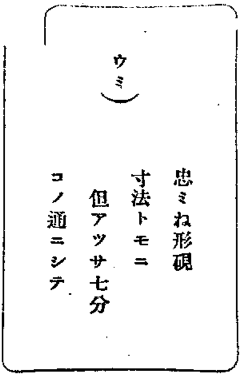
壹合斗（升）一つ買申候而かく申候。少々取込候而早筆御免。

九月廿五日　　　芭蕉

註、支考の『梟日記』の豐後獨有亭に「先師はせを庵の手跡あり」と文通の後半だけ掲げてある。正秀宛の事は支考の註記に又「飛入の客に手をうつ月見哉」の句は『續猿蓑』に見える。本文は加藤犀水博士の所藏である。

無宛名　　元祿年中

外ニ此繪圖にて得二御意一候。忠峯形すゞり去方ゟ被レ賴參候。近比〳〵貴師御世話と存候へ共御作被レ下度候、よろしき石にて被二仰付一可レ被レ下候。とかく此本之通ニすゞりや御申付奉レ賴候。急ゝ出來候樣ニ被二仰付一可レ被レ下候。



右料物之儀、重便ニ御申こし可レ被レ下候。只今客來候而麁書御免ゝ。

八月廿一日　　はせを

註、尾張鳴海の下郷次郎八氏の所藏である。年次は流蹟から元祿初年頃のものと推測される。

玉風宛　　元祿年中

[illegible]上

以二手紙一申入候。ひさしく便も無レ之御無音打過候。然ハ其許にも時ならず田舍へ御下り候故、四國へ御下りもやと押はかり候に、庄次郎どのニ此中三井寺にて逢申候而承候へば、さにもなく一段御無事御暮候よし先々よろこび申候。とかく此方ゟ便いたさず候(虫クヒ)年にも御尋なく第一筆ふせう成人と存候。其くせ手跡は能筆ながら先はやりはなしニ相見へきのどくに存候。俳諧ハ打捨られ候哉。御ほ句承度候。

此方郭公ノ句申入候。

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ艸

今年ハ漸々如レ此候。さても出來かね申候。猶近日待入候。以上

五月廿日　　はせを

玉風丈

註、本文は信濃飯田町の吉澤新兵衛氏の所藏である。句は『陸奥衛』に出てゐる。

無宛名　　元祿年中

一、六日ニ立可レ申と存候。いまだ持病も聢ニ無二御座一候間八日九ニも成可レ申や。先六日立之筈

ニ人〻ニは申きかせ、一兩日ひそかに休ミ發足可レ仕哉と奉レ存候。此外ニ御無心之事も御座候はゞ重而御左右可ニ申上一候間、左樣ニ御意得被レ成可レ被レ下候。繪印之事則調申候。以上

五月二日

註、本文は金澤市の殿田良作氏所藏である。安永八年の再和坊の添狀がある。

曲翠宛　元祿年中

一樽被レ懸ニ貺慮一凌ニ炎風一辱奉レ存候。明日ゟ御番之由御苦勞奉レ察候。

中〻に心おかしき臘月哉

御非番之間御尋可レ得ニ芳慮一候。折節對客及ニ早筆一候。頓首

酒堂も御手紙見申候。

馬指堂主人雅子　芭蕉

註、馬指堂は曲翠の堂號である。本文は『ふくるま集』に見え、句は今まで所見なき逸句である。

破琴宛　元祿年中

同上

以ニ手紙一申遣候。夫ゟハひさしく便も無レ之、いかゞ御くらし候哉と存じ候處、こま〴〵との御文被レ下、くり返しはいけんいたし候。先〻御家内御別儀無レ之珍重に存候。愚老儀も無事に居申候。

さて又長左衞門殿方祝言も相調候由、是以目出度候。無〻隱居ニも滿足ニて可レ有レ之と察存候。然ハ何そと存候へ共、此一句古句候へとも賀して申入候。

竹の間のいはら見せしやほとゝぎす

此ほ句中ニ此すへ共に身上あつく被レ成二御成一候。山伏も門出とハ此事成べし。委ハ頓而之内參候。何角も可二申述一候。以上

廿一

破琴樣　桃青

註、大阪で土居剛吉郎氏の蒐集、舊藏されたもので、「竹の間の」句は初見である。

曲翠宛　元祿年中

昨日は御手紙被レ下候處折ふし他行不レ能二即報一候。然ハ伊せ方之書狀共御とゝけ慥受取申候。御世話ニ存候。內〻友達も空しく成給候由申參候。併年の程も不足なく第一ニ果福の有人にてあやかり事ニ存候。キ樣ニもなじミの方ニ候間一筆可レ被レ成候。一所ニいたし可レ遣候。追悼ニも此句可レ然哉、

道ばたの木槿は馬に喰れけり

古句ながら如レ此ニも存候。すへニてあたらしき句を可レ申候。先取あへず右之とく可レ遣と存候。ちと〱御入來待入候。

十一日　はせを

曲水丈

註、東京菊本直次郎氏の所蔵である。句は『野ざらし紀行』にあるが、元祿に入っての筆蹟である。

晩山宛　元祿年中

一、白俳諧御執心之由先ハ珍重、物しりにならんより心の俳諧肝要ニ御坐候。句者は澤山御坐候得共心法を守る人ハまれ〳〵なるものにて候。

一、季よせの御不審御尤ニ候。愚老は此事ニうとく候儘、考へ跡より可二申入一候。増山井御用可ㇾ然候。

十七日　はせを

晩山様

註、重厚の『もとの水』にある。文通の年次は元祿に入つてからであらう。

木子宛　元祿年中

御手紙被ㇾ下候。昨日ハ知人ニさそはれて四條の芝居見物ニまいり一日遊び申候。又ゝ氣も晴候而おもしろく御ざ候。誹諧などゝハちがい是こそハはいかいもやめニして遊興斗がよく候。

口切に境の庭ぞなつかしき

茶ノほ句は是ゟ外に覺不レ申候。仍而如レ此ニ候。以上

はせを

木子丈

十二

註、句は『深川集』に既出のもので、本文は名古屋市の加藤霞村氏所藏である。

半左衞門宛　　元祿年中

廿二日之書狀認置候へ共、御屋敷まで遠方故指留置候處、長兵ハ殿御內衆御用候間追而書申上候。つゝき申候はゞ何とぞとりとめ申度、さても〳〵難義仕候段、御推し被レ遊可レ被レ下候。もはや御苦勞に御座候故如レ此御座候。先久作へはさたなしニ仕候。あんじくれ候而益なき事ニ候得バ、いかていいと成行候共、急ニハ申遣し申まじく候。其元へも段々ニハ申遣候まじく候間、左樣ニ御意得可レ成候。およしニも右之通御よみきかせ被レ遊可レ被レ下候。以上

霜月廿七日　　桃青

半左衞門樣

註、伊賀阿保町の福井鴻氏所藏である。一行空に組んだ個所に綴目があるので、そこから裂損したものを繕ったのであらう●從つてその一項の文意は通じないが眞蹟である。

半左衛門宛　　元祿年中

伺々鏡代人の持參候を直ニ進上、祝義迄ニ御祝可レ成候。

二日之貴墨先日長兵衛殿ゟ御届被レ下拜見仕候。愈御堅達御重年被レ成候由珎重、目出度奉レ存候。自

次右衛門殿先日年始之返翰

仕候而延引仕候。

レ是も先無事ニ左右可レ申上ニと二日ニ書狀したゝめ、修理殿飛脚便りニ返翰ながら進上仕候。相

達し可レ申と奉レ存候。

〆

用事申遣候。慥ニ御届（裂損）　　江戸　同　桃青

いか上野赤坂町

松尾半左衛門樣

註、伊賀阿保町の鍛井曉氏所藏である。元祿何年の文通か推定する手掛りがない。

遺言狀　其の一　　元祿七年

一、三日月日記　　伊賀に有

一、發句少書付（原註）此字不分明　同所

一、新　式
一、百人一首、古今序註　是は杉風へ可レ被レ遣候落字有之候間本寫を改可被校候 披書是ハ支考へ可被遣候

一、埋　木　半殘方に有之候

江　戸

一、杉風方に前〻よりの發句、文章の覺書可レ有レ之候。支考校レ之文章可レ被二付置一候。（イニ引直）何も草稿にて御座候。

一、羽州岸本八郎右衛門發句二句、炭俵に拙者句になり候。公羽と翁との紛れにて可レ有候。杉風ゟ急度御斷可レ給候。

註、竹人の『芭蕉翁全傳』に「正秀が預りて曲翠にて十月十六日披く所の遺書」として載する三通のその一である。支考の『十論爲辨抄』には「發句少書付」が「發句書本」とある外に小異がある。

遺言狀　其の二　元祿七年

一、杉風へ申候。久〻厚志死後迄難レ忘存候。不慮なる所に而相果、御暇乞不レ致段、互に存念（イニ殘）無二是非一事ニ存候。彌俳諧御勤候而、老後の御樂ニ可レ被レ成候。

一、甚五兵衛殿へ申候。永〻御厚情にあづかり死後迄も難レ忘存候。不慮なる所ニ而相果御暇乞も不レ致、互ニ殘念是非なき事ニ存候。彌俳諧御勉候而、老後はやく御樂可レ被レ成候。御內室

様之不ㇾ相替ㇾ御懇情最後迄も悦申候。
一、門人方共角は此方へ登、嵐雪を始として不ㇾ殘御心得可ㇾ被ㇾ成候。

元祿七年十月　　　　自筆　はせを　朱印

註、本文は『芭蕉翁全傳』の遺書三通のその三である。『十論爲辨抄』とやゝ相違してゐる。

遺言狀　其の三

元祿七年

一、伊兵衞ニ申候。當年ハ壽貞事ニ付、色〻御骨折面談ニ御禮と存候所無ㇾ是非ㇾ事ニ候。殘り候二人之者共十方を失ひうろたへ可ㇾ申候。好齋老など御相談被ㇾ成可ㇾ然了簡可ㇾ有候。
一、好齋老よろつ御懇切生前死後難ㇾ忘候。
一、榮順尼、禪可坊、情ふかき御人〻〻面上ニ御禮不ㇾ申殘念之事ニ存候。
一、貴樣病起、御務生隨分御勉可ㇾ有候。
一、桃隣へ申候。再會不ㇾ叶可ㇾ被ㇾ力落ㇾ候。彌、杉風、子珊、八草子、よろつ御投かけ兎も角も
一日暮と可ㇾ存候。

元祿七年十月　　　　はせを

支考此度前働犢、深切實を被ㇾ盡候。此段賴存候。庵の佛ハ則出家之事ニ候へば遣し候。

註、本文は桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に摹寫してある。『芭蕉翁全傳』の遺書三通のその二である。

遺言状　其の四　元禄七年

御先ニ立候段残念ニ可レ被ニ思召ニ候。如何様とも又右衛門便ニ被レ成、御年被レ寄御心静ニ御臨終可レ被レ成候。こゝに至申上事無ニ御坐ニ候。市兵衛、次右衛門殿、意専老をはじめ不レ残御心得奉レ頼候。中にも十左衛門殿、半左殿右之通ニ候。ばゞ様、およし力落し可レ申候。以上

十月十日　桃青

松尾半左衛門様

新蔵は殊に骨被レ折忝候。

註、本文は蕉厚の『あさかり』及び『一葉集』にあるもので、全傳及び鶯[illegible]抄には載つてゐない。遺言状は皆支考の代筆で、これに自署したものである。

存疑

筆蹟は疑はしくとも書翰の内容に信を措けるものもあれば、傳來は正しくとも内容の疑はしいものもある。從つて今は不審を存するが後日釋然とするものがある譯なので、こゝに別録するもの悉くを僞物視するのではない。（編者記）

惟然宛

逍遙遊

前略

道に逍遙の二字ある事は心に天遊ありて、世をおもしろからむといふ事也。天はこれを得て月清く、地は是を得て花咲り。鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也。野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽てしづかなる。虻はその尾にあそばむとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ。はたとうたれてかなしからむは、遊ぶ時の心にかへよ。そのぬしの牛にはおかれて、ふたつなき鼻のかけたるためしもあらむに、すべて遊ぶ事は先にして、くるしむことはのち也。誰か遊んでくるしまざらん。くるしまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや。世に實あり虛あり。實にあそぶ人は虛にくるしむ。たれか實なく虛にすゝむ人はある時のあるにぞいとゞくるしむべき。虛に實有、實に虛あらば虛實は虛にして自在なるべし。むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀音の花によめ入せられしも、もとより虛をもて虛をとかねば、まして實をも

て實をとかず。かゝる聖人の虚をさして、いまの人もいふてあそばざらんや。此故に春になりては川狩にあそぶ。茸狩の時は浪人をあそばしめ、鷹狩の時には大名を遊ばしむ。寔よく天の遊ぶものにして貴賤貧福は人のくるしむなり。

前略

一逍遥遊先書は反古に可レ被レ成候。書直し進候。我もこれに遊ぶものニ候へは、ふかくくるしみも候はずゆへおもしろき事なく候。御やくそくの茶いかゞに候や待申候。以上

三月廿日　はせを

惟然丈

註、「逍遙遊」の文章は文字に出入はあるが、支考の『和漢文藻』に東花坊の署名があるので不審である。本文は闌更の『蕉翁消息集』に「加賀鱸屋茂休所持」として掲ぐ。

笑死名

昨日は御出之処他出折ふしせた邊へ參候而不レ懸二御目一殘念事ニ存候。然は貴様ニも近ゝ北國邊へ御下之由時分がら倦ゝ御太儀千萬に存候。もはや春ならで御上京あるまじく候。随分御無事頓而ゝめで度御歸京ニちらし。さては句事さのみよろしくも無レ之候得共御尋故申入候。

雪の朝ひとり干鮭をかみ得たり

如レ此ニ候。キ様へ餞別立事如レ此ニ候。くわしきは御歸京之時分と申殘候。かしく

霜月二日

註、杉風の『東日記』にある句だが延寶の書體でない。讃岐觀音寺町の森安華石氏から鑑定を求められた一通である。

連中衆宛

昨晩ゆる〳〵はなし申候。さて〳〵めづらしき會にて一入おもしろく存候。ふく汁會とは古今あるまじく候。いつれも〳〵おひたゝしきくひやう、目をおとろかし申候。此方儀は雜煮の餅にてふく汁の替を獨よろこび申候。何事も無ㇾ之よしめで度候。仍而一句

あら何ともなきのふも過てふくと汁

いかゞ候哉。祝して申參らせ候。くわしきは面上と申殘し候。

十九日　　はせを

連中衆

註、句は『江戸三吟』に出てゐる。「此方儀は雜煮の餅にて」など作爲の痕があつて面白くない。本文は西村燕々氏の『芭蕉翁の書翰』に引いてある。

破琴宛

以二手紙一申入候。其後は不二申通一いかゞ御暮哉うけ給たく候。此方此間は件の持病少指出候。遠方へは得出不ㇾ申候。唯庵にうか〳〵として暮申候。一二三日は快よく成候。是もは步行も成可ㇾ申候。さてはほ句

内裏雛人形天皇の御字かとよ

右の句ニて御さ候。いかゞ思召候哉。上巳之句いたし申候無レ之是にて仕廻被レ下候。以上

三月五日　はせを

破琴様

註、東京某橋新太郎氏の所蔵である。句は『江戸廣小路』にある延寳の作で、筆蹟はそれと一致しないため、年次を考定されない。

桃水宛

昨日蓮二坊ゟ之文共御届被レ下慥に受取申候。度々御世話に存候。貴様方には定て此中は祝言多嘸々にぎ／＼敷御事と察入存候。昨日此一句何やらかやら申入候。

年立や新年ふくへ米五升

おかしきなからまた祝して句も□て聟とのは御はなし可レ給候。

十八日　はせを

桃水様

註、蓮二坊を支考だとすれば、その改號は芭蕉歿後なので信じられない。本文は『芭蕉翁雑考』に收めてある。

浮草宛

口上

此間は松風丈へ御狀被レ下拜見申候。爾御無爲之由目出度存候。次第あつく成候而こまり申候。此方にもそく才ニ而居り申候。あせにひたし候故かほ句も出不レ申候。されば郭公の句御尋之所よろしからず候。申も面白もなき事ニ候。さりなから被二御待一候故申入候。

ほとゝぎす啼〳〵飛そいそかはし

いかゞ候哉。是ゟ外にハ出不レ申候。キ丈いかゞ候哉承度候。萬事貴顏ゞ。以上

はせを

浮草丈

註、句は『續虚栗』に見える。本文は關山大器が蕉藏を躰寫して置いたもので直ちに信ぜられない。

蘭齋宛

以二手紙一申入候。次第ニ無二余日一成行候。嘸ゞいそがはしく候半と察存候。隨分御はたらき金取集メ可レ被レ成候。春ハ又心ゆる〳〵と運ゞ出會たのしみ申事ニ候。我等事ハ天ちく牢人のとく庵ニうろ〳〵として春を待斗ニ候間、身ノ上も如レ此候。

年暮ぬ笠着て草鞋はきなから

如レ此之身の上一笑ゞ。何事春永ゞ節季候か相拶か。あなかしこ

極月廿一　　はせを

闌齋丈

註、句は『孤松』に見える『野ざらし紀行』の吟なので文意に添はない。闌山大喬の舊藏である。

三志宛

馬士はしらし時雨の大井かは
山城へ井手の駕かるしくれ哉

右之兩句時雨も數多いたし候へともさて〳〵よろしからず候。まだ此句にて哉。諸事早〻以上

廿三　はせを

三志丈

註、本文は井上辰九郎博士の所藏で、句と筆蹟のそれとの時代が一致しない。

喜八宛

はやく是へ御出可レ給候。晝時には京よりも客見え可レ申候。其前に拵へ置申度候。酒肴少し斗貴様御調置頼入候。

面白し雪にやならん今日の雨

十七

喜八との

註、積翠の『芭蕉句選句考』に「或人所持の文に」とあるが、句は『笈日記』に見え、句と文との年次が合はない。

和休宛

御文被レ下殊に何寄一種送り被レ下忝存候。此間もキ角子より届ケ物毎度御世話さつし入候。我等事當年は諸家へ御無沙汰、殊勢州之人々參候。上京之咄も御座候へ共まつ／＼春の事可レ然哉。其内に又□我下り候節之事、何がし咄し聞可レ申候。美濃より昨朝書狀參候。句集之下書書入之事いかゞにても申來候へ共、何にても可レ然哉。先／＼此句書入上候。

山路來て何やらゆかし菫草

何も其内拜顏□可ニ申上一候。早々以上

廿二日　はせを

和休老え

本文は金澤市杉野甲午郎氏の所藏である。碧梧桐氏の所見に據つたが文意のやゝ通じない恨みがある。

支考宛

また申入候。其角かせし句に

疊舟に乘るやふし見の桃の花

成ほと心ゝおい／＼候。

あまり桃の花見事に咲申候故前後をわすれ、あさ舟の畫舟に成候所はよ程おもしろく候。此類を我もせんとて

　最中の桃の中よりはつさくら

　あふきにて酒くむ形や散さくら

此二句をはき出し候か、中〱以其角が畫舟にはおよびがたく、又々取まかされ候事一入口おしく候。キ丈何か一句候□入候。

　　　十八日　　　　　　　　　　はせを

　　支考丈

註、河東碧梧桐氏が編者へ所見を報ぜられたので、「畫舟に」の作者は其角でなく、芭蕉の句も支考の入門前の作なので不審である。

　　無宛名

　　　贈杜國

　笠の緒に柳絡る旅出かな

腸御付可レ被レ成候。

註、重厚の『もとの水』にある一通で、句は芭蕉の作でない。

安齋宛

追啓、今日は日かよふて殿の尻まくり、と子供の口すさひを風與思ひ出し一句つゞり申候に付申入候。

須磨寺に吹ぬ笛きく木下闇

先〻キ樣御家内御無事の由何分目出たく存事に候。此方にもそく才に暮申候。毎日〳〵あほう共寄合口出まゝの事申居候。ちと〳〵御出待入候。

四月十一　はせを

安齋樣

註、關出大番の所藏、筆寫にかゝるもので、『笈の小文』にある句と文獻との不一致がある。

秋風宛

外に申入候。其角か出し候句に

ちる時は風もたのますけしの花

此句之心をふるまへて

海士の顔先見らるゝやけしの花

いかゞあるべく哉。とかく其角はほ句上手にて風もたのますなどゝ大ぎやうに申候。愚老は一句

之仕立ちいさく候。キ様了簡可レ給候。爲レ指事もなく候へ共、俳諧修行ならば、と角いふて見んがよろしく候。先書之とく二日にはかならず可レ被レ下二御出一待入候。以上

廿九日　　はせを

秋風丈

註、近江坂本の中邑翠濤氏所藏で、「海士の顔」の句は『笈の小文』に其角のは『句兄弟』にあるので、句の先後、同時が疑問になる。

無宛名

尙〻青のり二袋進上申候。

誠に御印迄に御さ候。

和及丈歸京候に付一書申入候。其後は御物遠に罷過候。次第に冷氣に趣候へども御家内御無爲御暮の由珍重の事に存候。此元我等も二三日以前に伊賀ゟ歸宅申候。彼方にても其元噂のみ暮申候。近き所にして度〻談合申度斗、其上彼方も茶の湯抔はやり申候。扨は櫻の發句此度書入懸二御目一申候。

芳野にてさくらを見せぬ檜笠

右の句にて御さ候。猶近日上京候て可二承申一候。以上

霜月十五日

註、本文は編者所見道具屋の手で賣ものに出たもので、今その所在が知れないから確に眞否を云へない。

はせを

喜八宛

扨々長二郎に能々御申聞可レ被レ下候。あまり〳〵世間まれ成夫婦いさかい[汚損]彦三はだし〳〵

御手紙の趣得其[汚損]其許にもかへしてにせわやかれ候へ共、とかく長次郎と言ふもの第一無法もの也。大にいつてつ成生れ付故、夫婦合よろしからず候。もはや此たびは相捨おかるべく候。先日ゟ愚身承居候へ共、態々指出不レ申候。此たびは御申こし、中々左様成やさしきてこにては參まじく候。大坂の天滿に申遣候。天滿の手こに可レ被レ成候。併御指圖故ほ句は其許へ申遣し候。

ときなをす鏡も白し雪のはな

これにていかゞあるべく哉。諸事御キ顏〳〵留申候。以上

十一日　はせを

山田喜八様

註、本文は上野沼田町の金子健次郎氏所藏である。『笈の小文』には熱田御修覆「磨なをす鏡も淸し雪の花」とあるので、文意と句との關係が不審である。

松風宛

誠に〳〵此世の極樂と云は外にはあらず御所の事也。此四五日以前上京候而御所の中を通りければ、折ふし雨ふりて心靜にありがたく、殿〳〵の紅梅今をさかりと見へ申候。音樂のおとさても〳〵そゞろに泪をながして通り侍りけるとて一句

紅梅や見ぬ戀作る玉すだれ

いかゞあるべく候哉。其許は毎日御所方へ御出入被レ成候人に御座候得ば、守はくたながら如レ此に候。能々過去に而ありがたき御縁をむすばれし御印也と隨分朝拜し奉らるべく候。先は右之句爲二御知一斗如レ此に候。くはしきはあとより〳〵。以上

二日　はせを

松風丈

註、本文は『芭蕉句選年考』に見え、現に名古屋市熱田の川津鬼胡子氏所藏であるが、筆蹟にやゝ不審がある。

嵐雪宛

比ハむつきの末、御所の中を通る折ふし春雨のそぼふり、いとゞ心もゆたかにて、御殿〳〵の紅梅さかりなりければ

紅梅や見ぬ戀作る玉簾

如レ此口すさび申候。さて〳〵極樂とは御所の中也、音樂の音のみ聞、有がたく通り申候。此等句は供連へも御傳可レ被レ下候。取込早〻。以上

三日　　はせを

嵐雪丈

註、桑水の『纂註芭蕉一代集』にあるが、前の松嵐宛、次の季吟宛のものと較べて孰れを確かとも云へない。

季吟宛

比は睦月の末、御所の内を通りければ紅梅は今を盛り御殿〱よそはひ、音樂の音身にしみ〱と聞へ唯有りがたく、そゞろに淚をこぼして通りけるとて

紅梅や見ぬ戀作る玉簾

いかゞ候や御聞可ﾚ被ﾚ下候。

貴公などは常住都の地に御入候故、さのみにも不ﾆ思召ﾆ候。誠の極樂とは御所の事なるべし。春興の御發句近便御きかせ被ﾚ下度候。すぐに上柳へ參り候故立寄不ﾆ申上ﾆ候。今すぐ成とも愚庵へ御光來可ﾚ被ﾚ下候。尾州よりも二三輩見え申候

□□□何事も面上可ﾆ申上ﾆ候

十七日　　はせを

季吟公

註、宛名が迂散であるのと本文が前の松嵐、嵐雪宛にあまり似過ぎてゐる。燕々氏の『芭蕉翁の書翰』に載つてゐる。

羅月宛

夏花集豚筆書抜は御仰候へ共、名前次第之跡書直し可レ申と存候へ共其儘と有レ之、いづれにも近日書添へ可レ仕候まゝまづ／＼御まち可レ被レ下候。

一、泰堂主に別書申上候まゝ是もきぬせつ下され、書寫之事被二仰越一候へばちかき內[不明]又は[不明]此通に御座候。

朝顔は酒盛知らぬさかり哉　　はせを

羅月様

註、沼波瓊音氏の『芭蕉全集』にある。文意不通の個所があつて肯定し難い。句は『曠野』に出てゐる。

風子宛

風の噂年〻承申候。ほ句之事御申被レ遣候。松しま行脚之春江戸出候句可レ然と存候。

草の屋も住替る世はひなの家

いづれもへ御心得可レ給候。近〻參候而可二申承一候。［　　］から申入候。おさよとの之事惰々仕合に存候。右へ申候よろこびとは此事存候。何角取まぜて可二申入一候。已上

廿一日　　はせを

風子丈

註、大河寥々氏の『芭蕉翁雑考』にあるが、原翰に接しないので眞否を確められない。

志斗宛

口上

昨日は大和より之書狀共數〻御屆被レ下忝存候。毎事御世話之事に候。さては貴丈にも大峯勤行に成候由承候。先〻有がたき事に候。頓而めて度御歸京待申候。仍而

夏山に足駄を拜む門出哉

御祝義までに申入候。くわしきは追而御歸京之刻と申殘候。以上

卯月十二日　はせを

志斗丈

註、「夏山に」の句は「奥の細道」にあるので、文通の「大峯勤行」の作には當嵌らない。本文は井上辰九郎博士の所藏である。

落水宛

追而申入候。貴丈御國本へ御下り之時分ちよと爲二御知一可レ被レ下候。書狀一通賴申度候。はやく認候而者日取の間違いかゞに候。夫故取認置不レ申候。二三日の間違などはくるしからずと賴入候。さてほ句は

さみたれにふり残してやひかり堂

鰐口の銘には和泉の三郎忠衡と彫付、鑓也。いかゞ候哉。隨分御仕合よく御歸京待入候。以上

十三日　はせを

落水丈

註、太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』に「種子爾仕舒所什」とある。文中に「御歸京待入候」と見えるので、細道行脚中のものでない。

季吟苑、

門弟車友と申者上京に付得二御意一候。時ならぬ雨中いかゞ御暮候哉。無二御徒然一と察入候。此元淋しく居申候。扨は御約束之歌書鄉士より借用候へば懸二御目一申候。御覽候はゞはやく御返し可レ被レ下候。外に

實盛の館にて

むさんやな甲の下のきりぎりす

此句無理にては無レ之哉御尋申上候。御便之刻御返し承度候。以上

廿八日　桃青

季吟公

註、本文に北海道網走町の川島復洲氏所藏で、寫眞を以て鑑定を求められたが、確に折紙のつけられないのを遺憾とする。

野休宛

追而申入候。亦句は數多く心違イ覺へ不レ申候。加州にて之句は

　秋すゝし手毎にむけや瓜茄子

又一笑が塚にての句は

　塚もうごけ我なくこゑは秋の風

右之所句ゟ外にはおぼえ[汚損]又々重而西信之時委ハ可二申承一候。以上

　十一日　はせを

　野休丈

註、金澤の桂井未翁氏から所見を報ぜられたが、後に實物に接して見ると眞蹟と云へない點がある。

清六宛

御手紙披見いたし候。貴様御かわりなく御入候よし一段の御事ニ候。東國より歸りの節二見にて曾良と別候時

　蛤の二見に別れ行秋ぞ

と申句いたし候。御尋ニ付書付進候。猶追々可二申進一候。少々御來待入候。以上

　廿一日　はせを

清六樣

註、句は『奥の細道』にあるが一見で曾良と別れた時の作でない。本文は名古屋市小野清六氏の所蔵である。『蕉影餘韻』の東京菊本直次郎所藏のものは小野氏未亡人から轉じて入手されたものかも知れない。

土芳宛

岡嶋吟助關東下向に付書簡早速に被ニ申遣一候。委敷樣子承り候。貴丈にも追〻余快いま程は大丈夫のよし大慶いたし候。野翁も奥州引杖のころはます〳〵花鳥にうかれ庵室に引籠、今年もはや暮ゆくまゝに

年〳〵や猿にきせたる猿の面

など申遣候。鏤中庵社中も誠の俳諧いたし候もののもあるましく、されど社中うち〳〵の中にて俳諧もまた〳〵出來るものに御座候。まづは早〻申殘候。かしく

十二月廿二日　　はせを

土芳丈へ

參る

註、文體が似合はしくない上に、本文の「奥州引杖」と句の年次が違ふ。本文は伊勢四日市の故鈴木香竹氏の所藏である。

去來宛

前日は寛〻閑對不レ淺候。然ば其角も一兩日中には東武へ歸國申候。左候はゞ今夕餞別一會いたし遣し度候條、丈草など被二仰合一暮前ゟ御來駕まち入申候。以上

長月十一日　はせを

落柿舍主人

尚〻今朝の吟御目にかけ申候。

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

古庵や瘦せず起さず萩の花　其角

註、本文は『一葉集』にあるが、其角が上方から歸つた年次と符合しない。

三　志宛　二通

追而申入候。日外其許に而御めにかゝり申候長州の西光寺御坊ゟ書狀參候。尤六條ゟ相屆申候。追而御便之由申來候。右返事其許ゟ長州へ御下し可レ給候。往來のかゝりものは此方へ御申こし可レ給候。さて相撲之ほ句は如レ此に候。

鶴の巢も見らるゝ花の葉越哉

十七日　はせを

三志丈

昨日は御出之處坂本へ參候。不レ得二御意一殘念に候。キ丈にも近〻長崎へ御下り之由。御太儀存候。隨分御支度可レ被レ成候。又〻大分御金もうけにて追付御歸り待入候。然者此書狀萩へお寄候はゞ文子方へ御とゞけ可レ給候。御逢候はゞ口上にも集物之儀御吶被レ下候。出來次第下し可レ申候。さてキ丈引當テ

　鵜の巣も見らるゝ花の葉越哉

右之句致候。猶頓而可二申承一候。以上

　　廿二日　　　　　はせを

　　三志丈

註、前のは「參州吉田、蓬宇藏」と『芭蕉翁眞蹟拾遺』にあり、後のは「松村桃水の手帳にあるを寫す」と同書の附錄に出てゐる。宛名も句も同じく日附は相違してゐる。兩者或はいづれかゞ僞作であらう。

芝柏宛

昨日は御手帋被レ下候處、折ふし近在へちよと參候而御報不二申通一候。先〻御無事御入候由何ゟ目出度存候。愚老不レ替暮申候。よて一句

　顏に似ぬ發句も出よ初ざくら

此句は有寺へひかんに參候而ふといたし候。おかしきながら心はよほどおもしろく候。キ様ほ句被レ成候はゞ御聞かせ可レ給候。又〻此方ゟも宜句も口すさび候はゞ可二申入一候、申たき事數〻候

へ共、唯今客來候故あら〳〵申入候。委は重て可二申承一候。以上

二月十八　　はせを

芝柏丈

註、本文は闌山大番の紙寫して置いたもので、句作は伊賀、芝柏は大阪の人、日付に相當する關係が考へられない。

雲竹宛

ひきやく便ながら申入候。いよ〳〵御替りも無レ之御入候哉。此許別事無レ之候。然ば近頃御無心之儀に御座候へ共、屏風□この一双分御認被レ下たく候。□竹斗□とかく御六ケしく候へ共□キ公□被レ成被レ下候様□被レ申候。とかく來月末迄に出來候様□願存候。さて又御ほ句はいかゞ出來申候哉此方□不出來に御座候。

たはみては雪待竹のけしき哉

ケ様□とかく□何分近日□内□上京。

廿日　　はせを

北向雲竹様

註、大河寥々氏の『芭蕉翁雜考』所載のもので缺字多く確な事を云へない。

金吾宛

野子御無異承申候。さては歳旦□と奉存候。此□申捨候

昆蒻のさしみも白し梅の花

右は□申候。

一、藤衛門殿えも可然御傳可レ被レ下候。尙重而心事申入候。以上

十二月九日　　桃靑

鳥井金吾様

註、句は『小文庫』に「刺身もすこし」と出てゐる。本文は『芭蕉翁雑考』に收めてあるが文意及び讀方に不審がある。

老草宛

飛脚使者申入候。過ぎし頃はこま〴〵との御状被レ下忝存候。爾御別條も有レ之間敷と押斗り存候。此許愚老無事居り申候。然は此四五日已前與風此句いたし候故申上候。

船になり帆になる風の芭蕉哉

右海邊にて寺の芭蕉見ていたし候。いかゞ可レ有レ之哉。其許御連中へよろしくたのみ入候。立ながら認候故あら〴〵申殘候。以上

廿八日　　桃靑

老草丈

註、積翠の『芭蕉句選年考』に「北平所持の眞書翰」として本文を掲げてあるが、頭註に連々も指摘した如く句は春色の

『徒移抄』（元祿五年刊）に一品の作となつてゐる。

清水宛

返〳〵何もへよく〳〵御心得可ㇾ給候。以上

此三度ひきやく出候事、急に承候而あら〳〵申入候。彌御無異珍重に存候。此表不ㇾ替くらし居候。深川へ引越參候而、人〻出入もすくなく悦申候。さては庵ノ見請ながら

舟に成り帆なる風のはせを哉

右之句致候へば、門弟共いづれにも能見立候とほめ被ㇾ申候。仍而キ丈申入候。猶くわしくは追日可ㇾ申承ㇾ候。以上

廿二日　桃青

清水丈

註、本文は土居剛吉郞氏の舊藏ながら、句は一品の作である事を打消すだけの反證が擧らない。

源吾宛

何ゝ何もへよく〳〵御心得可ㇾ給候。以上

此三度ひきやく出候事、急に承候而あら〳〵申入候。彌御無爲珍重に存候。此表不ㇾ替くらし居候。深川へ引越參候而、人々出入もすくなく悦申候。さては庵より見請ながら、一句

舟に成り帆なる風のはせを哉

右之句致候へば、門弟共いづれにも能見立候由ほめられ申候。仍而貴丈申入候。猶くわしくは追而可ㇾ申承ㇾ候。以上

廿二日　　桃青

大高源吾丈

註、前の清水宛と二三字相違するが全く同文で宛名だけが異つてゐる。名古屋市近藤三川氏の所蔵である。

露玉宛

先日は御手紙被ㇾ下候。自ㇾ是は御無音斗に候。先〻御無爲御入候よし目出たく存候。嘸〻此節は諸方へほう恩講ニ御出候而隙有間敷候。次第寒氣つよく何方もこまり入申候。夫に付一句申入候。

水鼻に誠見せけり御取こし

いかゞ思召候哉。是はキ樣へ嬉しがらせの句申候。猶又御恩を御よろこひ可ㇾ被ㇾ成候。委は縣ニ御目ニ可ㇾ申述ㇾ候。かしく

霜廿九日　　はせを

露玉丈

註、尚白の遺稿『忘れ梅』に「水涕に信(まこと)ありけり御とり越、千那」とあるので、文通の句に疑問がある。本文は大橋新太郎氏所藏である。

主水宛

此間は御狀之處、折節瀨田へ參居候而不レ能ニ即答一非ニ本意一存候。彌御堅固御勤仕之旨珍重存候。然者御門主樣御尋之由に而發句の事被ニ仰置一候。さのみ替りたる句にも無ニ御座一候得共任ニ御意一申上候。

水涕に信と見せけり御取越　　はせを

如レ此御座候。今日幸便御座候故此中の御報旁如レ斯候。尙委事は御下之時分ゆる〳〵と可ニ申承一候。愚庵へも時ならず客來候間麁書以及ニ御報一候。恐惶謹言

極三日

明石主水樣

註、積翠の『芭蕉句選年考』にある一通であるが、「水涕に」の句に就いての疑問は解決されない。

角上宛

口上

長濱の人未其許に御入候はゞ此句可レ被レ遣候。先刻御出候而御申置候書中之表得と見申候。天神へ奉納之句ならば

此寺は庭一ぱいのはせをかな

右之類よろしかるべく候。外には當分無レ之追而可ニ申入一候。以上

三日　はせを

角上子

註、加賀金澤の雪袋稿本『句空庵随筆』に載つてゐるが、「此寺は」の句に疑問がある。

一水宛

如行老御歸候に付乍レ便申まいらせ候。未餘寒强御坐候得共、彌御無爲御暮之由珍重の事に候。さては先頃留守間に御手紙、歸庵候而拜披申候處、內〻拔書之五册相認候而此度進申候。御心靜に御寫候而いつにても御かへし可レ被レ成候。さて又木曾路にて落馬の時發句申候事、

馬士に落さるゝ身は木の子哉

たはみては雪まつ竹の氣色哉

右之兩句御所望故書入懸ニ御目一候。尙又委細之儀者如行老御物語可レ被レ成候。不レ能ニ多筆一候。かしく

廿四日　はせを

一水丈

註、「馬士に」の句は所見なく「たはみては」は支考の句とも云はれる。本文は『芭蕉翁眞蹟拾遺』にあるが所藏者を記してない。

無宛名

雲竹老迄人遣候間一書申入候。次第に寒氣に赴候へ共、彌御無異御暮候やめでたく存候。此もと我等も漸〻二三日以前粟津より歸庵、其中加州か客來候而何角と取込候故、兼而御約束の發句延引罷成候。

馬士に落さるゝ身は木の子哉　　はせを

廿一日

午ニ歳暮ニ來中比には參候而可二申承一候

註、東京江村庄太郎氏の所藏である。黎明居紫舟氏の『芭蕉夜話』の寫眞版で見たので最後の一行は推讀である。

用和宛

口上

先日は爲二御見廻一御參被レ下忝候。彌御無爲に御入候由珍重之事に候。此方我等不レ替居候。御心やすかるべく候。さては此中初午にいなりへ參り候而一句

初午や狐の剃しあたま哉

右之句はいなりの外に、日來心やすく寄候家のばゞ法體之身になられ候故、其身を祝して口すさび申候。おかしき句ながら申入候。貴樣初午之句いかゞに候哉うけ給たく存候。御申こし可レ被

レ下候。此間は客來も無レ之、庵にさびしく居申候。猶重而ゝ以上。

はせを、

十七

用和丈

註、句は其角の『末若葉』に「是橘が剃髮人醫門を賀す」とあつて、文中の「心やすく寄鈸家のはゞ」の祝ひとあるのは不審である。本文は伊勢丹生村の小林榮太郎氏の所藏である。

深井宛

以二書面一申入候。先頃は態ゝ御文面忝存候。其節も御報不レ申誠に御氣の毒に存候。其内に法會も被二相濟一可レ申心違ひいたし申候。殘念に存候へ共當日間に合不レ申御ゆるし可レ被レ下候。麻布之日限とさし合候まゝこまり申候。且又此間素堂師より申譯も無レ之由別段に書面まいり申候。詠草板下に御書入之所は

己が身を枕に鴫のうき寢哉

御添筆賴入候。其内拜顏に可レ及候。御禮等可二申上一候。以上

霜月廿二日　はせを

深井樣

註、東京井上辰九郎博士の所藏で、文中年次を考證する端緒がないし、句は他に所見がないので可否を留保する。

松里宛

御便被ㇾ下殊に何寄之珍味送被ㇾ下御厚志之程不ㇾ淺忝存候。漸く一兩日此身手透に成り候。さて〳〵心外御無沙汰計、且又其御連歳旦集之御心掛、拙庵入句の事被㆓仰聞㆒先々此句を集に御書入額入候。

伊勢に居て見るならいかに初日の出

委細は拜顏萬事可㆓申上㆒候。右御禮報までに御連へよろしく御傳可ㇾ被ㇾ下候。かしく

二十一日　はせを

松里君

几下

註、桑田青風氏の『俳諧書翰集』所載の一通で、句は疑はしく文意も「此句を集に御書入」など不審である。

無宛名

御報

如有年之新春目出度候。御さゝわりものふ御歳し重ね候て大慶に候。又例之歳旦別而面白く候。神風之つらなりに能く侍へり候。

いせに居て見るならいかに初日の出

外にも侍へり候へ共、未見合も不レ仕有候儘いつれ跡ゟ可二申上一候。頓首

初五日　はせを

註、筑前幸袋町の實藤笑春氏の所藏で寫眞で見たのだが筆蹟に不審がある。

其徳宛

何ゝ御出かけにせんじ茶少ゝ、ちや菓子もあらば、かしく
暫うち絶御床しさ、唯今鱅と生貝貰申候。少ゝつかひ申入ありとも御越御料理被レ成ましくや。そのかはりには酒は御持參可レ有候。との外淋しくとりあへず古とをおもひ出て、

肴あり酒と客との冬こもり

十三日

其徳芳丈　はせを

註、本文は須賀川の矢部榾郎氏の所報であるが、句は他に所見なく疑はしい。

千六宛

いよ〳〵御無事のよしめでたく存候。義三郎にも全快にてなを〳〵悦入候。やう〳〵此比水口よりかへり申候。水口もみな〳〵無事にて傳言も御座候。先日は單物御越かたじなく、明日の事御申越、明日は井上へやくそくいたし申候。十七日からは參可レ申候。句を御たつね、山上にて

はき直す草履は遲し郭公

尙〻此狀御世話ながら御屆可レ被レ下候。而上申候。以上

十四日　はせを

千丈

註、句に作爲があつて信じられない。本文は東京菊本直次郎氏の所藏である。

無宛名

新曆之嘉義珍重奉レ賀候。然者昨日は御入來被レ下候處、他行殘念に奉レ存候。其節被二仰達一候儀承知仕候。

萬歳や宿を隣に明にけり

御一笑可レ被レ下候

三日　はせを

註、本文は岩代須賀川町の矢部榾郞氏から編者へ報ぜられたが、句は所見なく疑はしい。

山風宛

此間御申越候句之儀寶井氏へ申遣し置候。其砌は珍敷いも御送り下され、みな風味よろしく忝存候。早〻御禮迄如レ此に候。

六月朔日　　桃青

山風様

尙〳〵過日貴宅より戻りの節、俄に夕立大に困り入候。

夕立は繪にかく雨のすかた哉

註、本文は羽後大曲町にあるさうで、荻原井泉氏からその寫眞を見せられたが筆蹟及び句に不審がある。

無宛名

此度上り候を引切たるやうに皆おほさるゝと見へ申候。左樣にはなく候。日向殿在京の中にはやがて又まかり歸へく候。御はなむけ五種のうち、梅は所の名物なれば殊更ながめ入申候。

はなむけも都ににほへ梅の花

此事とも京衆のみやげにも何寄と存られ候。

わすれ申ざし難波津の春

引出とて祝ひの白茶

花の香も同じ祝ひの白茶哉

御覽有べく候。恐惶謹言

正月廿五日　　はせを

註、文中の兩句共に所見なく信を措けない。寫本『芭蕉消息集』に出てゐる。

杉風宛

御狀披見いたし候。其元御堅固と見へ珍重に存候。拙者無事に居申候。御心やすかるべく候。頃日いがへかへり申候て、をしつけまた〳〵いせへ出かけ申候。爰元に而發句も不ㇾ致候へ共、只いひすて申候一句、御尋ゆへ申進候。

剃にさへ出ぬ山かけや寒鮍鳥

一、素朴子御子達御達者と存候。よく〳〵御傳可ㇾ被ㇾ下候。當夏はぜひ〳〵御禮可ㇾ申候。歸菴可ㇾ致候。其節厚御禮可ㇾ申候。何も差たる事なく、珍しき事も申候はゞ可二申進一候。又松風もいまだ一所に居申候。余は何も御心がけ被ㇾ下まじく存候。以上

六日　はせを

杉風樣

註、句は類似のものも芭蕉の作には見えないので不審とせねばならぬ。本文は名古屋近藤三川氏所藏である。

加水宛

追々御狀被ㇾ遣申候。さりとては御覽心もとなく候。貴樣には入湯も相應候と存候に、御かへり之由に承申候。さては幾廻り御入湯候や。此方にも有馬へ下候樣之湯も無ㇾ之候。其角には貴樣方逗〻承候。二三年以前に愚庵も卅日斗も居申候へば望申事無ㇾ之候。一句

猿起て捨子に秋の風いかに

又ゝあとより可ニ申上一候

十七日　はせを

加水丈

註、讃岐牟禮の岡坂廬白氏の紹介で一覧したが、句は確に『野晒紀行』の誤傳で筆蹟も疑はしい。

智月庵宛

手帋忝拜見仕候。仰通一昨日唯三郎殿被レ參候處に、幸勢刕之友一兩輩同道候。旅中之事共物語り可レ致、また近き內集會も宜しからんと申、其忠召立も御座候間、且又御席に御ねんがたに御賴申あげ候。兎角御心遣無二御ざ一候やう、右御氣配にて御たのみ申上候。先比の本上候まゝ御受取置可レ被レ下候。昨夜も夜半過までさまぐ成出次第之事もふし、かく侍りて

花の跡尋ねきく日や郭公

御笑のたねと申上候。又店極日は追而可レ得二御意一候。とみなか樣に御傳へく候。とみなか樣には成任へ御入候。かしく

夏廿一　はせを

智月庵

註、「花の跡」の句は他見なく、筆蹟も文體も不審な點がある。本文は名古屋近藤三川氏所藏である。

無宛名

先刻御尋之處折節他行不ㇾ得二御意一殘念に候。

笠の紐よいかこちむけ秋ひより

時分能候。寛〻御入湯被ㇾ成候而御歸國待入候。以上

八月八日　はせを

註、金澤市の關川篩孝氏の舊藏である、句は他に所見がない。

万水宛

以二手紙一申上候。其後は不二申通一候。いかゞ御入候哉。次第に夜もながく成候。此元にも一段そく才に居申候。さて〳〵人出入多くこまり入候。とかく石山のおくへ入可ㇾ申哉と存じ候。さて又貞德翁五十年忌追善の句自笑が遺候句おどろき申候。

秋風の顏見ぬ迄よ細すたれ

ケ樣にいたし庚物と存候。此方共は及不ㇾ申候。貴樣いかゞ思召候哉遣候。粟津の庵へ御來待入候早〻。かしく

廿一日　はせを

万水丈

註、文中の「貞德翁五十年忌」は元祿十五年に相當するので信じられぬ。本文は伊勢桑名の故天春靜堂氏の所藏である。

無名

よし世上發句も不レ承候。あさましき風雅のありさまに候。予も暫時口を閉申候。

はせを

無名宛

註、奇淵の『枯野集』に出てゐる。署名はあるが斷簡なので可否を云へない。

曲水子の書狀御もたせ被レ下辱候。是は去來が指圖と相踀え申候間、只そのまゝにて可レ置候。支考が申處一理御坐候條、愚老も同心仕候。委は後刻。

杉風宛

註、重厚の『もとの水』に掲げる文通の一である。

枕屛風むた書いたし則御使え相渡申候。襦半せんたく糊少〻と御申付可レ被レ下候。

はせを

杉風様
御ふくろ様

註、『もとの水』にある一通で眞否を確められない。

三碩宛

傘下駄もたせ被レ下御世話忝存候。蚊帳鼠に喰れ申候。おまきに御ぬはせ可レ被レ下候。焼跡蚤蚊多、こと之外朝寐仕候。

七日　はせを

三碩様

註、八王子市の淺野義王氏から鑑定を求められたが、『もとの水』の一通で眞蹟は別人である。

太右衞門宛

初かつを御振舞被レ下候由、かゝる隱居の似合しからず候得ともおもと殿御志、追付參上。

桃青

太右衞門様

註、重厚の『もとの水』にある一通である。

仁兵衞宛

口上

此頃之俳諧殊之外不出來に候得共、任二御望一寫進上いたし候。尤其角が無分別なる所、中〳〵及べからずとみな〳〵驚申事に候。

廿二　はせを

仁兵衛様

註、これも重厚の『もとの水』にあるが、直ちに信ずる譯にいかない。

無名宛

雲水歸京被レ成候に付一書申入候。其後は不二申通一候處、御無爲に御暮の由珍重候。此元我等も無事居申候。先可二申入一は貴丈にも先比は御痛處指出候由、内々御持病にて可レ有と奉レ存候。併御氣遣被レ成事には無レ之候間追付

註、本文よ『祖翁消息集』にあるが「追付」の次は記してないので、多分汚損して判讀し得なかつたのであらう。

杉風宛

昨日は澁紙澤山御惠辱存候。然處昨夜惟然一宿、例之むだ書、剩、筆の先棒になし困入申候。今四五枚申請度候。此人に御こし可レ被レ下候。

七　はせを

杉風丈

註、惟然が江戸の芭蕉庵に寄寓した年次は考へられない。本文は『もとの水』に出てゐる。

安木宛

返〻其許たれ〳〵によろしく御心得可レ給候。以上

一筆申入候。其後は久しく不二申通一候。弥以御家内御別儀も無レ之哉と押斗存候。愚老も四五日以前ニ江戸ゟ歸り候。于レ今何角取紛居り申候。其上人出入多こまり入候。キ様事も日々ニ御噂申候。内之衆忝いかゞ御ざ候哉。是又承たく候。さてはまりこにて一句致候。

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

いかゞあるべく候哉。我ハさほどにも不レ存候へ共、女水ふど殊之外ニほめ被レ申候。先キ様へちよと申入候。其内見合あは津へ御出待入候。諸事御面上〳〵　以上

廿九日　　はせを

安木丈

註、本文は攝津芦屋の柴田勉次郎氏の所藏である。文と句とが一致しない。

旃身宛

追以申ら〳〵。さては句之事つちに七たび鐃鑄に三度成へし。

九たび起ても月の七つかな

侘て住月網笠の窓を家として

右之兩句申入候。外には句にはたらき無レ之候故書入不レ申候。十句斗之内にて候。支考が句ゟ外に今年名月之句に是ぞと思ふ句無レ之候。猶追々可二申述一候

廿八日　　　　桃青

旍身丈

註、文中の『侘て住』の一句は『武藏曲』から誤寫した『泊船集』からの孫引なので、僞物なる事この一點で明白である。本文は伊賀で一覽した。

假作

西天庵文曉の『芭蕉談後篇』に載する書翰三通は、芭蕉の名に托した創作であるが、往々これを信ずるものがあるので、假作としてその蒙を辯じかた〲附錄する。太蟻の『翁反古』に載する三百數通は世人を欺瞞したものであつて、同じ假作ながら今は信ずる人もあるまいから本文を採錄するのは見合せた。

其一

一彌御無異珍重存候。申合候通爰元住吉市後は直に橋立と志候。誰彼同伴之望も有ㇾ之候得共、先支考惟然と相究候。一類之者別而半左衞門より萬里の波濤を渡り候事頻にとゞめ申候故、橋立迄と申斷出立候條必々當分は御沙汰御無用存候。一年なりとも年若く病もつのり不ㇾ申中、薩摩潟見申度ふり切て出申候。乾坤無住水上の泡沫稻妻之境界に候故、行先野山草木之間にて土を枕として、此生終り可ㇾ申覺悟に候。是を心の槃に彌相決候得ば天地之間居所究申間敷と存候。九州に渡り候はゞ早速致ㇾ通路ㇾ可ㇾ申間其元も早々先より待入候。便宜に魯町、卯七にも此由遺置度候條、其元よりも內々御申遺置可ㇾ給候。爰にて後の月見終り候故、雪、時雨は道々の詠にして何國の石上にて老の年を重ね申哉と存候。さればいとゞ珍しき旅行と存候。不知火は七月末比と聞候得ば關の渡りは臘月比にて可ㇾ有ㇾ之候。彥、霧島と打廻り候はゞ彼是唐船を見候は子規も迎可ㇾ申哉。其つもりにて御飛杖可ㇾ有ㇾ之候。爲ㇾ御覺悟ㇾ申遣置候。併瘦枯た

るはせをを見んとて若き女原の立さわき候はうたてく候。惟然か我儘、支考か頬の皮の厚き、宿々もおかしき旅中にてにき〳〵しく候。一笑可祝

九月十六日　はせを

去來様

其二

一　好便に任候。此秋は須磨、明石の方にもたゞすみ不知火の旅寢も望に候。又もろこし船見まほしく其事は去來にも申通候。炭俵に御句漏候事御残念之由御尤に候。須磨の鴬は兼て野坡も覺悟にて候所、執筆之誤にて漏候にて可レ有哉。今度は我々〳〵と同心者可レ有レ之と存候故深隱便し、筆まめの支考、惟然のみ同伴候。何れ西國之一集組立可レ申候、何事も對面の時と存候。當年中とは存候得ども寒中怖候故、梅ちる比にも成可レ申哉。草々以上

九月廿七日　はせを

卯七様

園女亭

しら菊の目にたてゝ見る塵もなし

菊の香や奈良には古き佛たち

住吉の市

升買て分別かわる月見かな

所思

此道やゆく人なしに秋の暮

尙々晉町、牡年兩子同樣に御披露賴存候。

其三

一　江戶の句は兎も角も我ら句を講釋したる樣にとは我句を我と講ずるは鼻毛の延たる事に候。尤唐土の詩文は故事古語又は深意ある故に物に因て講じる事もあると也。和歌とても後の講釋なとはあるべし。我句をわれと講釋せしは人丸已來不ㇾ承候。やつかれむづかしき句をいたしたる事なし。人の句の聞へぬといふは、我俳諧の其域に至らぬ故也。餘人の句の聞ゆる樣にずいぶん修行し給へ。短き桔梗にては深き井の水は汲れぬものに聞傳候。不悉

四月十日　はせを

美濃御連中

註、本文所載の『芭蕉談後篇』は、肥後八代の正敎寺に現存する文曉の遺稿である。黒田源次氏の『芭蕉翁傳』に飜刻されてゐる。本文の其の一は桃隣の『陸奥衡』に「此度は西國にわたり長崎にしばし足をとめて」とあるのから作爲したので、八月九日付の去來宛及び九月廿三日付の家兄半左衞門宛の文通に照らせば「橘立迄」などゝ云ひ紛はしをする筈なく、旅程は大坂から伊勢へ參宮する事に內定してゐたのである。本文の其の二は『去來抄』に卯七の「うぐひすの海

隔てなく須磨の浦」の野坂句評から「野坂ゟ發語にて」と附會したので、同じく文曉の刊本『芭蕉談』にその一項を布衍し、あたかも芭蕉の刪存なるかの如く記述してあるのと同一轍である。本文の其の三は芭蕉の遺語にあらでもがなの蛇足を添へたもので、文中の「短き結梗にては」は「柄尺」の誤讀であらう。

追加

本集再版に際してその後發見した書翰の中で内容の確實なもの三通を追錄する（晋風）

了水宛　元祿二年

追而申入候外に六かしながら松風へ

以二手紙一申入候。其後はひさしく不二申通一候。いよ〳〵御無爲御入候哉、うけ給たく存候。此許愚身無事ニ居り申候。信州ゟのくたびれ于レ今やみ不レ申、庵ニ計居候て情をつくし候。よ事にいそがしき時分故、何所よりも見へ不レ申、さて〳〵こまり申候。

とんぼうの取つきかぬる草のうへ

右之句候故申遣候。其元何ぞめづらしき句も候はゞ、御きかせ待入候。少此方へも出來待入候。

以上

廿二日　はせを

了水丈

註、富山縣井波町宇野久敬堂氏の所藏である。宇野氏は黒髮庵の管理をなし蕉門諸家の名品を蒐藏されてゐる。

志津馬宛　元祿五年

追て唐筆一枚御めにかけ候。善悪之義御覽分可レ被レ下候。此方の功者衆へ見せ申候共、聢與知不レ申候由〔汚損〕

淺井氏御歸京ニ付一筆申入候。其後ハ御様子不レ承候。彌御別義無ニ御座一珍重此事ニ存候。

句、郭公なくや五尺のあやめ草

いかゞに候哉

さてハ此間御發句御書入被レ下拜見、偕々よく出來申候。驚入存候。若竹を柳の御見立、さて〳〵能御思召入共に存候。門弟へ申きかせ候所いづれも肝をつぶし申候。

一、先達而御無心申入候額字之事、近比々御六ケ敷ながら何とぞ近日ニ御認御こし可レ被レ下候。寺らも度々被ニ相尋一候故又申入候。若不レ苦候はゞちかき內ニ、御なぐさみながら愚庵へ御出可レ被レ下候。何角つもる御物語可仕候。取込麁筆御免々

五月十一日　　はせを

佐々木志津馬様

註、東京の加藤紫舟氏が、或人から鑑定を依賴されたと云つて見せに來られたものである。

許六宛　　元祿六年

御細簡辱致ニ拜見一、愈御無事被レ成ニ御座一候而珍重不レ過レ之奉レ存候。先日は早々御入來候て又忝、少之間素堂に罷有、不レ得ニ御意一千萬御殘多存候。年明候而少持病心に罷有候は餅のとがめにや

と存候。昨日は淡州公へ參、御宅へと存候處、段〻他家へ入重り日半ニ成候故延引仕候。今日と明日難レ去隙入御座候間又延引、十五六日の間ニ心懸罷有候間、かならず御尋可ニ申上一候。彥根ゟ卷など參候よし珍重一覽申度候。若急々ニ逢被レ成度事も御座候はゞ、十四日御出可レ被レ成候。大かたは十五六の間御見舞可ニ申上一候。雨天大風ニ御座候はゞ、又々延引可レ仕候。以上

十二日　はせを

許六雅丈

貴樣

註、奈良縣橿原町辻村精一氏の所藏である。筆蹟には疑ひを存せねばならない點もあるが、內容は確實のものと思つた。

芭蕉書翰考

勝峯晋風

人一代の趣味性は文學的な作品を通じてよりは、實用上の目的から行使される書翰において、むしろ其の人格及び生活を不用意な筆端に反映するので、文學上に有名な人の書翰は自叙的な傳記資料たると共に、書翰そのものが趣味的に高く評價されるに至るのも道理あることである。芭蕉の風雅道への歸依者が芭蕉の書翰を彼の存命の時から敬虔的に取扱つたのも其の一つの現れである。其角がその著『新山家』(貞享二年刊)に太巔和尙の訃を惜む書翰を揭げたのを嚆矢に、路通は『勸進牒』(元祿四年刊)に近江から江戸勤番の曲翠へもたらされた一通を記錄してゐる如き、芭蕉の遷化後早くも一年、支考の『笈日記』(元祿八年刊)に嵯峨から彼へ、江戸から大垣の荆口へ、同じく梅丸への三通、その梅丸宛のものは如行の『後の旅』(元祿八年刊)にも收めて追慕の一端に資されてゐる。支考は猶『梟日記』(元祿十一年刊)に遠く九州へ行脚して豐後日田で、はからず正秀宛の一通に接した喜びを敍し、その著『國の花』(寶永二年刊)に木因宛の二通を載せ、蓮二坊の名に託した『十論爲弁抄』(享保十年刊)に芭蕉の遺言狀三通を初めて發表してゐる。許六は江戸から彦根の彼宛の一通を雲鈴の『入日記』(元祿十三年刊)へ覆刻を許し、許六門の孟遠は『木葉漬』(享保二十年刊)にこれまで內祕の芭蕉が門人の三つ物を許した許六宛の一通を公表してゐる。

や〻年を隔てゝいよ〳〵芭蕉の人格への限りなき思慕は、書翰の様式・書體をさながら偲ぶべく、千代倉鐵叟は『伊羅古の雪』（寶暦三年刊）に其の祖寂照宛の一通を自筆のまゝを摹寫してゐる。芭蕉の書翰への關心がこゝまで到れば深い心構へもなく書下したものさへ、俳文の規準又は書翰文範たる意味附が行はれる事となり、雪中庵蓼太の校合せる『芙蓉文集』（寶暦十年刊）には木因と崇の離附合に就いての問答體な書翰外五通を採錄してゐる。さうして更に芭蕉の筆蹟鑑賞及び眞贋鑑定のため、水上亭桃鏡、『芭蕉翁眞跡集』（明和元年刊）に杉風・嵐蘭などへの消息十二通の筆蹟摹刻の企圖ともなつたのである。既に一帖の正確な手鑑を要求されるまで、芭蕉の偽筆者が跋扈するに至つたからには、それが殆んど斷簡的なものとは云へ、驚くべし三百通に達する書翰を偽作する芭蕉冒瀆者の出現をば强ち偶然視せられないかも知れない。これが即ち現代に及んで二三の活字飜刻書が行はれる松岡太蟻の『翁反故』（天明三年刊）の正體である。『翁反故』には百五十年後の今日依然たる瞞着性を持つ如く巧みな偽裝がされてゐる。太蟻の發表した『翁反故』なるものは、美濃の梅石が芭蕉からの文通、消息を悉く其の陽花庵の天井に張つて置いたものだと云ふのである。太蟻はそれを誰から入手したのか。亡師の伽香子大魚が「天井の襖に張りし反古を巻き」これを大阪へ持戻つて太蟻へ讓つたと稱するのである。大蟻の偽裝工作は紙魚に文字の蝕まれたもの數十枚を江戸日暮里の靑雲寺に埋めた上、書家東江源鱗に囑して一碑を立て『翁反故家碑記』（天明三年刊）を板行した策動に起つて、保存にさし閊へない反古を茶人不昧公の舍弟爲樂菴雪川公から、石壽秀國、谷口樓川、交買名の江戸座俳人及び下は板木師に至る希望者への頒布に成功したのであ

る。『翁反古』はその句とその文とに割愛した人名を添へてあるが、僞作に容易な口上書の體裁で、日附は正月から十二月に至つて發信の場所は同一である。芭蕉は美濃には隨時掛錫したけれど一ケ年に渉つて定住した事實はない。宛名は梅石の外に三十餘名を拵へて芭蕉の門人視される者を避けた點にも、或る「からくり」が見透かされる。書翰の年次を隱蔽して疑惑の眼を免れようとしながら、迂濶にも『奧の細道』の逸文である忍ぶ文字摺の句文を挿入したので、すべて元祿三年以後の文通であらねばならない撞着を來してゐる。書翰の現實性を僞裝するつもりの「明日其角可レ參存候」の一通を伏線に、別の「昨夜其角伊せよりもどり申候由」への淺墓な聯絡附けは、其角の上京が元祿二年でその時芭蕉は『奧の細道』の旅にあり、ふたりは決して出逢ふ筈がないから、こゝに事實の矛盾と虛僞の破綻とを露呈してゐる。『翁反故』の存在は芭蕉の書翰に對する拭ふべからざる一大汚辱である。陋劣な僞書『翁反故』に對比して同時代の『芭蕉消息集』(天明六年刊)には、編者たる半化坊闌更の眞摯な蒐集上の勞苦が拂はれてゐる。書翰は蕉門の後裔に就いて實否をさぐり、本文の所在及所持者を註して合計二十五通を收めてある。その中五通は『芙蓉文集』に所載のもので餘は悉く未發表の書翰なので、闌更が私意を以て前後を省略することを見合せ、年次の疑惑を招く挿入句に關して本文にあるものと、編者の後註せるものとの別を斷り書して置いたならば、一層信憑さる可きものをとその點の不用意が殘念にも考へられる。

芭蕉の書翰は『蕉翁消息集』を唯一の單行本として、前落柿舍重厚の『もとの水』(天明七年刊)に十二通を蒐集してある事も逸してならない。『もとの水』は「芭蕉翁發句集」の內題で句中に書翰

を配してあるので、本文と句との區分が曖昧でそこに疑問があつたが、三碩宛の書翰が幸ひ淺野義王氏の許に殘存して兩者の別は明確に知られたのである。これは書翰の蒐集を目的としたのでないが積翠の『芭蕉句選年考』(文化二年寫)には、句の年次を考證する新書翰十一通を引用し、士朗の『枇杷園隨筆』(文化七年刊)にも見聞せるもの六通を手錄してある。その前、岡崎藩主三秀亭李喬の如く芭蕉の書翰一通のため領內に碑を立て『旅の日數』(寛政五年刊)の眞蹟を開板したり、その又前には松露庵烏明の『ふたつの文』(安永三年刊)の如く其の二通を獲てこれを外題に集を作つたり、一二通の發見報告をしたものにはいろ〳〵あるが、書翰の本文を注解した單行本は蝶夢の遺著『芭蕉翁三等之文』(寛政十一年刊)あるのみで然も特筆してよい內容である。

古學庵佛兮・幻窓湖中共編の『俳諧一葉集』(文政十年刊)は芭蕉一代の文獻を集成して、消息之部に六十八通を收錄した努力は認識されるが、新規の書翰は十二通で餘は前掲諸書からの拔抄である。殊に況んや『一葉集』の剽竊本たる酷評がある古絲舍默池の『俳諧袖珍抄』(嘉永五年刊)は僞書『翁反故』を盲信して附載せる分を除けば、『一葉集』に加ふるもの僅に三通に過ぎないのである。未刊の書翰集には伴蒿溪手澤の『芭蕉翁文の宇津志』及び『祖翁消息寫』(天保七年稿)があるけれど、大抵既出のもので新書翰は一二通より無い。藻魚庵太蟲がそれ〴〵の所藏者に就き『芭蕉翁眞蹟拾遺』に筆錄したものは、全然未發表のもの二十九通に及び、稿本のまゝ現に東京高安月郊氏の許に挿架されてゐる。太蟲の稿本は高安氏の好意で永く借覽し手稿の年次を考證しようとしたが、其の師孤山堂卓朗の『俳諧道の枝』が文久三年起稿された以後に屬する事を推知し得るに

止まつた。

芭蕉の書翰に關する明治以前の主要な文獻及び記錄は上述の如くである。それらの諸書に洩れたる書翰の蒐集は私の宿望とするところで、古き記憶を喚び起せば明治三十六年の頃、故齋藤雀志翁から眞蹟の書翰一通を割愛された事がある。黄口の一少年の單純なる趣味の對象としてゞ、これを動機に蒐集に着手した譯ではない。確たる企圖を立てゝ計劃的に現存書翰の蒐集に志したのは大正十三年からである。其の結果本書翰集に收錄せる總數三百三十一通の半數、即ち百六十通の現存書翰に接する望外の好成績を擧げたのである。眞蹟に接して既出のものの誤脫又は省略された箇所を補つたのは云ふまでもなく、『笈日記』所載の原翰から芭蕉の甥に桃印なる者があつて元祿六年深川の庵中で病死した新事實を知り、又『梟日記』抄出の原翰で晩年の行動が明白になつた如き一に眞蹟檢討のたまものである。現存書翰の眞否を問はず其の所在別は、東京（三十九通）名古屋（二十二通）金澤（十六通）伊勢（十五通）伊賀（十四通）大阪（八通）の順位となり、芭蕉生前における蕉門分布狀態に適合する事は、偶然であらうが又爭へないやうな奇異な現象であると云へよう。

書翰全體から無宛名の三十二通を除き宛名別にすると合計百五十三名であつて、芭蕉の交際範圍がこれでほゞ知悉されるうへ、五通以上の宛名者は曲翠（十四通）去來（九通）杉風（七通）知足（六通）猿雖（六通）意水（六通）許六（五通）木因（五通）及び家兄半左衞門（六通）であるのは、芭蕉の私生活と交渉の親疎を直ちにこれで決する根本資料扱ひにはされないが、芭蕉

の書翰で金錢問題に關するものは曲翠へ金一兩二分の融通方と、去來へ旅銀二分の無心と此の二通しかないので、金の事まで心の底を割つて相談した曲翠と去來への書翰が多數な理由を了解されるであらう。

最後に書翰を通じて感受される芭蕉の氣分は常に明朗で、彼の自我愛の閑寂な境地に即すれば、必ずその筆へ憂鬱性の煩ひすべき筈だのに、書翰に現はれた氣分、感情は秋天のやうな清澄さで、憂鬱な雲は一片さへ浮んでゐない。去來への「おしつけ貰ひ溜」だの「我等事に候へば得なす間鋪候」だのと、金の事となれば卑屈な暗い氣持になる者にはとても書けない明朗性がある。北枝宛と思ふものの「其許大雪の由、一尺計は此方申請度候」に至つては、天眞の朗かさに諧謔の拍車を加へた言葉で、かうした書狀を受取つて口邊に微笑を綻ばさない者は無いであらう。不快な印象をあたへる虞れがある短册の所望を斷るにも、常にその點をはつきり輕く突ツぱねて嫌味にならないのも、芭蕉の書翰には眞摯な七分の迫力と、明朗な三分の洒脫を特徵とする其の效果が然らしむる爲であらうと思ふ。

126

（榎本製本）

昭和九年四月二十日印刷
昭和九年四月二十五日發行
昭和十五年十月一日第四刷發行

芭蕉書論集★★

定價四十錢

編者　勝峯晋風（かつみねしんぷう）

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　井上源之丞

凸版印刷株式會社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話九段　〇〇一八七・〇〇一八八番　〇〇一八九・〇〇一八〇番　一〇二三一番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら、洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても、早速お取替致します。

讀書子に寄す

――岩波文庫發刊に際して――

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十册を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈々重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益々發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫最新刊書

既刊一一五二册（昭和十五年九月）

- 虛榮の市（五）　サッカレ作　三宅幾三郎譯　★★
- ギリシャの踊子 他四篇　シュニッツラー作　番匠谷英一譯　★
- ベラミ 下卷　モーパッサン作　杉捷夫譯　★★
- 葉隱（上）　和辻哲郎 古川哲史 校訂　★★
- 憲法義解　伊藤博文著　宮澤俊義校註　★★
- 南總里見八犬傳（八）　曲亭馬琴作　小池藤五郎校訂　★★★
- 元祿快擧錄 中篇　福本日南著　★★
- 平凡 他六篇　二葉亭四迷作　★★
- 男やもめ 他一篇　シュティフター作　加藤一郎譯　★★
- ベルタ・ガルラン夫人　シュニッツラー作　伊藤武雄譯　★★
- 眞理とは何か　シェストフ著　須田禮太郎譯　★

- 人文地理學原理 上卷　ブラーシュ著　飯塚浩二譯　★★★
- うた日記　森鷗外作　★★
- 息子たちと戀人たち（二）　ロレンス作　本多顯彰譯　★★
- オーベルマン（上）　セナンクール作　市原豐太譯　★★★
- 藁と泥　ブラスコ・イバーニェス　高橋正武譯　★★★
- 大鹽中齋 洗心洞箚記　山田準譯註　★★★★
- 化學の學校　オストヴァルト著　都築洋次郎譯　★★★
- 聖教要錄・配所殘筆　山鹿素行著　村岡典嗣校訂　★
- 漱石小品集　夏目漱石著　★★★
- クリスチナ・ロセッティ詩抄　入江直祐譯　★★
- 魔の山（三）　トオマス・マン作　關泰祐 望月市惠 譯　★★

文庫目錄

「解說目錄」當分品切乞御諒承。「書目綜覽」は御申越頂けば早速お送り申上げます。

三つの物語	フローベール作 山田九朗譯	★★
科學談義	チィ・エッチ・ハックスリ 小泉丹譯	★★
古今著聞集 上卷	黑板勝美校訂 丸山二郎	★★★
常山紀談 下卷	湯淺常山著 森銑三校訂	★★★
童話集 一房の葡萄 他五篇	有島武郎作	★
虛榮の市 (六)	サッカレ作 三宅幾三郎譯	★★
聖アントワヌの誘惑	フローベール作 渡邊一夫譯	★★★
孝經・曾子	武内義雄 坂[illegible]太郎 譯註	★★
見聞談叢	伊藤梅宇著 龜井伸明校訂	[illegible]
日本の目覺め	岡倉覺三著 村岡博譯	★
千一夜物語 (一)	豐島與志雄 佐藤正彰 渡邊一夫 譯	★★
夏の夜の夢	シェイクスピア作 土居光知譯	★★
未成年 上	ドストエーフスキイ作 米川正夫譯	★★★★

形而上學	ハンス・ドゥリーシュ著 淸德保男譯	★★
古事記傳 (一)	本居宣長撰 倉野憲司校訂	★★★
澀江抽齋	森鷗外作	★★★
魔の山 (四)	トオマス・マン作 關泰祐 望月市恵譯	★★
感情教育 上	フローベール作 生島遼一譯	★★
判斷力批判 下卷	カント著 大西克禮譯	★★
レオン・パジェス 日本切支丹宗門史 下卷	クリセル神父校閲 吉田小五郎譯	★★★★★
古今著聞集 下卷	黑板勝美校訂 丸山二郎	★★★
カインの末裔 クララの出家	有島武郎作	★
エリヤ隨筆	ラム著 戸川秋骨譯	★★★★
アグネス・ベルナウエル	ヘッベル作 吹田順助譯	★★
道德系譜學	ニイチエ著 木場深定譯	★★
國富論 (一) (第一編)	アダム・スミス著 大内兵衞譯	★★★★

35

岩波